Archaeological Research

at

the HOTAKA TUMULI

July , 2014

Department of Archaeology,
Faculty of Letters,
Kokugakuin University

4-10-28 Higashi, Shibuya-ku, Tokyo, JAPAN 150-8440

穂高古墳群　2013年度 発掘調査報告書　國學院大學文学部考古学研究室

國學院大學文学部考古学実習報告　第50集

長野県安曇野市

穂高古墳群

2013年度 発掘調査報告書

2014.7
國學院大學文学部考古学研究室

國學院大學文学部考古学実習報告　第50集

長野県安曇野市

穂高古墳群

THE HOTAKA TUMULI

2013年度 発掘調査報告書

2014. 7

國學院大學文学部考古学研究室

緒　　言

2009年に２基並んで存在するＦ９号墳とＦ10号墳の墳丘測量を行い、Ｆ10号墳の墳丘と石室がほぼ原形に近い状態で残っているのに対し、Ｆ９号墳では墳丘がかなり崩れており、石室上部も破壊が進んでいることを確認した。

2010年以後は、比較的保存状態の良好なＦ10号墳は発掘せず、現状のまま後世に残すこととし、破壊が厳重なＦ９号墳の石室構造・石室規模・石室構築法・副葬品の内容・古墳築造時期・墳丘規模を明らかにするための周溝の発見を目的として発掘調査を継続してきた。同時に、穂高古墳群全体の中でのＦ９号墳・Ｆ10号墳を歴史的に位置づけるため、穂高古墳群全体の現状調査も行ってきた。

以後、長雨に祟られてほとんど作業できない年もあり、毎年10日間という調査期間の制約もあったが、2013年度までの調査の中で、Ｆ９号墳から、原位置を保たないが、土師器・須恵器・鉄鏃・刀子・馬具・釘・勾玉・管玉・切子玉など古墳時代から奈良時代までの遺物が確認できた。2013年度に石室床面近くで須恵器が集中的に並ぶ土器集中区を確認できたことは、石室内での副葬品・追葬品の在り方を知る貴重な資料である。これ以外にも近現代の釘や銭貨も多数得られたが、これらはかつて墳頂に立てられていた社に伴うものであり、墳頂には社の鳥居の礎石も現存している。ちなみに、社を建てる時に石室構築石を叩き割って石室を埋め立てて基盤としたようで、石室内には墳頂から約60㎝下まで割石が隙間なく埋められていた。

Ｆ９号墳の調査もほぼ次年度で終わりそうな段階を迎えているが、昨年までの調査の結果、様々なことが明らかになりつつあり、詳細は本文に記してあるとおりである課題も残されている。

長野県は縄文王国として知られ、数多くの縄文遺跡や多彩な遺物に恵まれているが、優れた古墳文化も生み出した地であり、古墳時代前期から古墳時代終末期まで数多くの古墳が築かれてきた。土ではなく石を積み上げた積石塚が数多く残るのもこの地の古墳時代の特徴の一つといえよう。また、飛鳥時代から奈良時代には仏教の普及に伴って各地で古代寺院が建立されたが、穂高古墳群が築かれた安曇野にも明科廃寺があり、古墳時代から古代律令国家への道程も含めた安曇野の歴史を考えることが必要であろう。

最後になりましたが、昨年度の調査に際しても長野県教育委員会・安曇野市教育委員会・国土交通省関東地方整備局・あづみの公園歴史愛好会を始めとする多数の機関や数多くの個人からご支援とご援助をいただき、調査を行うことができました。文末ながら記して深く感謝の意を表します。

2014（平成26）年７月10日

國學院大學考古学研究室
吉田　恵二

例　　言

1．本書は長野県安曇野市穂高柏原に所在する穂高古墳群Ｆ９号墳発掘調査の記録である。
2．本調査は國學院大學の「考古学調査法」の授業の一環として、2013年８月３日から同年８月12日までの10日間にわたり実施したものである。
3．本調査は赤井益久（國學院大學学長）が主体者となり、吉田恵二（文学部教授）が担当した。現地調査は吉田および深澤太郎（研究開発推進機構助教）・小林青樹（國學院大學栃木短期大学教授）・中村耕作（文学部助手当時）が指導にあたり、大日方一郎・加藤大二郎（大学院ティーチングアシスタント）の下、考古学実習生20名・特別参加生27名が参加した。
4．実測図、その他の諸図版作成、および写真撮影は考古学実習生が主体となって行った。
5．図面作成に使用する石室の写真撮影、およびオルソ画像の作成は国際文化財株式会社に委託した。
6．土層・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2005年度版）に従った。
7．須恵器の位置づけにあたり、櫻井秀雄氏（長野県教育委員会）、直井雅尚氏・片山祐介氏（松本市教育委員会）、山下泰永氏・山田真一氏（安曇野市教育委員会）の助言を得た。
8．出土した動物骨の同定・記載は、西本豊弘氏（本学大学院兼任講師、国立歴史民俗博物館名誉教授）・浪形早季子氏（神奈川県教育委員会）の協力を得た。
9．鉄製品のＸ線写真は、公益財団法人山梨文化財研究所、鈴木稔氏（同所准教授）、櫛原功一氏（同所研究員）、小沢美和子氏（同所学芸員）の協力を得て、同所の機材を用いて深澤が撮影した。
10．本書の編集・執筆は、吉田・深澤・中村・朝倉一貴（文学部助手）の指導の下に実習生が分担協議した。
11．個々の古墳の表記方法については、過去の調査研究に準拠して「所属支群を示すアルファベット＋通し番号」で松川村所在古墳を除くすべての古墳を表記し、またそれ以外に別称を持つ場合には過去の文献との整合を容易にするため、括弧付けでこれを表記した。
12．今回発掘調査を行ったＦ９号墳はＦ10号墳とともに２基の総称として「二つ塚」の別称を持っている。そのため、どちらかを単独で表記する場合に別称を表記するのは適当ではないと判断し、また文章中で多用することを考慮して、本報告書では両古墳に限り別称の表記を省略する。
13．安曇野市域では2005年の安曇野市発足に至るまで数度の合併・改称が行われている。1889年、市町村制施行に伴い南安曇郡東穂高村・西穂高村・北穂高村・有明村が発足、1921年に南安曇郡東穂高村が改称して南安曇郡穂高村が発足した。1954年に南安曇郡穂高村・西穂高村・北穂高村・有明村が合併して南安曇郡穂高町が発足したのち、2005年には南安曇郡豊科町・穂高町・三郷村・堀金村と東筑摩郡明科町が合併して安曇野市が発足した。本文中では、旧町村名の表記が必要な場合のみ「旧」を頭につけてこれを表記した。
14．附編は本学出身で長野県考古学会会長を歴任された桐原健氏にお願いした独立論考である。
15．現地調査および整理作業では多数の機関や個人から協力を得た。芳名を巻末に記して感謝の意を表する。

目　　次

緒言
例言
目次

第Ⅰ章　調査・研究の目的

頁

第１節　調査・研究の目的……（神谷まゆ）1
第２節　穂高古墳群の位置づけ
（１）　長野県内の古墳と穂高古墳群……（尾上周平・鈴木広人）2
（２）　群集墳の研究と穂高古墳群……（田邉慧美里・森野　稔）3

第Ⅱ章　発掘調査日誌 ……（新川実里・長嶋幹也）6

第Ⅲ章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　地理的環境……8
（１）　松本平の地形と形成……（村山　武）8
（２）　穂高地域の地形と地質……（村山　武）9
（３）　調査区付近の地形と遺跡分布……（村山　武）10
第２節　松本平の歴史的環境
（１）　旧石器時代……（田中哲也・富山悠加）11
（２）　縄文時代……（田中哲也・富山悠加）11
（３）　弥生時代……（小林拓真）14
（４）　古墳時代……（富山悠加）15
（５）　古　代……（富山悠加）19
第３節　穂高古墳群の概要……（三輪鈴音）23

第Ⅳ章　穂高古墳群Ｆ９号墳の調査

第１節　調査地の概要……（松井勇樹）33
第２節　2012年度までの調査成果……（鳶我井亮太）33
第３節　第Ⅰトレンチ……35
（１）　調査の経過……（松井勇樹）35
（２）　石　室……（浅川尊裕）35
（３）　調査区土層……（麻生浩史）37
（４）　遺物出土状況……（麻生浩史・尾上周平）38
（５）　土器集中区……（尾上周平・松井勇樹）41
第４節　第Ⅲトレンチ……41
（１）　調査の経過……（新川実里）41
（２）　土層堆積状況……（新川実里）41

第５節　出土遺物…… 42
（１）　須恵器……（福嶌彩子）43
（２）　土師器……（福嶌彩子）47
（３）　鉄製品……（内田はるか・藤好史都）47
（４）　玉　類……（福嶌彩子）49
（５）　動物遺体……（浪形早季子）49

第Ⅴ章　2013年度調査の成果と考察
第１節　石室の構造…… 51
（１）　石室基盤構築方法……（新川実里）51
（２）　石室の構造……（尾上周平・神谷まゆ・福嶌彩子・三輪鈴音）51
（３）　周　溝……（新川実里）54
第２節　副葬品
（１）　須恵器の編年的位置……（神谷まゆ・田邉慧美里）54
（２）　須恵器の年代幅……（渡辺悠樹）58
（３）　鈹　具……（内田はるか）58
（４）　鉄　鏃……（藤好史都）58
（５）　刀　子……（藤好史都）59
（６）　玉　類……（新川実里・福嶌彩子）60
第３節　小　結……（尾上周平）60

第Ⅵ章　おわりにあたって ……（神谷まゆ）61

引用・参考文献…… 62
発掘調査参加者・関係者一覧…… 68
写真図版

附編　安曇郡に観る古墳と寺院 …… 桐原　健（１）

報告書抄録

挿図目次

第１図　長野県の主要古墳と古代寺院……３
第２図　松本平の位置……８
第３図　安曇野市周辺地質分布図……９
第４図　松本平の主要遺跡……12
第５図　穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡……24
第６図　穂高古墳群の石室……27
第７図　穂高古墳群出土の主要遺物（１）……30
第８図　穂高古墳群出土の主要遺物（２）……31
第９図　穂高古墳群出土の主要遺物（３）……32
第10図　2010～2013年度調査区全体図……34
第11図　Ｆ９号墳石室実測図……36
第12図　Ｆ９号墳前庭部土層断面図……37
第13図　2013年度出土遺物平面・垂直分布図……39
第14図　土器集中区微細図……40

第15図　第Ⅲトレンチ土層断面図……42
第16図　Ｆ９号墳出土遺物実測図（１）……43
第17図　Ｆ９号墳出土遺物実測図（２）……44
第18図　Ｆ９号墳出土遺物実測図（３）……48
第19図　土層対比図……52
第20図　石室類例……53
第21図　須恵器類例……55
第22図　2010年度～2012年度出土遺物実測図……56
第23図　長野県出土鈕具類例……59
第24図　鉄鏃類例実測図……59

表目次

第１表　穂高古墳群一覧表……25
第２表　須恵器一覧表……45
第３表　鉄鏃一覧表……48
第４表　刀子一覧表……48
第５表　穂高古墳出土ウマ一覧……50
第６表　ウマの上顎臼歯計測値……50
第７表　ウマの下顎臼歯計測値……50
第８表　比較古墳一覧表……57
第９表　松本平における鉄鏃鏃身部平面の変異……59

写真図版

図版１　１　Ｆ９号墳発掘前全景（南東から）
　　２　Ｆ９号墳埋め戻し後全景（南東から）
図版２　第Ⅰトレンチ全景（南から）
図版３　第Ⅰトレンチ全景（北から）
図版４　１　第Ⅰトレンチ石室西壁（南東から）
　　２　第Ⅰトレンチ石室西壁（北東から）
図版５　１　第Ⅰトレンチ石室東壁（南西から）
　　２　第Ⅰトレンチ石室東壁（北西から）
図版６　１　第ⅠトレンチＤ１・Ｄ２・Ｄ３グリッド石室西壁（東から）
　　２　第ⅠトレンチＤ４・Ｄ５グリッド石室西壁（東から）
図版７　１　第ⅠトレンチＤ６・Ｄ７グリッド石室西壁（東から）
　　２　第ⅠトレンチＤ８・Ｄ９・D10・D11グリッド前庭部西壁（東から）
図版８　１　第ⅠトレンチＡ１・Ａ２・Ａ３グリッド石室東壁（西から）
　　２　第ⅠトレンチＡ４・Ａ５グリッド石室東壁（西から）
図版９　１　第ⅠトレンチＡ６・Ａ７グリッド石室東壁（西から）
　　２　第ⅠトレンチＡ８・Ａ９・A10・A11グリッド前庭部東壁（西から）
図版10　１　第Ⅲトレンチ全景（南東から）
　　２　第Ⅲトレンチ全景（東から）
　　３　第Ⅲトレンチ全景（西から）
図版11　１　第Ⅲトレンチ北壁西側（南から）
　　２　第Ⅲトレンチ北壁東側（南から）
図版12　１　土器集中区・馬具出土状況（南西から）
　　２　土器集中区・馬具出土状況（西から）
　　３　土器集中区・馬具出土状況（北から）
　　４　土器集中区・馬具出土状況（南から）
　　５　土器集中区平面図２検出状況（南から）
図版13　１　Ｂ６グリッド土器・管玉出土状況（西から）
　　２　Ｂ２グリッド勾玉出土状況（西から）
　　３　Ｂ４グリッド長頸瓶出土状況（西から）
　　４　Ｃ５グリッド鉄鏃出土状況（南から）
　　５　Ｃ７グリッド鉄鏃出土状況（南から）
図版14　Ｆ９号墳出土遺物　Ｓ＝1/2（９・11・12：Ｓ＝1/3）
図版15　Ｆ９号墳出土遺物　（15～17：Ｓ＝1/3　18～27：Ｓ＝2/3　28・29・30）
図版16　１　Ｆ９号墳出土遺物　（31～35：Ｓ＝1/2）
　　２　Ｆ９号墳出土遺物Ｘ線写真（Ｓ＝2/3）

第Ⅰ章　調査・研究の目的

第１節　調査・研究の目的

國學院大學考古学研究室は、考古学実習の一環として穂高古墳群の調査を2009(平成21)年度から継続的に実施している。穂高古墳群とは、長野県の松本平西部を流れる鳥川と中房川のつくり出した扇状地上の山麓に点在する群集墳の総称である。長野県安曇野市(旧穂高町)所在のＡ群～Ｈ群と松川村所在古墳の支群からなり、現在87基以上の古墳が確認されている。長野市の大室古墳群や松本市の中山古墳群などと並ぶ中部高地の主要な後期古墳群であり、Ｄ１号墳(魏石鬼窟)を除いて、全て円墳であると考えられている。

1890(明治23)年の鷹野秀雄氏による報告以来、鳥居龍蔵氏や大場磐雄氏の調査研究が行われ、早くからその名は知られていたが、本格的な調査は行われてこなかった。また、土地開発や盗掘などによる古墳の破壊や消滅も問題視され、古墳群の保護が問題に上がってきた。このため1964(昭和39)年から1979(昭和54)年に、穂高町教育委員会による旧穂高町域内の古墳の分布調査と石製標柱の設置など、古墳群の全体の把握と保護対策が始まる。また、1967(昭和42)年に行われた長野県教育委員会による調査では、旧穂高町内の古墳はＡ群～Ｇ群の７群に大別され、その大要がようやく把握されるに至った。1982(昭和57)年には『長野県史』編纂事業の一環として、筑波大学考古学研究室によって一部の古墳の墳丘測量調査、石室・遺物の実測調査が行われ、この結果から穂高古墳群の年代は６世紀後半～７世紀後半と推定されることとなった。その後、1991(平成３)年には『穂高町誌』編纂事業の一環として桐原健氏が個々の古墳群についてまとめ、また同年には三木弘氏によるＥ６号墳の調査が行われた。しかし、墳丘・石室・遺物を一体とした総合的な調査が少ないというのが現状である。

本学は、穂高古墳群全体の位置づけを考察するために必要な情報を収集することを重要な目的とし、Ｆ９号墳・Ｆ10号墳の継続的調査と、個々の古墳の現状確認と把握、さらに穂高古墳群の歴史的意義を後世に伝え残していく足がかりとして、2009(平成21)年から調査を続けている。2009年度はＦ群とその北西部にあたるＥ群の現状確認調査およびＦ９号墳・Ｆ10号墳の墳丘測量調査を行った。その結果、径・高さ・形状・状態を把握するとともに、周辺古墳の情報収集と過去の調査時との残存状態の変化を確認した。2010年度は、Ｆ９号墳よりも保存状態がよいＦ10号墳は後世のために現状保存することとし、Ｆ９号墳の内部状況と墳丘範囲の確認のため第Ⅰトレンチ・第Ⅱトレンチを設定して発掘調査を行った。その結果、石室東側の側壁を確認することができた。2011年度は、石室全体の把握のため第Ⅰトレンチを拡張した。西壁と奥壁の石組みを検出し、石室残存長約７m、石室幅約1.3m～1.5mの持ち送り構造を呈している無袖式横穴式石室であることが判明した。2012年度は、石室をさらに掘り下げ、石室を埋めていた大小の礫をほぼ除去し、Ｆ９号墳の閉塞石と思われる礫石を検出した。これまでの調査で須恵器・鉄製刀子・飾金具・水晶製切子玉等が出土している。

以上の状況を踏まえて今年度は、Ｆ９号墳の石室構造の全貌と、墳丘の規模を把握することを課題として調査計画をたてた。第Ⅰトレンチでは、前年度に引き続き床面を目指してＦ９号墳石室内部の発掘調査を実施するとともに、前庭部における土層堆積状況の調査を行った。また、墳丘西側は上水場水源地(塚原浄水池)による削平がなされていることが2010年度に判明しているため、今年度は新たに墳丘東側に第Ⅲトレンチを設定し、周溝の有無と古墳の規模、墳丘構築方法の確認を行った。

調査地は安曇野地域の環境保全の拠点として整備された「国営アルプスあづみの公園」という公共性の高い場所にあることから、今後も土地開発の影響を受ける可能性は低いと考えられる。この立地を生かしＦ９号墳・Ｆ10号墳をより良く保存していくことが大切である。今回の発掘調査で、現状を把握し穂高古墳群の性格把握に努めたい。その成果を後世に伝え残し今後遺跡をどのように保存していくかを考える材料になれば幸いである。

(神谷)

第２節　穂高古墳群の位置づけ

（１）長野県内の古墳と穂高古墳群

長野県には、善光寺平・佐久平・松本平・伊那谷の４つの大きな盆地があり、それぞれ北信・東信・中信・南信に区分され、独自の地域圏をなしている。県内で確認されている古墳は約3,500基で、その内訳は、善光寺平に約1,400基、佐久平に約750基、松本平に約350基、伊那谷に約1,000基が分布しており、県内所在古墳の約７割が善光寺平と伊那谷に集中している（長野県編1981）。

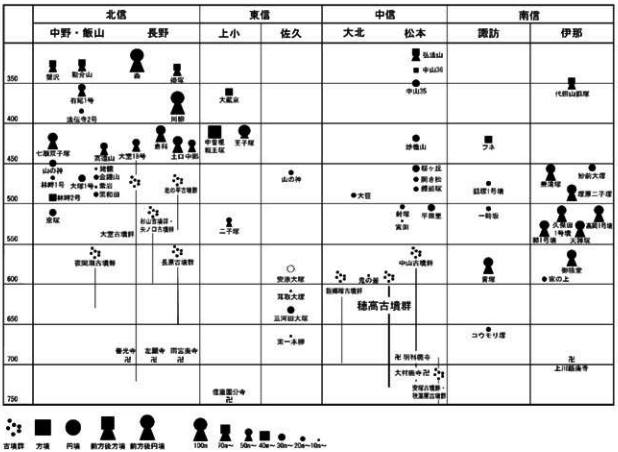
長野県最古の古墳は、古墳時代前期に松本平に築造された弘法山古墳である（松本市教育委員会編1993h）。発掘調査当初には４世紀中葉の築造年代が与えられていたが（弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編1978）、その後の再調査により、土器や鉄鏃の編年から３世紀末から４世紀初頭に遡ると考えられている（桐原1996）。墳形は前方後方墳であり、松本平を一望できる丘陵状に立地していることや、被葬者の頭部付近に副葬されていた大型の鉄斧が布で包まれて木箱に収められていたとみられること、本来750点におよぶと思われる大量のガラス製小玉からなる装飾品や、中国の官営工房で作成されたことを示す「上方作竟」の銘をもつ四獸鏡が出土したことなどから首長墓とされている。その後松本平においては、仁能田山古墳（中山36号墳）、中山35号墳が続けて築造されていたものの、大型首長墓を認めることはできない。一方善光寺平では前期古墳の多くが分布しており、主な古墳としては、前方後方墳の飯山市勘助山古墳や中野市蟹沢古墳、前方後円墳の千曲市森将軍塚古墳や長野市川柳将軍塚古墳・姫塚古墳などが知られている。この時期に、築造される古墳の形態は前方後円墳が主流となり墳丘の規模も大型化する。県内最古の前方後円墳である森将軍塚古墳に続いて、川柳将軍塚古墳・千曲市倉科将軍塚古墳・土口将軍塚古墳の首長墓とみられる前方後円墳は、時代を継承しつつ平地を一望できる山頂や尾根上に築かれていった。

古墳時代中期以降も、善光寺平中央部を中心に前方後円墳が築造され、中野市七瀬双子塚古墳・高遠山古墳や、倉科将軍塚古墳・土口将軍塚古墳などの大型前方後円墳が営まれた。その一方でこの時期には県内各地で円墳が多く築造されるようになった。伊那谷では古墳時代前期の前方後方墳である代田山狐塚古墳（飯田市教育委員会編1994、飯田市上郷考古博物館編1995）以降、古墳の築造は見られなかったが、前方後円墳である兼清塚古墳をはじめとして、妙前大塚古墳など円墳を中心に古墳の築造が再開した（大沢1983・佐藤1983）。松本市の桜ヶ丘古墳・針塚古墳もこの時期の円墳増加の一例を示している（松本市教育委員会編1993b・2003c）。東信の上小地域では大型方墳の中曽根親王塚古墳や帆立貝式の王子塚古墳が築かれている。また、５世紀後半には長野市大室古墳群などの積石塚が善光寺平を中心に築造されはじめた。古墳時代中期後半以降になると、古墳分布の中心が伊那谷へと移行した。善光寺平では前期から中期前半に前方後円墳が集中する一方で、伊那谷では中期後半を画期として後期に前方後円墳が集中する特徴がみられる（風間2011）。また前方後円墳に近接して集中的に築造される円墳群の存在も指摘されている（大沢1983）。

古墳時代後期になると、上小地域ではこの地方唯一の前方後円墳である二子塚古墳が築造されたが、善光寺平・松本平では徐々に大型の古墳は姿を消し、より小規模の円墳が盛んに造られるようになり、善光寺平では大室古墳群、松本平では松本市中山古墳群や安曇野市穂高古墳群といった群集墳が形成されていった。これらの群集墳は古墳の総数が80基を超す大規模なものであるが、他にも数基から20基程度と小規模ではあるものの多くの古墳群が６世紀から７世紀にかけて県内各地に展開された。

一方で、安曇野市明科廃寺からは７世紀後半の瓦が確認されており、長野県最古の寺院と考えられている。このほかにも県内には、長野市の善光寺とその周辺、千曲市の雨宮廃寺、須坂市の左願寺廃寺、飯田市の上川路廃寺など、７世紀後半代に建立されたと推定されている初期仏教寺院が確認されており（上田市立信濃国分寺資料館編2005）、長野県への仏教の波及を見て取ることができる。その後の長野県における古墳の築造例としては、松本市の安塚古墳群や秋葉原古墳群が８世紀の年代が与えられており、奈良時代に入っても古墳が使用されていたことがわかる（小松・神沢1983、直井1994）。

（尾上・鈴木）



第１図　長野県の主要古墳と古代寺院
（小林1997、風間2011をもとに加除筆して作成）

（２）群集墳の研究と穂高古墳群

群集墳の研究

古墳時代後期のはじまりの区分については、群集墳の発生、横穴式石室の導入や副葬品の変化、前方後円墳築造の衰退などがあるが、その中でも群集墳の成立が顕著な契機として特徴づけられている（一瀬2012）。群集墳は主に６世紀前葉から盛んに築造され、６世紀後葉頃にピークを迎えて、７世紀初頭にはその数が減少傾向にあるとされる。そして７世紀前葉にはさらに減少傾向に加速が加わったと考えられている（安村2005）。

近藤義郎氏は『佐良山古墳群の研究』のなかで、さほど大きくない古墳が群在する古墳のあり方の一形態について、「当時の支配体制と政治構造を表現しうるもの」とし基本的に個々の、地方での支配体制が家父長家族へ移行したことに群集墳の発生の原因を求めた（近藤1952）。これに対して西嶋定生氏は、５世紀後半から６世紀に生産力の著しい発展を基礎として新しく台頭してきた中小共同体の首長層や有力成員層を、畿内政権が直接その支配秩序に組み込み、古墳造営が可能な身分に属するものが増えた結果とした（西嶋1961）。

群集墳の構造について、向坂鋼二氏は群集墳を構成する単位群・支群・古墳群をそれぞれ古代律令制の戸・里・郡・国に対応させた（向坂1964）。そして水野正好氏は群集墳の造営集団の性格をより一層具体的につかみ、群全体の重層構造を把握するため葬送儀礼の通路として、墳丘内の墓室の入口にいたる素掘りの通路と、墓地のなかの道路を指す「墓道」を想定した。そして「墓道」に伴う「単位群」同士の結びつきの疎密さや、古墳の構成の違いに「家族の墓域」、「氏族の墓域」などという群集墳の性格の違いが反映していると考えた（水野1970・1975）。

群集墳研究の転換期としては、森浩一氏・石部正志氏と白石太一郎氏があげられる。森・石部両氏は、古墳時代後期を区別する最大の条件を群集墳の全国的な発生と考え、和泉地域の須恵器編年を再検討し、群集墳研究の推進を促した（森・石部1962、石島2012）。白石氏は西嶋氏の考えに基づき、大規模群集墳に対する初めての総括

的な研究を行った(白石1966)。そして、横穴式石室の型式編年を有力な材料として群構造の解析に多角的な方法を講じ、分布調査を基盤に据えた白石氏の研究は、その後の群集墳研究に大きな指針をもたらし、群集墳をとりまく地域全体の古墳にも目が注がれるようになった(森岡1989)。

群集墳の分類について、石部正志氏は古墳時代の中期の木棺直葬や簡略な粘土槨、竪穴式石室などを内部主体とする円墳や方墳からなる群集墳を「古式群集墳」、古墳時代後期の横穴式石室を伴う主に小円墳が密集して構成されたものを「後期群集墳」と設定した(石部1980)。和田晴吾氏は小型で墳丘をもつ墳墓の群集は弥生時代から飛鳥時代までに存在することを指摘し、墳墓の形式などを基準に５段階に区分した。ａ類(弥生時代の方形周溝墓や方形台状墓など)、ｂ類(古墳時代前・中期を中心とする墳墓)、ｃ類(古墳時代後期前半を中心とするもの)、ｄ類(古墳時代後期中葉から飛鳥時代初頭を中心とする円墳)、ｅ類(飛鳥時代の小型化した畿内型横穴式石室や小石槨、あるいは木棺直葬をもつ方墳を主体とするもの)で、ｃ・ｄ・ｅ類の３群を「群集墳」とし、ｃ類が群集したものを「古式群集墳」、ｄ類を「新式群集墳」、ｅ類を「終末式群集墳」と設定した(和田1992)。

また辰巳和弘氏は、６世紀後葉から７世紀前葉と７世紀後半から８世紀前半の２期に画期がみられる、極めて狭い範囲で群集墳を形成するものを「密集型群集墳」とした。密集型群集墳の特徴として、墓域の幅が約90～120mの範囲内である点、より造墓に適した地形が存在しても急傾斜地に古墳を築造する点などをあげている。また密集型群集墳は、分布により「小支群」に分けることが出来るとし、その支群の中には１基の径10mを超す大型古墳が存在していると示した(辰巳1983)。安村俊史氏は７世紀代の群集墳(終末期群集墳)についてその特徴を分析し、６世紀代の群集墳との相違点として、埋葬施設が多彩な埋葬形態をとる点、立地と分布では丘陵の南斜面(急斜面)に築造されている点、副葬品が質・量ともに著しく貧弱になり、あったとしても耳環、刀子などを身に着けていたものが中心である点などをあげている(安村2008)。

穂高古墳群の研究史

穂高古墳群は松本平にある350基近い古墳のうち、安曇野市穂高地域西方にわたる山麓一帯に集中して形成された古墳群である。1890年の鷹野秀雄氏の報告(鷹野1890)以来、鳥居龍蔵氏がＤ１号墳(魏石鬼窟)・Ａ１号墳(陵塚)・Ｂ１号墳(ぢいが塚)の石室構造の調査を行い(鳥居1925)、大場磐雄氏は信濃国の安曇族の分布と移住の時期についての研究を行っている(大場1949)。その後、穂高古墳群では、Ａ群～Ｄ群(信濃史料刊行会編1956)、Ｅ群～Ｇ群(穂高町教育委員会編 1970)、Ｈ群(河西・松尾1984)の８つに分類されてきた。また、これに並行して、穂高町教育委員会が現状をまとめ標柱を設置して保護を図った(穂高町教育委員会編1970)。1988年に奈良県藤ノ木古墳で「金銅製冠」が出土し、類例として穂高古墳群の出土品が注目された（穂高町・穂高町教育委員会編1989)。こうした中、県史・町誌の編纂に伴って岩崎卓也氏・松尾昌彦氏・松村公仁氏(岩崎・松尾・松村1983)、桐原健氏(桐原1991)、三木弘氏(三木1991・2006)の研究が進められている。穂高古墳群についての研究は主に墳丘規模、石室規模、立地、築造時期、被葬者などについてなされており、その特徴が解明されつつある。

墳丘規模については、三木氏が穂高古墳群には全体として径６ｍから19mのものまでみられるが、特に10m前後と14～15mにピークが認められることを指摘し、その規模の分布を支群ごとにみると、各支群に１基ないし２基の規模的に優越した古墳が認められるとしている(三木1991)。

石室の規模については岩崎氏・松尾氏・松村氏と三木氏の研究があげられる。岩崎氏らは、石室長や石室幅から３類型に分類した。この分類は、石室の規模の差のみではなく、石室の開口方向といった石室構造そのものの差異にも注目したものであった。三木氏は石室幅がほぼ１ｍ～２ｍの範囲においておさまること、長さが短く幅の広いものが少なく、うち１基は構造が特殊なＤ１号墳であることなどから石室幅を強調するよりも石室長に主眼を置き、Ａ群～Ｃ群の石室規模を５類に大別し、Ｂ群では石室の規模が多様であり各類とも認められているが、Ｃ群では小・中規模の石室だけに限られていることを指摘している。

立地についての研究では、三木氏が、各支群の墳丘・石室規模において優越的な古墳は、群の中で最も高い場所にほぼ占地していることを示した。

築造時期についての研究は、岩崎氏・松尾氏・松村氏、桐原氏、三木氏によってなされている。岩崎氏・松尾

氏・松村氏は有明地区に分布する47基について、Ａ６号墳（犬養塚）、Ｂ23号墳（祝塚）、Ｇ１号墳（上原古墳）を副葬品から６世紀後半であるとし、Ｂ１号墳、祖父が塚古墳は７世紀前半の古墳であるとした。桐原氏は、安曇野市穂高地域に所在する古墳には前期・中期に遡るものは発見されておらず、現状のところ全ての古墳が６・７世紀の築造のものであるとしている。三木氏は岩崎氏らの対象とした古墳とＥ６号墳を比較して、有明地区の古墳の築造は６世紀後半代に始まり、古墳築造は７世紀代で終わると考え、その後追葬が８世紀代まで続くとした。

被葬者についての研究は主に桐原健氏、三木弘氏によってなされている。桐原氏は古墳群を周辺の集落遺跡と対応させて、数基の単独墳とＡ～Ｇ群に至る群集墳に埋葬された被葬者は、等々力・白金・矢原を結ぶ一帯の人々の可能性があると指摘している。そのなかで牧地区に位置するＥ群に関しては特別に考える必要性を示唆した。「延喜式」に記載された「猪鹿牧」が牧地籍に比定されていることから、Ｅ群を古代の私牧の墓域とすることを肯定している。一方で三木氏は、各支群の墳丘・石室の規模が卓越する古墳は、墳丘や石室の規模に被葬者と直接かかわりを持つ世帯の権威的力量が反映されていると考えた。また各支群の間には強い等質性が見られることを指摘しており、Ｅ群のみと牧とを関連づける見解には否定的である。

なお、奈良県藤ノ木古墳の発掘調査で出土した金銅製冠に表現されている鳥形の装飾と酷似した、「鳳凰形銅葉」とされる遺物が穂高古墳群中（旧有明村内）の１基から出土したことが明らかになっている。金銅製冠はあまり出土例がなく、全国でも30数例しか確認されていない。また、これらは５世紀後半から６世紀後半にかけて築造された古墳から出土しており、松本平でも５世紀中ごろに桜ヶ丘古墳から金銅製冠が出土している（松本市教育委員会編2003c）。この冠は穂高古墳群の中でも、重要な役割を担っていた人物の存在を考える上で貴重な資料となっている。

（田邉・森野）

第Ⅱ章　発掘調査日誌

８月３日(土)　晴れ

実習生は13時頃JR穂高駅に集合した。宿舎に着いて支度をすませた後、すぐＦ９号墳に移動した。特別参加生は前日に到着しており、先に除草作業を終え、石室を埋め戻していた土嚢袋の撤去作業を開始していた。到着後実習生も加わり、16時半まで行う。石室内一面を残し、次の日に持ち越した。

８月４日(日)　晴れ

午前中に土嚢撤去作業の続きを行った後、石室内外を清掃し、昨年設置した基準点をもとに昨年度までのグリッドを復元した。石室東側に第Ⅲトレンチを幅１ｍ、長さ約８ｍに設定し、除草作業を開始した。

午後からは班ごとに作業を行った。１班・２班は第Ⅲトレンチの掘削作業を開始した。墳丘の裾部から３層が検出された。３班は石室の床面到達を目標とし掘削作業を開始した。途中、灰白色土層が検出され床面かと思われたが、その周囲から礫石が多く出土したため床面ではないと判断した。

８月５日(月)　雨/晴れ

午前中は降雨のため実習生はＤ１号墳(魏石鬼窟)・Ａ１号墳(陵塚)・松川村の祖父が塚古墳を見学した。発掘現場では特別参加生が掘削作業を進めた。

午後は晴れたため作業を行った。石室は特別参加生が進めた。掘り下げている面の高さを均等にするため、主に３～５グリッドを掘削した。第Ⅲトレンチでは東端より検出された３層の先の層の検出を目指し掘削作業を行い、さらに後に検出された７層も同様に調査を進めた。

８月６日(火)　雨

実習生は各地を見学して回った。午前中は大室古墳群、塩崎遺跡群、森将軍塚古墳、長野県立歴史館、午後からは松本市立考古博物館、中山古墳群、弘法山古墳を見学した。Ｆ９号墳と比較し、様々な古墳の形態をみることができた。

この間石室の調査は、特別参加生により進められた。閉塞石を確認した後、黒色土を除去した。３層と側壁石を露出させることを目指して掘削した。土器片と鉄製品が数点出土したが、遺物取り上げ・撮影は翌日に持ち越した。

８月７日(水)　晴れ

前日出土した遺物の位置を記録した後、出土状況を撮影し、取り上げた。石室は引き続き床面到達を目標に掘削作業するとともに、第Ⅲトレンチの堆積土層との比較のため前庭部にＴ字状のサブトレンチを設置した。そこでは第Ⅲトレンチ６層と同じものと思われる５層が検出された。Ｂ１グリッドから馬の歯、Ｂ２グリッドのふるいから須恵器片が２点出土した。第Ⅲトレンチは７層に到達した。

８月８日(木)　晴れ

午前中は、第Ⅲトレンチは清掃作業を行い、完了後全景と土層堆積状況を撮影した。石室は前日に引き続き掘り下げを行った。Ｂ６グリッドから長頸瓶と甕の破片・管玉が出土した。

午後にはその下から蓋杯・高杯・長頸瓶などの複数の土器が集中的に出土した。第Ⅲトレンチは引き続き撮影の後、分層作業をし、実測を開始した。

８月９日(金)　晴れ

午前中は、Ｃ３グリッドからＣ４グリッドにかけて馬の骨が出土した。また、第Ⅲトレンチは前日に実測した土層断面図にずれがあることが判明したため実測のやり直しを行った。

午後は石室内部の掘り下げと並行して石室前庭部に設定したサブトレンチを掘り下げた。また、石室内ではＣ５グリッドから完形の鉄鏃が出土した。第Ⅲトレンチは引き続き実測した。

この日の作業に並行して、國學院大學広報課による現地取材が行われ、作業風景の撮影や実習生らへのインタビューなどが行われた。

８月10日(土)　晴れ

午前中は、石室は掘り下げを行いつつ午後に予定されていた写真撮影に向けて壁面と床面を整えた。Ｂ２グリッドから勾玉が出土し、Ｂ６グリッドの土器集中区より馬具も出土した。

正午ごろ現地説明会を開催した。公園内という立地のため偶然通りかかった親子連れも含めて多くの人が訪れた。

午後は石室内部の中央に設定したベルトを整え、石室周囲を清掃した。その際Ｃ４グリッドから馬とみられる動物の歯と骨が出土した。その後、国際文化財株式会社による石室の三次元計測が行われた。第Ⅲトレンチでは埋め戻しを行った。

８月11日(日)　晴れ

午前中は、写真撮影のために第Ⅰトレンチ周囲と内部を清掃し、並行して土器集中区の微細図を作成した。微細図作成終了後写真撮影を行った。また、撤収に向けて機材整理・確認した。

午後は、土器集中区の土器を取り上げる一方、石室前庭部を実測し、終了後埋め戻しを開始した。

なお、前日の説明会について、市民タイムスに「穂高古墳群の特徴を解説　あづみの公園に住民50人」の記事が掲載された。

８月12日(月)　晴れ

荷物を運び出し宿舎を引き払ったのち、午前中は昨日に引き続き石室を埋め戻した。終了後に周辺を清掃して墳丘の全景写真と集合写真を撮影した。機材を最終点検して撤収し、正午ごろJR穂高駅にて解散した。　（新川・長嶋）

第Ⅲ章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　地理的環境

（１）松本平の地形と形成

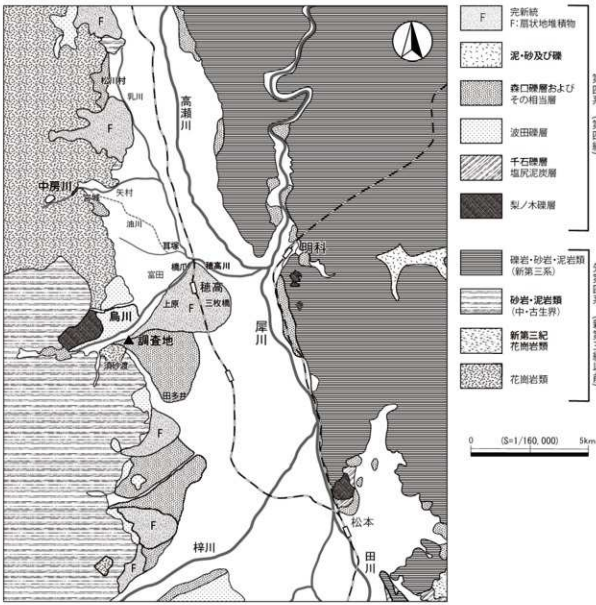
長野県は本州の中央部に位置する内陸の県である。南北約212km、東西約120km、総面積約13,562㎢であり全国で４番目の広さを誇る。大半が山地である長野県には、主要河川流域にいくつかの盆地が存在する。そのなかのひとつである松本平に調査地である穂高古墳群が所在する。松本平は西の飛騨山脈と東の筑摩山地の間にあり、両山地隆起による相対的な陥没でできた山間盆地である。北端の大町市から南端の塩尻市まで幅を広めながら伸びていき中央をフォッサマグナの西境にあたる糸魚川－静岡構造線が縦貫し、安曇野市明科を底にした擂鉢状の地形である。その大きさは南北約50km、東西約10km、面積は480㎢であり、飛騨山脈および筑摩山地から流出する多くの河川の扇状地の複合によって形成されている。この扇状地上には各時代の遺跡が現存している。

第２図　松本平の位置

松本平の形成にはフォッサマグナが深くかかわっている。日本列島の前身となる陸地は新生代古第三紀（約6500万年前～2300万年前）まで東西に分かれており、その間には海が広がっていた。フォッサマグナはこの東西の陸地に挟まれた海に飛騨山脈が隆起したことに伴って岩石などが堆積した結果つくられたものである。概形は中央に海抜2700m～2800mの高い頂面を持つ南北にのびた台地であり、この山脈から激しい浸食作用で削り出された岩屑は、東斜面では横断谷の高瀬川、梓川によって運ばれて松本平にもたらされてそれぞれ扇状地をなしている（仁科1991）。

新生代新第三紀（約2300万年前～250万年前）以降に形成された陸地とフォッサマグナ側の境界にあたるのが糸魚川－静岡構造線である。新生代第四紀（約250万年前～現代）になると広域隆起が進み、フォッサマグナから飛騨山脈にかけて準平原が形成された（大池1991）。中期更新世になると糸魚川－静岡構造線に沿って地溝状に陥没して現在の松本平の原形ができた。この陥没した地に飛騨山脈から多量の砂礫が運ばれて、平らに埋め立てられてできたのが現在の松本平である（仁科1991）。

陥没した松本平に最初に堆積した地層は梨ノ木礫層である。礫は淘汰の悪い亜円～角礫で巨礫を含むことがある。穂高地域では丘陵を構成する礫層として発達し、硬砂岩やチャートおよび花崗岩の巨礫を含む。千石礫層は松本平内部の丘陵地帯に分布する地層である。穂高地域周辺においてこれらの地層は地表部には発達せずに盆地内部に厚く積もり、波田礫層以後の地層に覆われているものと考えられている。波田礫層は松本平南部の波田段丘を構成している礫層である。礫種は円磨された中～大礫が多く、基質は粗粒砂によって埋められている。森口礫層は波田地区の森口段丘をつくる礫層がタイプになっている。波田礫層を侵食して重なる更新世末期の段丘礫層である。穂高地域では柏原の扇状地、本牧～南田の扇状地、豊里の扇状地礫層がこの森口礫層に相当する。完新統はこれまで沖積層と呼ばれていた地層である。烏川や中房川などの河川沿いの低地には、沖積面をつくる完新統のシルト層・砂層・礫層が発達する（仁科1991）。



第３図　安曇野市周辺地質分布図（松本盆地団体研究グループ1977を改変）

（２）穂高地域の地形と地質

穂高古墳群が所在する安曇野市穂高地域は松本平西部に位置している。西境の飛騨山脈には南から常念岳、大天井岳、燕岳が並んでいる。旧穂高町域は地域面積の７割を山岳地帯が占めており、東部は沖積地、西側の飛騨山脈は中古生層や花崗岩類で構成されている。穂高地域は西部にある大天井岳から東部平坦部の穂高川・犀川の合流地点までの標高差が約2,400mあり、この標高差と豊富な降水量によって北の中房川と南の烏川は広大な扇状地を松本平に形成している。この標高差によって幅広い気候が生まれ、多様な生物の生息を可能としている。穂高地域は本州のほぼ中央に位置しており、内陸的気候の傾向が強くみられる。また、山地に阻まれた松本平は寡雨地帯であるので、そのなかにある穂高地域は雨が少なく湿度も低い（尾川1991）。

穂高地域には大小様々な河川があるが、主要河川といえるのは北部を流れる中房川と南部を流れる烏川である。この二つの河川が形成する扇状地は穂高地域の沖積地のほぼ全域を占めており、穂高古墳群も両扇状地の扇端部から扇央部にかけて分布している。中房川・烏川の両河川が形成する扇状地群を抜けると、中房川は有明地区で乳川と合流して乳房川、穂高橋下流で烏川と合流して穂高川となり、狐島東方で高瀬川と合流する。この高瀬川の合流地点の河床の標高は松本平の中でもっとも低く、ここを中心として穂高東部、明科下押野、豊科重柳北部にかけて低湿地帯が形成されている。中房川・烏川の両河川の扇状地がこの地帯に向かって張り出している松本

平の土地形成運動がこの低湿地帯を生み出し、沖積地が形成された。この沖積地には氾濫原が広がり、肥沃な土地が形成されている。

中房川扇状地

中房川は大町市との境界に近い有明地区の東沢乗越付近を源流とした、乳川と合流して穂高川になるまでの全長約16.5㎞の河川であり、大部分は花崗岩地帯である(仁科1991)。

中房川扇状地は有明地区平坦部のほぼ全域を占めており面積は約23㎢である。扇頂部は宮城地区の標高約750m付近で、扇端部は乳房川の右岸に沿って発達する低位段丘崖を境にする。この扇状地は近接する扇状地に影響されることがないため、ほぼ180度の方向に広がっている。扇状地内の堆積物を比較すると、扇頂付近の矢村・宮城地区では径５ｍをこえる花崗岩の巨礫の押し出しがみられる。扇頂部周辺に存在した大きな礫は下流に進むほど見られなくなり、扇央部では粗粒砂と混在した長径５㎝～30㎝の礫へと変化する。扇端部になると灰白色シルト層を間に挟んだ中粒から細粒の砂となる。このような堆積物粒度の急激な変化は、後背地の花崗岩地帯に風化しやすい特質があるためである。

山麓線沿いからその西方地域にかけて広く分布する花崗岩の巨礫は、古くから石材として使用されてきた。古代においてはほとんど加工せずに古墳の石組みに使われ、近代には有明山神社などの石垣や石碑として活用された。大正～昭和の初期には中房川の礫とともに扇状地内の花崗岩礫は盛んに掘り出され、石碑、土台石、門柱、鳥居等の石材として各地に出荷されてきた(仁科1991)。

烏川扇状地

烏川は蝶ヶ岳から流れ出る蝶ヶ沢が源流の河川である。全長は穂高川に合流するまでの約13㎞、流域には何段もの河岸段丘がつくられ、さらに須砂渡の下流には広い扇状地がつくられている。

上流から中流域までは渓流を形成しているが、上原地区北方をすぎると、粗粒物質からできている烏川扇状地に吸収されるために水量が激減する。河床にみられる岩石は、粘板岩・硬砂岩・チャート・ホルンフェルスなど、中・古生層から供給された礫であり全体的に黒色のものが多い。これは花崗岩を主とする中房川の白色系礫と比べきわめて対称的である。

扇央部に位置する富田南方の烏川沿いでは、現河床のものとほぼ同類の礫が地表から約15ｍにわたって堆積している。扇頂部を須砂渡付近として、扇端部の田尻から下堀北方にいたる間は扇状地段丘となり、面積は約30㎢で、烏川、牧、柏原の各地区のほぼ全域と三田地区の一部を含んでいる。

現在烏川は扇状地の北端を流れているようにみえるが、現在の流路をはさんで、南と北につくられた時代の異なる扇状地が存在する。扇状地の出口は時代の異なるごとに別になっており、扇頂部の位置によって４つの扇状地に分けられ、現在の扇状地はそれらが合成したものである。

（３）調査区付近の地形と遺跡分布

調査地付近の流路と遺跡分布

今回調査対象となったＦ９号墳が含まれるＦ群は、12基からなる。遺存状態は良好ではなく、墳丘が確認できるのはＦ４号墳・Ｆ５号墳・Ｆ７号墳・Ｆ９号墳・Ｆ10号墳の５基だけである。本調査地は渓谷の出口から約700ｍ下流の烏川第４段丘の上、烏川扇状地のほぼ扇頂部といえる場所に位置している。かつて調査地付近には烏川本流から分岐した複数の自然流路が存在していた。その中のひとつの矢原沢と呼ばれる沢の脇に沿うようにＦ10号墳、Ｆ９号墳、Ｆ８号墳が造られたと考えられている(重野2007)。複数の水路がある扇頂部は上流の水量が増えると洪水が発生しやすい場所であったようであり、この烏川は紀元前１世紀と紀元後10世紀に大規模な洪水が発生したとみられる。紀元後10世紀の大洪水では扇頂部周辺の自然流路も氾濫し、堆積した土砂で流路が埋没した沢もあった。氾濫の際に矢原沢は埋没する程の氾濫をしなかったが、矢原沢脇にあるＦ８号墳は壊滅的な被害を受けたとされる(重野2007)。　　(村山)

第２節　松本平の歴史的環境

（１）旧石器時代

長野県には旧石器時代の遺跡が多く、全国の約１割程度が発見されている。その要因は、石器を作るための黒曜石が豊富なことである。和田峠から蓼科・八ヶ岳山麓にかけて数10か所以上の黒曜石原産地が散在し、遺跡の多くはこの原産地周辺に集中している。長野県全体で遺跡が多く発見されている一方で、松本平は旧石器時代の遺跡数は少ない。

旧石器時代の主な遺跡には、塩尻市の丘中学校遺跡（第４図61）・和手遺跡（65）・下り坂遺跡（71）・青木沢遺跡（72）などがある。

塩尻市内の旧石器時代の遺物は、田川上流域の塩尻峠山腹を中心とした地域からまとまって出土している。丘中学校遺跡からは、ナイフ形石器・槍先形尖頭器・石刃などが出土している（塩尻市教育委員会編1983a）。また和手遺跡からは、ナイフ形石器を主として槍先形尖頭器、石刃など111点の石器が出土しており、それらはどれも田川の段丘縁にまとまる傾向が確認されている（塩尻市教育委員会編1983a・1996）。下り坂遺跡からはナイフ形石器が１点見つかっている（塩尻市教育委員会編1995）。青木沢遺跡からは尖頭器２点、ナイフ形石器６点が出土している。旧石器時代の遺跡は、その多くが平野や高原といった広大な平坦域に立地する傾向があるとされるが、青木沢遺跡は田川の形成した深い開析谷の奥に位置し、山々に挟まれた狭小な台地上に立地しており特異な立地環境にあるといえる（塩尻市教育委員会編1985）。

（２）縄文時代

＜草創期＞

旧石器時代から縄文時代への過渡期といえる草創期は遺跡数が少ないため、未解明な点が多い。松本平における遺跡は青木沢遺跡（第４図72）などがあり、有舌尖頭器が数点出土しているのみである（塩尻市教育委員会編1985）。

＜早　期＞

早期になると山麓や台地に小規模ながら遺跡が点々と営まれるようになり、東海地方の押型文土器や、関東地方の貝殻沈線文土器が流入し、後半には全国的な条痕文土器が広がる。

早期の主な遺跡に、大町市の山の神遺跡（第４図５）、塩尻市の向陽台遺跡（70）・矢口遺跡（62）などがある。

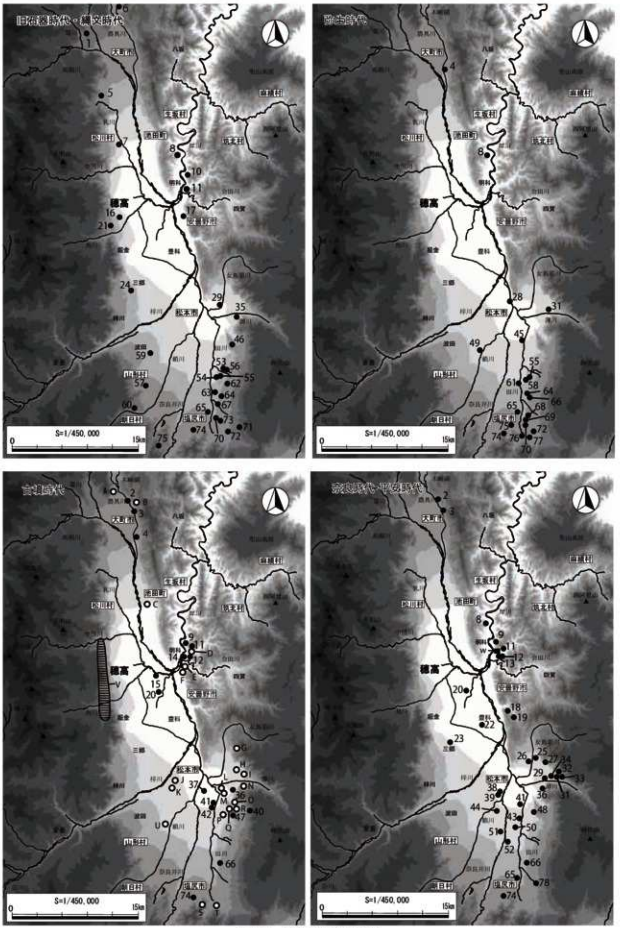
山の神遺跡からは竪穴住居跡12軒、土壙143基、集積・石列72基、溝・流路６本などの遺構が検出され、さらに全国的にも珍しい異形部分磨製石器が国内最多の41点出土している（長野県埋蔵文化財センター編2003）。向陽台遺跡からは竪穴住居跡が４軒と集石炉が４基、土壙などの遺構、押型文土器や石鏃・横刃型石器・礫器・砥石・石皿・特殊磨石・凹石などの遺物が確認された。これらの遺構・遺物は、縄文時代の初期の様相を良く示しており、その形成過程を明らかにするうえで全国的に見ても重要な意味をもっている（塩尻市誌編纂委員会編1995）。矢口遺跡からは16軒の竪穴住居跡が、中央広場と考えられる空間を取り巻くように配列した環状集落の形態をなして発見された（塩尻市教育委員会編1994）。

＜前　期＞

前期になると遺跡数も増加し、分布域は山麓や台地に広がり、中越式・有尾式などはじめて長野県独自の土器文化圏が誕生した。また新潟県糸魚川から松本平北端一帯では、玦状耳飾りが製作された。後半は関東と同じく諸磯式の文化圏となる。

前期の主な遺跡には、大町市の上原遺跡（第４図１）、松川村の有明山社遺跡（７）、塩尻市の舅屋敷遺跡（63）・女夫山ノ神遺跡（64）などがある。

扇状地に立地する上原遺跡では環状配石と石積遺構が検出されている。遺物は約１万点におよぶ土器片や石器140点、未成品を含む玦状耳飾32点が出土している（長野県文化財保護協会編1976）。有明山社遺跡から竪穴住居跡が１軒検出され、内部から磨石、黒曜石片、土器片が見つかった（松川村教育委員会編1968）。舅屋敷遺跡から



第４図　松本平の主要遺跡

は尖頭状石器、匙形土製品、ミニチュア土器、ヒスイ製玦状耳飾りなどが出土し、縄文時代前期の竪穴住居跡が６軒検出されている（塩尻市教育委員会編1982b）。女夫山ノ神遺跡からは縄文時代の竪穴住居跡が27軒検出され、直径10mを超えるような大形住居跡も含まれていた（塩尻市教育委員会編2002）。

＜中　期＞

環状集落のような大規模な遺跡が多く発見されている。松本平の大規模な遺跡の多くは南部の東西の山麓に展開した。松本平の遺跡数の増加に伴い、土器や石器の出土量は増え、器台や釣手土器、有孔鍔付土器、壺など器種は著しく分化した。前半の土器は関東と共通だが、後半には松本平を中心に唐草文系土器が独自の発展をみせ、伊那や飛騨などの地域に広がった。

中期の主な遺跡には、安曇野市の他谷遺跡（第４図16）・東小倉遺跡（24）・ほうろく屋敷遺跡（８）・塩田若宮遺跡（10）、山形村の淀の内遺跡（57）・三夜塚遺跡（59）、朝日村の熊久保遺跡（60）、松本市の坪ノ内遺跡（46）・小池遺跡（53）・一ツ家遺跡（56）、塩尻市の狙原遺跡（67）・平出遺跡（74）などがある。他谷遺跡では中期後半から後期にかけての竪穴住居跡が45軒検出され、おそらく100軒以上の集落であったと推測されている（穂高町教育委員会編2001b）。東小倉遺跡からは竪穴住居跡が53軒検出され、深鉢・浅鉢・石鏃・打製石斧・土偶など大量の遺物が出土している（安曇野市教育委員会編2006・2012a）。ほうろく屋敷遺跡からは竪穴住居跡や配石遺構が検出され、石器については特に原石や剥片が多量に出土する傾向に見られることから石器の製作集落としての役割を担い脈々と経営されていたのではないかと推定されている（明科町教育委員会編1991・2001）。塩田若宮遺跡からは敷石住居跡が１軒検出され、縄文時代中期から後期初頭の土器と打製石斧を主とした石器・石片が多量に出土した（明科町教育委員会編1997、安曇野市教育委員会編2011）。淀の内遺跡ではヒスイの原石や剥片、垂飾、大珠などが出土し、土壙や環状集落が検出されている（山形村教育委員会編2001）。三夜塚遺跡は発掘調査された面積は少ないものの、広大な遺跡範囲、多数採取された遺物から、松本平最大の縄文中期遺跡とされる（山形村教育委員会編2002・2009・2010）。熊久保遺跡からは中期の竪穴住居跡が30軒以上検出され、多数の土器・石器が出土した（朝日村教育委員会編2003）。坪ノ内遺跡からは竪穴住居跡が６軒検出され、土偶やミニチュア土器など多種多様な土製品が出土した。特に土偶は一遺跡での出土量は松本市で最も多い（松本市教育委員会編1990b）。一ツ家遺跡からは中期の竪穴住居跡が40軒、土坑が50基以上検出された（松本市教育委員会編1997a）。狙原遺跡では中期に属する竪穴住居跡が147軒検出され、住居は中央の円形広場を環状に取り囲むように配列されている（塩尻市教育委員会編1986b）。平出遺跡は縄文時代から古代まで続いた大規模な集落で、最も栄えた中期では88軒の竪穴住居跡が検出されている（塩尻市教育委員会編1981・1982a・1983b・1986a・1987a・2004・2006・2009・2010）。

＜後　期＞

後期になると遺跡数は減少する。土器は関東西部との共通性が強くなる。

後期の主な遺跡には、安曇野市のほうろく屋敷遺跡（第４図８）・北村遺跡（17）・離山遺跡（21）、松本市の女鳥羽川遺跡（29）・林山腰遺跡（35）、塩尻市の平出遺跡（74）などがある。

ほうろく屋敷遺跡からは中期初頭から後期初頭の範囲内と推定される竪穴住居跡が14軒確認された（明科町教育委員会編2001）。北村遺跡からは58軒以上の住居跡と469基の墓壙が検出され、469基中300基で人骨が認められた。さらに、仮面土偶が100点出土した（長野県埋蔵文化財センター編1993）。離山遺跡では後期から晩期にかけての大規模な配石遺構と住居跡の一部が検出された（穂高町教育委員会編1972）。女鳥羽川遺跡では低湿地という条件から多数の植物遺存体・木器を含む木材片が検出された。その他、土器や石器が出土し配石遺構も確認された（松本市教育委員会編1972）。林山腰遺跡では柄鏡形敷石住居跡が１件検出され、さらに土偶や被熱した石棒、ミニチュア土器など精神生活に関わる遺物が多く出土した（松本市教育委員会編1988a）。

＜晩　期＞

晩期の前半は長野県を中心とした佐野式が成立し、後半には関東・中部・東海一帯に浮線網状文土器が広がる。

晩期の遺跡は大町市の一津遺跡（第４図６）、松本市のエリ穴遺跡（55）・女鳥羽川遺跡（29）、塩尻市の福沢遺跡

(73)などがある。

一津遺跡では竪穴住居跡が2軒検出されているほか、石棺墓も検出された。また、石棒や土偶などの、信仰や呪術的な遺物が多数出土した(大町市教育委員会編1990)。エリ穴遺跡からは耳飾りが不完全なものも含めて約2600点出土し、国内最大規模である。また、松本市内で唯一晩期の竪穴住居跡が8軒ほど検出されている(松本市教育委員会編1997b)。福沢遺跡では縄文時代晩期から弥生中期初頭に位置付けられる小竪穴が全部で6軒検出され、半身・立像の土偶が出土している(塩尻市教育委員会編1985)。女鳥羽川遺跡からは縄文時代晩期の土器が2000点以上出土した。晩期の縄文土器の出土は、この地域では極めて稀なことであって、その意味から重要な資料である。また、大型の土偶が2点出土している(松本市教育委員会編1972)。　(田中・富山)

(3)弥生時代

<前　期>

弥生時代前期の代表的な遺跡は安曇野市のほうろく屋敷遺跡(第4図8)、松本市の針塚遺跡(31)・横山城遺跡(58)・境窪遺跡(49)、塩尻市の下境沢遺跡(66)などがある。犀川西岸の段丘上にあるほうろく屋敷遺跡からは再葬墓が16基検出されているが竪穴住居跡などの生活痕は見つかっていない(明科町教育委員会編1991・2001)。薄川沿いにある針塚遺跡からも再葬墓は検出されている(松本市教育委員会編1993b)。横山城遺跡からは沈線文や磨消縄文などの文様を用いた縄文時代の土器とともに、濃尾平野の特徴を持つ条痕文土器や磨製の石包丁も出土しており、縄文時代から弥生時代への過渡期の遺跡といえる。また、鎖川沿いにある境窪遺跡からも縄文時代的な円形住居跡と弥生時代的な方形住居跡が混在して見つかっており、方形周溝墓以前の礫床木棺墓や土器棺墓もみられ、前者からは人骨片が出土している(松本市教育委員会編1998)。前期末の遺跡であり、田川沿いにある下境沢遺跡からは、約30基の土壙群が検出されており、そのうちの1基から、この時代の特徴的な遺物といえる黥面付土器のほぼ完形品が出土しており、墓に伴う蔵骨器であったと考えられている(塩尻市教育委員会編1998)。

<中　期>

弥生時代中期になると、長野県内の土器は弥生時代中期の後半から地域独自の文化が形成されるようになり、千曲川流域の栗林・百瀬式、天竜川流域の北原・恒川式に大別される(千曲川水系古代文化研究所編1980)。この時期の遺跡は前期までの集落に比べて大規模化し、同じ場所に長期間継続する傾向がみられるようになる。代表的なものとして、大町市の中城原遺跡(第4図4)、松本市の百瀬遺跡(45)・宮湖木村遺跡(28)などがある。社館ノ内集落北部の段丘上に位置する中城原遺跡からは中期の竪穴住居跡1軒、集落の環濠もしくは集落を区切る溝、後期の方形ないしは円形周溝墓7基、木棺墓3基が検出されており、この地域は墓域であったとみられている(大町市教育委員会編1992)。百瀬式の標式遺跡であり、田川沿いにある百瀬遺跡からは、高杯・壺・甕・鉢・無頸壺などが出土している(松本市教育委員会編1993f・2001)。奈良井川と田川の合流扇状地にある宮湖木村遺跡からは竪穴住居跡が144軒検出され、弥生時代後期以降の土器も出土していることから長期間継続した大規模集落であることがわかる。土壙も189基検出されており、そこから人骨の出土があることから墓壙の可能性も指摘されている(松本市教育委員会編1986b・1987b・1989d)。

<後　期>

弥生時代後期の土器は地域色を増し、千曲川流域ではベンガラで外面を赤く塗った箱清水式土器、天竜川流域では無文で赤色塗彩もされていない座光寺原・中島式土器が出現する。諏訪地方にも橋原式土器が出現し、それまでの土器文化圏は解体し長野県内の土器の地域色は失われていく。この時期になると、松本平では塩尻市に遺跡が増加する傾向があり、柴宮遺跡(第4図75)・丘中学校遺跡(61)・剣ノ宮遺跡(77)・田川端遺跡(76)・和手遺跡(65)・向陽台遺跡(70)・中狭遺跡(69)・五日市場遺跡(68)などの集落が営まれ、丘中学校遺跡・剣ノ宮遺跡・和手遺跡・向陽台遺跡・中狭遺跡からは方形周溝墓、五日市場遺跡からは円形周溝墓も検出されている。田川左岸にある沖積地帯の扇状地上に立地する柴宮遺跡からはほぼ完形の銅鐸が出土している(大場・原1961)。同じく田川沿いにある丘中学校遺跡からはガラス玉と鉄鏃を埋納した方形周溝墓が検出されている(塩尻市教育委員会編1983a・1992)。尾根状台地の西端近くに展開しており、田川上流にある剣ノ宮遺跡からは、非常に規則的に並

んだ方形周溝墓が検出されている。そのすぐ西側にある田川端遺跡からはガラス玉の装身具が226点出土し、遺骸を埋葬したと思われる部分から鉄鋼や腕輪が出土している。このため剣ノ宮遺跡と田川端遺跡は両遺跡を合わせて一つの巨大な集落であったと考えられている(塩尻市教育委員会編1987b)。田川沿いにある和手遺跡からも竪穴住居跡と方形周溝墓が検出されており、住居群と方形周溝墓がセットで検出されるのは田川流域に展開していた集落の大きな特徴と言える(塩尻市教育委員会編1988)。(小林)

(4) 古墳時代

集落遺跡

<前　期>

前期の主な遺跡には安曇野市明科地域の上生野遺跡(第4図9)・潮神明宮前遺跡(12)、松本市の出川南遺跡(42)・向畑遺跡(47)・高宮遺跡(37)がある。

明科地域の上生野遺跡からは3世紀末の竪穴住居跡が検出されており、潮神明宮前遺跡からは4世紀初めの竪穴住居跡が検出されている(明科町教育委員会編2000)。

出川南遺跡は田川扇状地と奈良井川扇状地の交錯した沖積扇状地の最末端に位置している。この遺跡からは弥生時代後期から古墳時代前期にわたる竪穴住居跡6軒と前期の遺物集中出土地点が2か所発見されている(松本市教育委員会編1987b・1994a・2000c・2002a・2011)。松本市東部の中山地区に位置する向畑遺跡からは前期に属する土師器が出土の大半を占める竪穴住居跡を57軒確認されている(松本市教育委員会編1988a)。

<中　期>

中期の主な遺跡には大町市の借馬遺跡(第4図2)・来見原遺跡(3)・中城原遺跡(4)、安曇野市明科地域の龍門淵遺跡(14)、安曇野市穂高地域の馬場街道遺跡(20)、松本市の出川南遺跡(42)・向畑遺跡(47)・山影遺跡(40)・高宮遺跡(37)・出川西遺跡(41)、塩尻市の下境沢遺跡(66)がある。

木崎湖から流れ出た農具川沿いに位置する借馬遺跡では古墳時代中期から後期にかけての集落跡が調査されている。その中でも中期にあたる竪穴住居跡の特徴として、カマドも炉も存在していないことが挙げられている。この理由については詳しくは分かっていないが、どこか住居とは別の場所に配置されていたか、当時の住居に床がありその床上に炉が配置されていた可能性が指摘されている(大町市教育委員会編1980・1981)。来見原遺跡は来見原古墳群に関連した集団が営んだ集落として考えられている遺跡である(大町市教育委員会編1988)。中城原遺跡は社館ノ内集落北部の段丘上に位置しており、古墳時代中期から後期にかけての集落が確認されている(大町市教育委員会編1992)。

龍門淵遺跡は、犀川水運の難所として古くから祭祀が行われていた「龍門淵」と呼ばれる地盤の岩が突き出した大きな淵のそばに形成されており、坩・高杯などが検出されている(明科町教育委員会編2002)。また馬場街道遺跡は烏川によってつくられた広大な扇状地の最扇端付近に位置し、中期初頭の竪穴住居跡を2軒検出している。

出川南遺跡は、北東約1.5kmに弘法山古墳を望み、さらに南側には中山古墳群・向畑古墳群を望める位置にある。出川南遺跡出土土器群には台付甕が多く、これは東海地方からの強い影響だと考えられている。このような特徴をもつ土器群は松本平内で類例がない(松本市教育委員会編1999)。この遺跡から約750m離れた西南西に向畑遺跡・向畑古墳群が位置するが、向畑遺跡の竪穴住居跡は中期になるとわずか2軒のみとなり、その場所には向畑古墳群が築かれる。向畑遺跡に近接して山影遺跡があり、21軒の竪穴住居跡や馬具、鏃が出土した。向畑遺跡で前期集落を営んだ人々は、中期になって山影の地に集落を移し、集落内の有力者はかつて生活をしていた向畑の地に古墳を築いたと考えられている(松本市教育委員会編1988a・1993a・2008)。奈良井川と田川に挟まれた地域に位置する高宮遺跡からは中期にあたる竪穴住居跡8軒、同時期の遺物を集積した祭祀跡とみられる土器集中区18か所を検出している。この土器集中区は湧水による流路帯の線に添って検出されており、水や農業などにかかわる祭祀の跡と推定されている。また出川西遺跡は、奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地の接する沖積扇状地性堆積の末端に位置している。この遺跡からは中期にあたる土器が集中して検出される区域が19か所検出されており、意図的に置き去られたものと考えられている。高宮遺跡から出川西遺跡にかけての土器が集中して検出さ

れる地区一帯は祭祀に関わる特別な空間として認識されていた可能性が指摘されている(松本市教育委員会編2004a・2004b)。

田川へ向かって傾斜する片丘丘陵上に下境沢遺跡が位置しており、この遺跡からは5世紀代に属する竪穴住居跡が2軒検出されている(塩尻市教育委員会編1998)。

＜後　期＞

後期の主な遺跡には大町市の借馬遺跡(第4図2)、安曇野市穂高地域の藤塚遺跡(15)・馬場街道遺跡(20)、安曇野市明科地域の栄町遺跡(11)、松本市の出川南遺跡(42)・千鹿頭北遺跡(36)、塩尻市の平出遺跡(74)がある。

借馬遺跡は、住居跡の分布をたどっていくと時代が進むにつれてその多くが西方の高台に移っていくという特徴がある。その理由は、近くを流れる鹿島川の氾濫によって集落の再構築が繰り返された結果だと考えられている(大町市教育委員会編1980・1981、長野県埋蔵文化財センター編2003)。

穂高地域の集落の様相は、烏川扇状地先端部付近の矢原地籍を中心に展開していた藤塚遺跡と馬場街道遺跡で調査された程度で、未解明の部分が多い。藤塚遺跡は烏川によって形成された扇状地の扇端付近に位置する遺跡で、古墳時代後期の竪穴住居跡30軒と、掘立柱建物5棟が検出されている(安曇野市教育委員会編2009)。馬場街道遺跡では中期に引き続き、後期の竪穴住居跡が3軒検出されている(穂高町教育委員会編1987)。馬場街道遺跡、藤塚遺跡は中期から後期にかけて急速に発展した遺跡であり、穂高古墳群はその扇状地の扇頂、扇央付近に位置している(長野県埋蔵文化財センター編2005)。また烏川以北の旧有明村に属する中房川扇状地扇端部の地表景観は、矢原地籍との類似性が指摘されており、今後の調査が期待される(穂高町誌編纂委員会編1991)。

栄町遺跡は古墳時代後期を中心とする遺跡である。会田川を挟んで北側に位置する潮地区には古墳時代後期の古墳群が点在しており、これらの古墳群造営集団の集落跡である可能性が指摘されている。またこの遺跡では須恵器の投げ込みがなされた遺構が発見されている。この須恵器の時期は本遺跡の南側に位置する明科廃寺創建時期まで下るとされ、寺院造営との関連も指摘されている。竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡6棟が検出されており、その中で6世紀後半の竪穴住居跡は、直径15cm程度の川原礫を一面に敷き詰めるという特異な遺構を持つものであった(明科町教育委員会編2002)。

前期・中期と連続して集落が築かれてきた出川南遺跡は、古墳時代後期になると調査地点全域において竪穴住居跡が確認されるようになり、本格的な集落が展開し始める。後期にあたる竪穴住居跡は132軒、掘立柱建物跡は21棟検出されており、また古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居跡は11軒、平安時代前期にかけての住居跡6軒が確認されている(松本市教育委員会編1987b・1994b・2000c・2002a・2011)。また薄川の南側に千鹿頭北遺跡が位置している。この遺跡からは後期にあたる時期の竪穴住居跡が40軒、掘立柱建物跡が6軒検出されている(松本市教育委員会編1989a)。

松本平の南端、奈良井川扇状地上には平出遺跡(平出遺跡調査会編1955)がある。この遺跡からは古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡が161軒確認されている。その中でも古墳時代の竪穴住居跡の調査で住居を廃棄する際に出入り口に穴を掘り、その周りに砂利を敷き、石製模造品等を用いた儀礼・祭祀を行うという、住居の廃棄に伴うとされる行為が確認されている(塩尻市教育委員会編2009)。またこの時期になると中山地区からは集落遺跡は発見されなくなる。

古　墳

＜前　期＞

前期の主な古墳には大町市の中城原遺跡(第4図4)、松本市の弘法山古墳(L)と仁能田山古墳(中山36号墳)(R)、中山35号墳(R)がある。

中城原遺跡からは古墳時代初期の円形周溝墓9基、土壙7基が発見されている。土壙の主体は木棺で、鉄剣、鉄鏃などが副葬されていた(大町市教育委員会編1988、桐原・樋口1996)。

弘法山古墳は、松本市街地南方の中山丘陵北端にあり、全長66mの前方後方墳で前方部はかなり狭くて小さく、高さも後方部に比べると4m程低くなっている。内部主体は竪穴式石室の礫槨で天井石がなく、棺もない。被葬

者の腰の部分には水銀朱の痕跡があり、頭部のあたりには木質の容器に納められていたとされる鏡１面が発見された。鏡は直径約11.6cmの四獣文鏡で、半三角縁の舶載鏡であると考えられている。出土土器はいずれの器種も東海地方西部や畿内の影響がその形態、紋様に色濃く反映されていることが指摘されており、その特徴から３世紀末から４世紀初頭に古墳の時期が推定されている（弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編1978、松本市教育委員会編1993g）。弘法山の東隣の仁能田山山頂には中山36号墳があり、木棺直葬の可能性が高い古墳である。粘土床からは半三角縁獣帯鏡１面が出土している。またこの鏡とともに出土した壺形土器は、祖形が濃尾の元屋敷式と思われるものであった。弘法山古墳より少し時期は下り、４世紀後半頃の築造とされている（弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編1978、松本市教育委員会編1989c）。中山35号墳は墳丘径30m、高さ３mを測り、そばに位置する中山31～34号墳と比べると際立って大きい古墳である。また墳頂部は広い平坦面を持っている。未掘ではあるが、立地・墳丘のあり方から前期から中期古墳の可能性があると指摘されている（松本市教育委員会編1989c）。

＜中　期＞

中期の主な古墳には大町市の来見原古墳群（第４図B）・中城原遺跡（４）、松本市の桜ヶ丘古墳（G）・針塚古墳（H）・向畑古墳群（47）・平畑遺跡（L）・平田里古墳群（O）がある。

来見原古墳群は居谷里湿原から流出する沢により押し出された扇状地の中腹に位置する。現在、７基の円墳が確認されている。山の神古墳は７基中最大の古墳で、立地などから見ると最も古いタイプの古墳であると考えられている。１号古墳出土刀子、３号古墳直下の堰出土の直刀、山の神古墳の立地から５世紀から６世紀初頭に築造されたと考えられている（大町市教育委員会編1988）。また中城原遺跡からは集落遺跡と時期を同じくする４基の古墳が確認されており、なかでも４号古墳から出土した須恵器の子持壺は西日本的なものである（大町市教育委員会編1988）。長野県の子持壺は、今回Ｆ９号墳から出土した子持壺片と合わせると２例確認されている。

桜ヶ丘古墳は松本市街地の北西部に突き出た城山丘陵と南東部の中山丘陵に抱かれた地域の北東の一角に位置している。直径30mの円墳で、副葬品には、前額部に当てる帯を根として、これに三支の立挙装飾を附加する「額当式」に属し「立挙式」の系統に含まれるとされる天冠や、その天冠に付着していた竹製竪櫛、剣１本、刀５本、三角板革綴衝角付冑、革綴頸鎧、長方板革綴短甲などが確認されている。冑・頸鎧・短甲の特徴からこれらは５世紀中葉の武具であると推定され、天冠の型式は鉢巻式帯冠であり、またその立飾の形状などから５世紀後半から６世紀前半のものとされる（木郷村教育委員会編1966、松本市教育委員会編2003c）。また、薄川扇央部の里山辺には直径20mの周溝が巡る積石塚の円墳の針塚古墳がある。内部主体からは鈕具や内行八花文鏡などが出土している（松本市教育委員会編1991a）。向畑古墳群は鉢伏山西側の最も起伏に富む山麓面に位置している。初期群集墳の様相を呈していることが特徴であり、これは同じ時期に未だ単独墳が築かれていた松本市域の中期古墳の特徴と異なっている（松本市教育委員会編1988a）。平畑遺跡は弘法山古墳の直下に位置しており、この遺跡からは方形周溝墓４基、５世紀頃の古墳１基が確認されている。それらの造営時期は弘法山古墳の前後に位置すると考えられ、弘法山古墳の成立過程を知る上で重要な資料である（松本市教育委員会編1994a）。平田里１号墳は出川南遺跡内に築かれている古墳である。時期は出土した須恵器によって５世紀後半から６世紀初頭に比定されており、また古墳の規模は周溝内側の上端で直径約24m、周溝外側の上端では直径37m～38mであると推定されている。この墳丘の規模は平地に築かれた古墳のうち、松本平内最大規模である（松本市教育委員会編2011）。また出土遺物には、馬具の他に円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪など大量の埴輪が出土している。その中でも形象埴輪は出土地点が限定されており、墳丘の北西部に埴輪祭祀の場が存在した可能性が指摘されている。平田里１号墳はその規模や埴輪を伴っている点で同じく平地に築かれた小規模な古墳とは異なっており、また丘陵に築かれる事の多い大型古墳とも立地を異にしているという特徴がある（松本市教育委員会編1994a）。

＜後　期＞

後期の主な古墳には大町市の新郷古墳群（第４図A）、池田町の鬼の釜古墳（C）、安曇野市の穂高地域を中心とする穂高古墳群（V）、安曇野市明科地域の能念寺古墳群（D）・潮金山塚古墳群（E）・上郷古墳（F）、松本市の丸山

古墳(I)・安塚古墳群(K)・秋葉原古墳群(J)・南方古墳(N)・桜立古墳(P)・中山古墳群(鎌形原古墳群)(Q)、山形村の殿村古墳(U)、塩尻市の平出古墳群(S)・繩ノ神古墳群(T)がある。

木崎湖の西縁の小熊山山麓に位置する新郷古墳群は9基からなる積石塚古墳である。9基の古墳のうち、調査された古墳は新郷1号墳で、須恵器・直刀・馬具・装身具などを副葬していた。ここでは追葬が行われており、その最上層からは火葬骨が多量に検出されていた。このことから火葬の風習を受容した後裔の存在が指摘されている(大町市史編纂委員会編1985、桐原・樋口1996)。鬼の釜古墳は大穴山の西峰にあり、前方には高瀬川が位置している。鬼の釜古墳の位置する池田町に所在する古墳は後期である。横穴式石室が開始されており、その特色として、高瀬川に接した微高地上に築造されること、古墳が単独墳で群集墳を形成していないことがあげられている。鬼の釜古墳は円墳で、羨道部及び前庭部から、陶器破片・古銭・須恵器破片が出土している(池田町教育委員会編1977)。穂高古墳群は、その大半が北アルプス東麓から松本平へ流れ込む沢によって形成された扇状地上に位置している。伝承のみの古墳なども含めると87基以上の古墳が確認されている(桐原1991)。穂高古墳群については、第3節で詳述する。

明科地域には、長峯山山地から潮神明宮周辺の山麓にかけて南から能念寺古墳群、潮金山塚古墳群、上郷古墳などが築かれており、正確な数は把握できていないが20基以上の古墳があると予想されている。それらの古墳は明科廃寺を創建した氏族の墓域に含まれると考えられている。能念寺古墳群は3基からなる古墳群で、その中に木棺直葬が想定されている古墳がある。その古墳から出土した直刀2本の地鉄の特徴などから6世紀前半代の古墳と推定されている。またこの古墳群には古墳時代前期にあたる古墳が存在している可能性が指摘されている(明科町教育委員会編1994)。潮金山塚古墳群からは2000年までの調査で8基の古墳が確認されている。中でも7号墳は一辺20mの方墳で周溝を巡らせており、周溝を巡らせた方墳は7号墳の他には、松本平全域でも中山15号墳のみの確認であり、特殊な古墳として位置づけられている(桐原2002)。また潮金山塚古墳群はその出土遺物などから、明科廃寺を創建した氏族の古墳である可能性が高いと指摘されている。上郷古墳は横穴式石室で直刀2本と轡が出土しており、それらの特徴から7世紀末葉に比定されている(長野県埋蔵文化財センター編1993、明科町教育委員会編2000・2005)。

丸山古墳は、松本市街地東方の里山辺地区に位置し、出土須恵器から6世紀中頃から7世紀頃に築造されたと考えられている小規模な積石塚古墳である。この古墳の特徴として、藤井沢が形成する小規模扇状地の扇頂部に位置していることと、馬具と思われるものが出土していないことなどが挙げられる。これらは松本平の他の積石塚古墳群の特徴と異なり、長野県の積石塚古墳の性格を考える上で注目される(松本市教育委員会編1993d)。松本市の平坦部には9基からなる安塚古墳群がある。7世紀後半になって突如出現した古墳群で、8世紀前半を中心とした古墳群と推定されている。第8号墳からは袴帯金具や絎鍾車などが出土した。2・3・4号墳の被葬者は火葬によって火を受けていたと考えられ、比較的早い段階に山深い盆地に仏教思想が流入していた可能性がある(松本市教育委員会編1979、直井1994)。また石室を造らず、ただ石で囲った中に炭や骨片がある遺構も存在している(松本市教育委員会編1989b)。他にも上高地線新村駅東側に5基からなる秋葉原古墳群がある。その中で秋葉原1号墳は7世紀末から8世紀前半の古墳と推定され、松本平において奈良時代に入っても古墳を築いていた例として注目される。この秋葉原古墳群は安塚古墳群と位置も時期も近いことから関係性が指摘されており(松本市教育委員会編1983)、奈良井川西岸域の開発にあたった初期集団の墓域とも考えられている(松本市教育委員会編2000a)。また2つの古墳群の共通点として、地面を掘り下げて丸い扁平な河原石で無袖の横穴式石室を築くという点があげられている(松本市教育委員会編1989b)。南方古墳は、薄川扇状地左岸に位置する径24mの円墳である。この古墳は盗掘の被害に遭うことがなかったため、貴重な資料を数多く残していた。石室は銅張りの片袖式で、出土した701点の装身具をはじめとする遺物は、石室内の分布状態から4群に分けられている。その中でも特徴的な遺物として、金銅製の主頭太刀、長野県内で2例目となった盛鐙や、銅鏡とセットで使用されたと考えられている承盤などがあげられる(松本市教育委員会編1990a)。桜立古墳は中山丘陵から寿方面に面する西側丘陵部に位置している。副葬品には四乳唐草文鏡・頭椎太刀・雲珠・轡などがあり、時期は7世紀代に推定さ

れている。この古墳は西側丘陵部に築造された最初の古墳である（東筑摩郡松本市・塩尻市郷土資料編纂会編1984）。中山古墳群はおよそ南北1.2km、東西1.1kmの範囲にある群集墳で5世紀代に始まり、6世紀後半から7世紀代にかけてさかんに築かれ、8世紀に入っても利用されていたとされる古墳群である（桐原1983a）。しかし、以前から同じ名称が松本市合併前の旧中山村内に存在する全古墳を指す総称としても使われている。その中山古墳群の一角、中山丘陵の南斜面に位置する鍬形原地区にはかつて多数の古墳があり、明治初期には80余基を数えていた。1990年から1993年の調査で中山16・38・49・50・51・52・53・54・55・57号墳の10基の古墳が調査された。これらの古墳の規模はいずれも小ぶりで墳丘は周溝径からみて、大きいものでも長径15m、小さいもので7m～8mと推定されている。石室規模は38号墳のみで判明しており、7.1mであった。これらの古墳の時期は、最も古いものは52号墳で6世紀の前半代に比定されており、新しいものでは16、49号墳で7世紀から8世紀前半代に比定されている（松本市教育委員会編2003b）。

殿村古墳は出土した須恵器杯・杯蓋・長頸壺などから8世紀前半頃の築造であると考えられている。また周溝が巡っており、石室は半地下式の横穴式石室で3室に区切られていることが特徴である（山形村教育委員会編1987）。

先に述べた平出遺跡の背後には3基の円墳からなる平出古墳群がある。2号墳は尾根の傾斜を利用して築かれた片袖式の横穴式石室で、奥壁には鏡石を中央に配置している。被葬者は石室奥に3体、入口部に2体以上が発見されており、土器の型式から6世紀中葉から後半に比定されている（塩尻市誌編纂委員会編1995）。また、筑摩山地山麓に位置する繩ノ神古墳群は3基の古墳群で、その裾を切るように田川が貫流している。この古墳群は標高860m前後の台地上に位置し、盆地部を一望する高所に築かれた。1号墳・2号墳は葺石が確認され、それは松本平の6世紀以降の古墳としては松本平内で他に例がない。また1号墳からは鏡が出土しており石室内から半分と石室外から縁の部分が発見されている。この地域を長期間支配していた有力者の存在が予想される（塩尻市誌編纂委員会編1995）。

（5）古　代

信濃国の成立

701年の大宝律令の制定によって古代律令制国家の体制が確立した。それに伴い、地方行政区画である東山道の一国として信濃国が成立する。その領域はほぼ現在の長野県にあたるが木曽郡の大部分は美濃国に属した。中央政府は信濃国に、東北の蝦夷に対し櫛戸・軍馬・兵革・兵粮などを供給する前線基地としての役割、西南の外寇に対する防人の供給地の一つとなることなどを期待したと想定されている（桐原・樋口1996）。信濃国の下部組織としては郡（大宝令以前は評）がおかれた。評（郡）は、5世紀の頃から各地に起こった政治的地域である国々の後身にあたる。それらはのちの『倭名類聚抄』や『延喜式』にみえる10郡、すなわち伊那（5郷）・諏訪（7郷）・筑摩（6郷）・安曇（4郷）・更級（9郷）・水内（8郷）・高井（5郷）・埴科（7郷）・小県（7郷）・佐久（8郷）の各郡であったとみられる。松本平には、このうち筑摩郡と安曇郡が属する。郡の規模は管轄する里（郷）の数によって、大・中・小の三等級、郡時代からは大・上・中・下・小の五等級に格付けされており、信濃の各郡（評）は中評、また中郡ないし下郡であった。

明科廃寺

明科廃寺（第4図W）から出土している軒丸瓦は、その文様や形状から白鳳時代の7世紀第3四半期（651～675年）に位置付けられるもので、信濃における最古の瓦の一つである。また出土した須恵器は最も古い時期のものは7世紀後半と推定されており、新しいものは8世紀前半と同定されている。また2001年に行われた発掘調査によって掘立柱建物跡3棟、布掘り基礎を持つ掘立柱建物跡1棟などに伴って多量の瓦が出土している。それらを1953年の調査で出土した古代瓦、鴟尾、瓦塔の一部と併せて、明科廃寺は7世紀の第3四半期に創建され8世紀初頭までの約50年間存続したものと推定されており、県内で最も古い時期の寺院のひとつとして注目されている。明科廃寺から出土した軒丸瓦と類似する瓦は、滋賀県大津市の布川廃寺跡、岐阜県飛騨市の寿楽寺廃寺跡などからも出土している。近年の調査で寿楽寺廃寺から出土した軒丸瓦と明科廃寺から出土した軒丸瓦が同じ木製笵型

を使用し製作されたことが判明した。明科廃寺の瓦は寿楽寺廃寺よりも先に製作されたと推定されており、当時の信濃と飛騨の人々の東山道ルートによる交流が推測されている。出土土器類は細片が多く、7世紀後半から8世紀台の特徴を示す杯蓋や盤なども出土しているが、土器類の多くは平安時代9世紀以降のものである(明科町教育委員会編2000、上田市立信濃国分寺資料館編2005、百瀬2012・2014)。

集落・官衙

＜農具川流域＞

大町市の借馬遺跡(第4図2)・来見原遺跡(3)がある。

借馬遺跡からは規模の大きい平安時代後期にあたる竪穴住居跡が13軒検出されている。13軒のうち、さらに時期別に区分すると前葉3軒、中葉7軒、後葉3軒になる。このうち前葉のものは川の南にあり、残りは川の南北にあることが指摘されている(大町市教育委員会編1981)。来見原遺跡は奈良時代の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡11軒・竪穴1軒・ピット・集石を検出している(大町市教育委員会編1988)。

＜黒沢川、烏川、梓川流域＞

安曇野市の三角原遺跡(第4図23)・馬場街道遺跡(20)・吉野町館遺跡(22)がある。

黒沢川と周辺の河川によって形作られた扇状地の扇端に三角原遺跡が位置している。三角原遺跡は9世紀中頃に誕生した遺跡で、2005年度の調査では平安時代の竪穴住居跡が56軒検出されている(長野県埋蔵文化財センター編2005)。馬場街道遺跡は、烏川扇状地の扇端部に立地している。この遺跡からは奈良時代の竪穴住居跡3軒、平安時代後半の竪穴住居跡5軒、土壙1基、平安時代と予想される掘立柱建物跡1棟が確認されている(穂高町教育委員会編1987b)。また梓川と奈良井川が合流して犀川となる地域の左岸に吉野町館遺跡遺跡がある。この遺跡からは平安時代の竪穴住居跡8軒が検出され、出土土器から9世紀後半のものと考えられている。特徴的な遺物としては、緑釉陶器、須恵器の蓋を転用した硯、「長□」と書かれた墨書土器などがあげられる(豊科町教育委員会編1992)。

＜犀川流域＞

安曇野市明科地域のほうろく屋敷遺跡(第4図8)・上生野遺跡(9)・栄町遺跡(11)・潮神明宮前遺跡(12)・古殿屋敷遺跡(13)・北村遺跡(17)がある。

また明科地域の北端、犀川西岸の段丘上にほうろく屋敷遺跡がある。この遺跡は明科町の北の玄関口で、善光寺平と松本平との人やモノの交流の要所にあたっている。この遺跡からは平安時代の竪穴住居跡20軒、掘立建物跡1棟が検出された(明科町教育委員会編2001)。上生野遺跡は犀川右岸の河岸段丘上に位置する遺跡であり、平安時代の竪穴住居跡が4軒検出されている(明科町教育委員会編1995)。栄町遺跡は明科段丘の北端部に位置し、南方250mに隣接する白鳳時代の古代寺院(明科廃寺)を経済的にささえた人々の居住域と推定される明科遺跡群内に立地している。近接している龍門淵遺跡の様相も含め、農業ではなく犀川を中心とした水運の支配を経済基盤として、古代寺院を創建出来るほどの富みを蓄えた人々の存在が考えられている(明科町教育委員会編2002)。潮神明宮前遺跡は第1次調査で平安時代の竪穴住居跡を34軒検出し、その後の調査でも1軒検出されている(明科町教育委員会編2005)。また古殿屋敷遺跡は明科地域で初めての平安時代の木棺墓を検出した遺跡である。出土遺物には八稜鏡や緑釉陶器があり、八稜鏡は漆塗りの木製容器に収納されていた可能性が高いとされる。他にも陶器、土器類は一辺50cmの正方形の範囲に納まるように分布していることから、木箱等の有機質容器に納められていた可能性が指摘されている(安曇野市教育委員会編2013)。また犀川右岸に位置する北村遺跡からは、集落の収穫物を管理していたと考えられる総柱建物の「倉庫」が2棟検出されている。その倉庫を持つ有力な竪穴住居と掘立柱建物の小群を中心に、周囲に小規模な住居小群が展開しているという特徴が指摘されている(長野県埋蔵文化財センター1993)。

＜薄川中、下流域＞

千鹿頭北遺跡(第4図36)は松本平の東端鉢伏山の山麓に位置しており、奈良時代の建物跡10軒、平安時代の建物跡7軒を検出している(松本市教育委員会編1989a)。

薄川右岸には針塚遺跡(第４図31)・堀の内遺跡(32)・石上遺跡(33)・県町遺跡(27)・下原遺跡(34)がある。

針塚遺跡は竪穴住居跡が19軒、掘立柱建物跡を３軒検出している(松本市教育委員会編1993b)。堀の内遺跡は、平安時代の竪穴住居跡を67軒検出している。この遺跡では古墳時代後期までに営まれていた集落が7、8世紀の200年間で一度断絶していたことが判明しており、平安時代になって新たに営まれ始めた遺跡であると考えられている(松本市教育委員会編1992・2002b)。石上遺跡は竪穴住居跡を33軒検出しており、それらは９世紀後半から10世紀前半と12世紀の二時期に大別することが出来る。またこの遺跡からは後期古墳の周溝部分が検出されている(松本市教育委員会編1991b)。また県町遺跡からは46軒の掘立柱建物跡が検出されている。この遺跡は出土遺物に特徴があり、陶硯と７点の転用硯が出土している。転用硯は１点を除く全てが内面に摩耗痕が見られる灰釉陶器の破片を使用している。硯として利用し易い破片を選択し、硯の転用としていた可能性がある。これらの硯のうち、３点に朱墨痕がみられる。朱墨は税を納入する際や帳簿を点検する際にチェックする役割を担うものと考えられていることから、この遺跡は官衙的な機能を持っていた可能性が指摘されている。また、直接作業を行ったとされる遺構は見つかってはいないが、鍛練鍛冶(小鍛冶)が行われていたことを示唆させる遺物が出土してもいる(松本市教育委員会編1997c)。他にも７世紀後半に突然出現する下原遺跡は８世紀と11世紀の２時期を核に集落を営んでいたとされる遺跡で、９軒の竪穴住居跡が検出されている。この住居に付随するカマドのほとんどが東西方向に位置しており、これは古代の松本平内における一般的な傾向であるとされている(山形村教育委員会編2009)。

＜奈良井川・田川＞

松本市の小原遺跡(第４図50)・平田本郷遺跡(43)・出川南遺跡(42)・南栗遺跡(39)・北栗遺跡(38)・下神遺跡(44)、塩尻市の吉田川西遺跡(51)・平出遺跡(74)・和手遺跡(65)・下境沢遺跡(66)がある。

奈良井川と田川に挟まれた位置に小原遺跡は、奈良時代末期から平安時代の竪穴住居跡が90軒を超えるとされる大規模集落跡である。出土遺物に美濃須衛窯産の須恵器杯や、甲斐地方の形態・技法を踏襲したと考えられる甕などが出土しており、地域間の交流を想起させる。他にも朱墨が全体に付着した灰釉碗の転用硯、鉄滓12点、鉄滓の付着した杯が出土しており、この杯は坩堝の可能性があり鍛冶との関連が指摘されている(松本市教育委員会編1993e・1996)。平田本郷遺跡は平安時代の竪穴住居跡を95軒、掘立柱建物跡を６棟検出した遺跡である。破片資料のため全容は不明であるが、「美濃国」の刻印がみられる須恵器杯が検出されている。また他の出土遺物として、鉄製品６点、銅や鉄の金属製品24点、鞴(フイゴ)の羽口が97点以上、鉄滓10点が発見されており鍛冶遺構の存在が指摘されている(松本市教育委員会編1994a・1995・2003a・2008)。奈良井川と田川の合流扇状地の末端に位置する出川南遺跡からは、奈良時代の竪穴住居跡が21軒、平安時代の竪穴住居跡が81軒検出されており、古墳時代後半から平安時代にかけて存在した大規模な集落として、松本市域でも重要な遺跡である(松本市教育委員会編2011)。奈良井川西岸の段丘崖に位置する南栗遺跡からは、竪穴住居跡407軒、掘立柱建物跡132棟が検出されている(松本市教育委員会編1984・1986a・2000a、長野県埋蔵文化財センター編1990b)。また同じく奈良井川左岸に位置する北栗遺跡からは、竪穴住居跡298軒、掘立柱建物跡108棟が検出されている(松本市教育委員会編1985・1987a・1990d・1993g、長野県埋蔵文化財センター編1990a)。また1985年の調査では南栗・北栗遺跡合わせて竪穴住居跡96軒、掘立柱建物跡80棟が検出されている(松本市教育委員会編1985)。奈良井川に東西を挟まれた地区に位置する下神遺跡からは、竪穴住居跡が216軒、掘立柱建物跡が81棟検出され、奈良三彩の小形短頸壺や佐波理の鋺片、陶硯、漆紙文書、皇朝十二銭や「草茂」と書かれた墨書土器などが出土している。特にこの墨書土器は、古文献に見える「蘇我郷草茂荘」との関連が指摘されている。(松本市教育委員会編1984・1989b、長野県埋蔵文化財センター編1990a)。

奈良井川・田川周辺の遺跡の共通点としてあげられるのは、何らかの宗教に関わっていたと考えられる遺物の存在である。小原遺跡では「財富加」「卍」と書かれた墨書土器が検出されており、吉田川西遺跡でも「財富加」と書かれた土器がみられる。「財富加」とは「財」と「富」を「加える」事を願う呪儀に関わるものと考えられており、集落を越えて同様の呪儀を行っている可能性がある。また平田本郷遺跡からは、寺院に関する「東寺」「寺」

と書かれた墨書土器が検出されている(松本市教育委員会編1993a、上田市立信濃国分寺資料館編2007)。

吉田川西遺跡は316余軒もの平安時代の住居跡や、「美濃国」刻印のある美濃須衛窯産須恵器、瓦塔、鉄鉢などの特殊品を多数検出している(塩尻市教育委員会編1986d、長野県教育委員会編1989)。平出遺跡は古墳時代に大規模な集落を営んでいたが、8世紀代になると稀薄になり、土器の様式により8世紀代と推定される竪穴住居跡は2軒程度となる(塩尻市誌編纂委員会編1995)。和手遺跡は古墳時代末から奈良時代を中心として栄えた集落と考えられており、古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡13軒、平安時代にあたる竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡3棟が確認されている(塩尻市教育委員会編1988)。古墳時代中期にも遺構が確認されていた下境沢遺跡からは、9世紀後半から10世紀前半にあたる竪穴住居跡を33軒検出している。この遺跡からは「しし」といった記号を1つまたは2つ並べた墨書土器が多数出土しており、特徴の1つとされている(塩尻市教育委員会編1998)。

＜薄川・女鳥羽川＞

松本市の古屋敷遺跡(第4図25)・大輔原遺跡(26)がある。

古屋敷遺跡では、奈良時代の竪穴住居跡2軒、平安時代の竪穴住居跡25軒が検出されており、平安時代の竪穴住居跡からは八稜鏡が出土している。この遺跡の北側は多数の古瓦が出土する地帯として古くから知られており、古屋敷遺跡からも何点か検出されている。この遺跡は八稜鏡などの出土遺物から見ても、有力な集落の一部にあたると考えられる。よってこの瓦は、多数の古瓦を出土させる寺院や郡衙、国衙などに繋がるものである可能性が高いとされる(松本市教育委員会編1993c)。

また女鳥羽川左岸に大輔原遺跡があり円面硯や古式の灰釉陶器、青銅製巡方などの遺物が出土している。この遺跡の近隣では古瓦の出土や大型の掘立柱建物が存在しており、信濃国府推定地の有力候補である惣社地区に近い(松本市教育委員会編2000b)。

窯跡群

長野県における須恵器生産の開始は、6世紀初頭の更級郡にある松ノ山窯が最初であるとされる。この松ノ山窯は在地の豪族が古墳への副葬品等を生産するために、陶邑から工人を招来して開窯したものと考えられている。この後、長野県では約1世紀の空白が存在し、7世紀中葉から後葉になって各地に窯が出現する。

松本平では7世紀代から8世紀中ごろにかけて、妙義山南麓の新切窯跡群(第4図30)をはじめとして、中山丘陵南部に鍬形沢窯跡(48)、塩尻市の菖蒲沢窯跡(78)など複数の須恵器生産地が出現している。この時期は、松本平の集落遺跡において岐阜県の美濃須衛窯跡群の製品の出土が目立っており、須恵器に対する需要の高まりが開窯の契機になったと考えられている。また、菖蒲沢窯の製品は美濃須衛窯から陶工が移動したと考えられるほど似ていることが特徴としてあげられている(塩尻市教育委員会編1991)。9世紀頃になると、松本市四賀の会田盆地に点在する会田盆地窯跡群や、上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群(18)、田溝池窯跡(19)などの筑摩東山窯跡群に須恵器生産が集約されたと考えられている。この傾向は須恵器だけでなく、土師器にも当てはめることができるとされ、集落遺跡出土の土師器の規格が揃いはじめた点と、土師器焼成坑の遺構が筑摩東山窯跡群に限られている点は注目される。また上ノ山窯跡群、菖蒲平窯跡群から出土した瓦や、須恵器壺には土師器甕の技法であるハケメが施されたものがあり、土師器と須恵器が一体的に生産されていたことも指摘されている。この後、9世紀前葉頃になると、松本平に流通する土器は全て筑摩東山窯跡群で生産するという体制が整ったと考えられ、松本平の古代住居跡で使われていた土器のほとんどはここで焼かれていたものであるとされている。松本平において須恵器窯での食膳具生産は、9世紀前葉までで終了したとされ、9世紀中葉から後葉にかけては土器焼成坑での生産が行われていたと考えられている。また須恵器貯蔵具は9世紀後葉まで窯での生産が行われていたものと推定されている(豊科町教育委員会・豊科町東山遺跡調査会編1999、豊科町郷土博物館編1999、鳥羽2013)。

文献・遺跡からみた牧

10世前半紀に編纂された『延喜式』によると、松本平には埴原牧・大野牧・猪鹿牧の3つの牧が置かれていたと記されている。そのひとつの埴原牧に関しては、これまでに様々な調査や考察が発表されており、放牧していない時期に馬を繋いでおく施設である繋飼場とされる跡や牧の管理集落とされる遺跡などが指摘され、古屋敷、

千石、牧の内の３か所がそれに当たると考えられている。しかし、これらはいずれも特別な地割が今に残るなどの地表景観と伝承によるものであり発掘調査などは行われていない(伊那市教育委員会編1999)。また、埴原牧の管理集落とされるのは牧の南西にある吉田川西遺跡(第４図51)や吉田向井遺跡(52)であり、大規模な集落が展開している。また吉田川西遺跡からは９世紀後半から10世紀の竪穴住居跡から「楙原」とかかれた墨書土器が発見されており、牧との関連が想定される。松本平における牧の研究は進んでいるとはいえず、今後の進展が期待される。

(富山)

第３節　穂高古墳群の概要

本学では、穂高古墳群を以下のように定義・分類づけている(國學院大學文学部考古学研究室編2010)。

1．「穂高古墳群」は『信濃史料』(信濃史料刊行会編1956)において分類されたＡ群～Ｄ群、『国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』(長野県教育委員会編1969)において分類されたＥ群～Ｇ群、『穂高町の古墳』(穂高町教育委員会編1970)において分類されたＨ群、『長野県史』(河西・松尾1984)において旧穂高町地域に分布する古墳群を構成する一部とされた松川村所在古墳によって構成される。Ｃ群は近年追加された３基を含む(安曇野市教育委員会編2010)。

2．従来古墳群全体を示す名称として多く用いられてきた「有明古墳群」という語については、Ａ群～Ｄ群までを指す場合と旧穂高町の古墳全体を示す場合の２通りの意味をもち、なおかつ松川村所在古墳を含める場合と含めない場合があることから、これを用いず「穂高古墳群」の名称に統一する。

3．単独墳については現在までの研究史上の慣習やＧ１号墳(上原古墳)のように未知の古墳が周辺に存在している(していた)可能性(穂高町教育委員会編2001a)を考慮して古墳１基のみで構成されていても「群」とする。

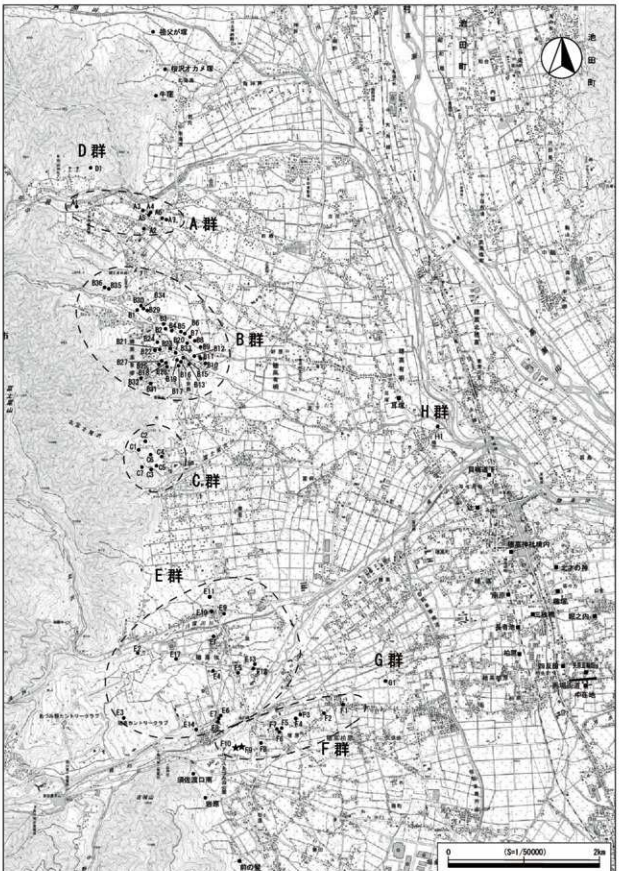
4．Ａ群～Ｇ群は穂高古墳群を構成するそれぞれ独立した支群とし、いくつかの支群の総称として習慣上・便宜上用いられてきた「有明古墳群」「西穂高(僕・塚原)古墳群」などの名称は用いない。

5．各支群を構成する古墳の総数は「信濃史料」以降「所属支群を示すアルファベット＋通し番号」の表し方で文献上に確認できたものを総数として報告した。また穂高古墳群全体を構成する古墳の総数は各支群の総数の合計に加え、「所属支群を示すアルファベット＋通し番号」の表し方で文献上では確認できないが以前に文献上で存在が確認されているもの(例：狐塚４・５号古墳)を考慮して「87基以上」とする。

以下、上述の諸文献や各報告書をもとに支群ごとに概要をまとめる。

Ａ　群

宮城地区に位置し、油川左岸に沿って分布している。1964年の穂高町教育委員会による悉皆調査では、Ａ群中には８基が存在していたが、そのうち４基が湮滅している。もっとも高い場所にＡ１号墳があり、残りの３基は800mから1100mほど下った場所にある。Ａ１号墳は陵塚(みさきづか)ともいい、墳丘・石室ともに原形に近い形で残っている。穂高古墳群中もっともよく残存されているもののひとつである。石室は無袖式の横穴式石室であり、天井石は12石ある(第６図１)。石材は花崗岩が用いられている。副葬品としては、土師器、須恵器(杯・坩・甕・提瓶)、武器(直刀)、馬具が出土したといわれているが現存していない。1982年に筑波大学によって墳丘・石室実測調査が行われた(岩崎・松尾・松村1983)。Ａ３号墳は、墳丘・側石がわずかに残っており、須恵器が出土したといわれている(桐原1991)。Ａ６号墳は犬養塚(いぬかいづか)ともいい、穂高古墳群中では規模の大きなものである。石室は東壁の全てと西壁の一部および奥壁が残っているが、天井石はない(河西・松尾1984)。須恵器(杯・杯蓋・平瓶・横瓶)、武器(直刀・鐔・鉄鏃)、馬具(雲珠・杏葉・轡・鐙・尾錠)、装身具(勾玉・管玉・ガラス小玉・切子玉・金環)と多量の副葬品が出土しており(第７図１)、これらは有明山神社社宝となっている。1982年に筑波大学によって遺物実測調査が行われた(岩作・松尾・松村1983)。Ａ７号墳は県塚(あがたづか)ともいい、Ａ群中最東端に位置する。石室の奥壁はほぼ原形に近い形で残り、東西の側壁は下部のみが残っているが天井石はない(穂高町教育委員会編1970)。Ａ８号墳は、現在墳丘はなく内部主体も不明である。土師器、須恵器(高杯・甕・瓶・提瓶)、馬具(尾錠)、



第５図　穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡

安曇野市教育委員会編 2010a、文化庁文化財保護部編 1983 をもとに作成。A2・A4・A5 の位置は藤沢 1963 による。B14・B26・E15・E16・E18・E19 の位置は不詳。なお、高瀬川を挟んだ対岸の池田町にも数基の円墳が存在するが、本図には示していない。

装身具(水晶製切子玉・金環)が出土している(桐原1991)。

B　群

松尾、四ッ堀、小岩岳地区に位置し、天満沢川両岸に沿って36基が分布している。B１号墳はぢいが塚ともいい、墳丘はB群中最大規模であり石室の規模も大きい。墳丘は半壊しているが、石室内部はほぼ完全に残っている。無袖式の横穴式石室であり、天井石６石のうち１石は石室内に落ち込んでいる(第６図２)。石壁に巨大な自然石を用いていることが特徴である。1982年に筑波大学によって墳丘石室実測調査が行われた(岩崎・松尾・松村1983)。B３号墳は蓮塚(れんづか)ともいい、この古墳も墳丘は半壊しているが、石室はほぼ完全に残っている(桐原1991)。B５号墳は金堀塚(かねほりづか)ともいい、現在は東壁のみが残っている。石室の２箇所に焚火の跡がみられた(河西・松尾1984)。人骨３体が出土しており、須恵器(長頸瓶・提瓶)、武器(直刀・鉄鏃)、馬具(轡・尾錠)、装身具(勾玉・管玉・小玉・金環)、茶碗のほか多数の遺物が出土している(桐原1991、第７図２)。1918年に南安曇教育会によって発掘調査が行われた(太田1923)。B13号墳の墳丘規模は大きくはないが、墳丘・石室共に完全な状態で残っている。B23号墳は祝塚(ほうづか)ともいい、墳丘は半壊し石室はわずかに残っているが、土が流入しており詳細不明である(穂高町教育委員会編1970)。1921年の県報告によると祝塚のある地籍にはほかに７基の古墳があり、うち２基が1886年に発掘され、土師器(杯・甕)、須恵器(高杯・壺・提瓶)、武器(直刀)、馬具、金鍍金菱形留金具、装身具(勾玉・管玉・切子玉・金環)が出土しており(第７図３)、これらの一部は有明山神社で保管されている(桐原1991)。1982年に筑波大学によって遺物実測調査が行われた(岩作・松尾・松村1983)。

C　群

富士尾地区に位置し、山麓をやや入った富士尾沢上流付近の両岸に７基分布している。大型石室をもつ古墳はなく、小・中型の古墳で構成され、確認されている石室は全て横穴式石室である(岩崎・松尾・松村1983)。

D　群

宮城地区の中房川左岸に位置する、通称「魏石鬼窟(ぎしきのいわや)」１基をさし、ここは八面大王の居住窟伝承で著名な場所である。無墳丘古墳であるが、自然石を利用した天井石が露出し、天井石そのものが墳丘を思わせている。天井石を基盤にした御堂が江戸時代から建てられており、現在の御堂は昭和61年に建て替えられたものである(三木・寺島・西山1987)。石室は巨岩の下に石室を構築した片袖式の横穴式石室であり、巨大な花崗岩の一枚岩を天井石とし、板石と角礫を用いて側壁と奥壁が構築されている(桐原1991)。珍しい形式ではあるが、石室規模や副葬品などにおいて穂高古墳群のほかの古墳との違いはみられない(三木・寺島・西山1987)。副葬品としては、須恵器破片(杯・杯蓋・甕・提瓶・平瓶)、武器(鉄鏃)、馬具(鉄地金銅張り飾金具・留金具破片・半球形飾金具・金具破片)、装身具(金環)が出土している(桐原1991、三木2006、第７図５)。このうち須恵器は６世紀中葉～７世紀後葉にかけてのものであることが判明している(桐原1991)。1921年に調査した鳥居龍蔵氏は、巨石の下に出来ている天然の洞穴を利用した古墳という意味で「ドルメン式古墳」と命名している(鳥居1925)。鳥居氏の踏査以後も調査が行われ、1922年に宮坂光次氏による実測調査(宮坂1922)、1986年に三木弘氏による発掘調査が行われた(三木・寺島・西山1987)。三木氏は2006年に魏鬼石窟を再考し、穂高古墳群の再検討を行っている(三木2006)。

古墳時代以降の遺物としては陶磁器、釘、砥石、古銭が出土した。このうち陶磁器の年代は18世紀後半～19世紀中葉の間とみられており、これは天井石正面に彫刻された３体の観音像や天井石上の御堂が江戸時代に作られたという古伝と一致する。石室壁面や天井石には煤が付着し、焼土や灰が堆積土にみられることから、石室内で断続的に火が焚かれていたことがうかがわれる。こうした状況から後世にこの古墳は修験の場としても利用されたと考えられる(三木1990)。

E　群

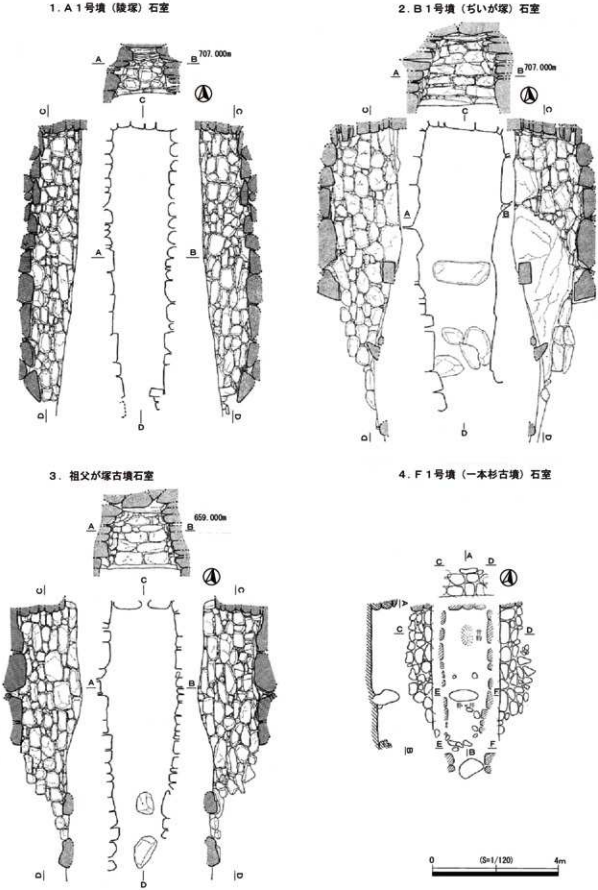
烏川と川窪沢川に挟まれている台地の東縁である牧地区に位置し、扇状地一面に14基が分布している。E１号墳は西牧塚ともいい、墳丘はわずかに残り、石室を構築する大石の一部が露呈している。墳丘上には祠がある。E２号墳は三郎塚ともいい、墳丘はわずかに残り石室が露呈している。土師器、須恵器が出土した。E３号墳は

第１表　穂高古墳群一覧表

古墳名（別称）	外部施設			内部施設					出土遺物	備考
	墳形	径(m)	高(m)	形式	開口方位	長(m)	幅(m)	高(m)		
A１号墳(鞍塚)	円	(長)16.0 (短)14.0 [1]	2.1 [1]	横穴式	S70°E [a]	8.7 [a]	(奥)1.8 [1]	(奥)1.22 [b]	土師器・須恵器・馬具・直刀	両袖式 墳丘・石室ほぼ完存
A２号墳	円			横穴式	S20°E [d]	4.0(推)				
A３号墳	円	7.0(推)		横穴式		4	1		須恵器	墳丘・側石が僅かに残る
A４号墳	円	(長)10.8 (短) 7.4	1.2							大正10年時すでに破壊
A５号墳	円	(長)6.6	0.6							大正年代には墳丘消滅
A６号墳(大美塚)	円	13.0 [1]	1.8 [1]	横穴式	S30°W [a]	7.2 [1]	1.45 [1]	(奥)1.1 [b]	須恵器・直刀・鐔・鉄鏃・馬具・勾玉・管玉・ガラス小玉・切子玉・金環	持ち送り 墳丘の周囲・北壁・南壁の一部・奥壁が残る
A７号墳(鼠塚)	円	14.0 [1]	1.55 [1]	横穴式	S25°E [a]	8.3 [b]	1.5 [b]	1.1 [b]		持ち送り 墳丘の周囲・奥壁・側壁の一部が残る
A８号墳	円								土師器・須恵器・馬具・切子玉・金環	墳丘消滅・内部主体不明
B１号墳（ちいが塚）	円	復原(長)36.0 (短)30.0 [1] 残存15.0 [a]	2.5 [1]	横穴式	S50°W [a]	8.78 [1]	2.26	1.98 [1]		石室内部はほぼ完存
B２号墳	円	10.0 [1]	2.0 [1]							内部主体は側壁の一部を残して崩壊
B３号墳(蓮塚)	円	10.0 [1]	2.0 [1]	横穴式	S22°E [a]	6.4 [b]	1.7 [b]	0.9 [b]		墳丘平壊・石室ほぼ完存
B４号墳	円	15.2 [1]	2.7	横穴式	S12°E [a]	10.2	1.7	2.3 [d]		石室が露呈
B５号墳(金堀塚)	円	(長)15.0 (短)12.0	1.5 [a]	横穴式	S0° [a]	8.6	1.6	1.5 [b]	須恵器・直刀・鉄鏃・馬具・勾玉・管玉・小玉・金環・茶碗・人骨	東壁のみ残る
B６号墳	円	12.5 [1]	0.8 [1]	横穴式	S20°E [a]	7.55 [d]	1.2～1.4 [d]	0.8 [d]		墳丘はほぼ消滅
B７号墳	円	8.4 [1]	0.8 [1]	横穴式	S30°E [a]	5.36(推)	1.4(推)	0.8 [d]		墳丘ははほぼ消滅・石室が露呈し北壁の一部のみ僅かに残る
B８号墳	円	8.3 [1]	0.8 [1]	横穴式	S30°E [a]	5.15 [d]	1.4 [d]	0.8 [d]		墳丘・側壁が僅かに残る
B９号墳	円	9.62 [1]	0.9 [1]	横穴式	S30°E [a]	5.95 [1]	(前)1.8 (後)1.3 [d]	0.9 [1]		持ち送り 墳丘平壊
B10号墳	円	(長)18.0 (短)14.8 [1]	1.8 [1]	横穴式	S10°E [a]	9.0 [a]	2.4 [a]	1.45 [a]		持ち送り 墳丘平壊
B11号墳	円	9.0 [1]	5.0 [1]	横穴式	S20°E [a]	9.0 [a]	1.5 [a]	0.4 [a]		墳丘は僅かに残る・石室は崩壊し巨石が散在
B12号墳	円	8.0(推) [1]	1.5(推) [1]	横穴式	S10°E [a]					北壁の一部が残る
B13号墳	円	12.0 [1]	1.7 [1]	横穴式	S10°E [a]	8.5 [a]	(前)1.7 (後)1.1 [a]	1.2 [a]		持ち送り 墳丘・石室完存
B14号墳	円	11.0 [1]	1.5 [1]	横穴式	S40°E [d]	7.6 [d]	1.8 [d]	0.8 [d]		
B15号墳	円	8.0 [1]		横穴式	S30°E [a]	7.0 [a]	1.5 [a]			墳丘・石室僅かに残る
B16号墳	円	11.0 [1]	1.53～ [1]	横穴式	S40°E [a]	7.5 [a]	1.3 [a]	1.0 [a]		墳丘平壊
B17号墳	円	8.0 [1]		横穴式		5.5 [a]	1.5 [a]			破壊され側壁の石が散在
B18号墳	円									消滅
B19号墳	円			横穴式	S10°E [a]	5.0 [a]	1.5			平壊・側壁の石が散在
B20号墳	円			横穴式		4.0 [a]				標柱のみ残る
B21号墳	円									消滅
B22号墳	円									消滅
B23号墳(祝塚)	円	11.5 [a]	1.8	横穴式	S30°E [a]	4.0 [a]	1.8 [a]		土師器・須恵器・直刀・馬具・菱形留金具・勾玉・管玉・切子玉・金環	墳丘平壊・石室は僅かに残る
B24号墳	円	14.0 [1]	1.0 [1]	横穴式		5.5 [d]				標柱のみ残る
B25号墳	円	6.5 [1]	1.5 [1]	横穴式	S35°E [a]	6.5 [a]	1.5			墳丘・石室平壊
B26号墳	円	6.4 [1]	1.5 [1]							
B27号墳	円			横穴式	S20°E [d]	5.0 [a]	2.0 [a]	0.2 [a]		石室平壊
B28号墳	円			横穴式	S10°E [a]	4.8 [a]				石室平壊
B29号墳	円	14.3 [1]	1.3 [1]	横穴式	S25°E [a]	8.15 [1]	1.4～1.7 [a]			墳丘・石室僅かに残る
B30号墳	円			横穴式	S37°E [a]	4.5 [a]	1.25 [a]			石室が露呈・奥壁が残る
B31号墳	円			横穴式	S50°E [a]	6.0 [a]	1.1 [a]	0.6 [a]		側壁の大部分が崩壊
B32号墳	円			横穴式		6.46 [a]	1.5 [a]			破壊・蓋石４枚が残る
B33号墳	円	9.5 [1]		横穴式		5.5～ [a]				北壁の一部のみ残る
B34号墳	円	10.0 [1]		横穴式		5.0～ [a]	(奥)1.3 (中)2.1 [a]	1.2 [a]		北壁と奥壁が残る
B35号墳	円									
B36号墳	円									
B37号墳										
C１号墳	円	(長)18.5 (短)11.7 [d]	2.0 [1]	横穴式	S10°E [a]	7.2 [b]	1.45 [b]	1.1 [b]		側壁が僅かに残る
C２号墳	円	11.0 [1]	1.3 [1]	横穴式	S30°E [a]	6.0 [a]	1.25 [a]	1.3		側壁が残る・天井石が周囲に散乱
C３号墳	円	10.5 [1]	1.44 [1]	横穴式	S25°E [a]	7.0 [a]	(奥)1.7 (入)1.3 [a]			崩れている
C４号墳	円	(長)14.2 (短) 9.1	1.43 [1]	横穴式	S20°E [a]	3.3	1.5			墳丘が残る

古墳名（別称）	外部施設			内部施設						出土遺物	備考
	墳形	径(m)	高(m)	形式	開口方位	長(m)	幅(m)	高(m)			
C 5号墳	円			横穴式		5.3		1.6			玄室の一部のみ残る
C 6号墳											
C 7号墳											
D 1号墳（鐵石鬼窟）	無墳丘	7.2 [1]	1.3 [1]	横穴式	S 20°E [a]	(玄)4.36 (表)2.0	(奥)2.7	(右)2.55 (左)1.94	須恵器・鉄鏃・馬具・耳環・近世遺物		
E 1号墳（西牧塚）	円	(南北)10.65 (東西)12.3 [a]	0.8～1.1 [a]								墳丘が僅かに残る・石室が一部露呈
E 2号墳（三部塚）	円	14.0	1.4	横穴式	S 20° [c]	2.0 [a]	1.3 [a]	1.2 [a]	土師器・須恵器		墳丘が僅かに残る・石室が露呈
E 3号墳（十三屋敷西古墳）	円			横穴式	S 50° [c]	5.0 [a]	1.3 [a]				無袖式 墳丘が僅かに残る・石室北側が崩壊
E 4号墳（鎌塚）	円	10.0 [1]	1.3 [1]								墳丘が破壊されている
E 5号墳（上人塚）	円	15.0 [1]	3.0 [1]								墳丘が僅かに残る
E 6号墳（狐塚3号墳）	円	(長)19.8 (短)16.5	3.6 [1]						須恵器・鋼・直刀・鐔・鞘身・鉄鏃・馬具・勾玉・管玉・切子玉・白玉・金環		
E 7号墳（狐塚2号墳）	円	13.0 [1]	1.8 [1]	横穴式	S 15° [c]	7.2 [1]	2.1	1.0 [1]	直刀・鐔・鉄鏃・刀子・金環		墳丘が僅かに残る・石が散在
E 8号墳（狐塚1号墳）	円	15.0 [1]	3.0 [1]								石室詳細不明
E 9号墳（前田塚）	円	5.0 [1]	1.0 [1]								墳丘が僅かに残る
E 10号墳（寺島塚）	円	(南北)5.6 (東西)8.0 [1]	1.5 [1]						直刀・勾玉		墳丘が僅かに残る・古墳前に寺島神関の祝殿が祀られている
E 11号墳（神谷塚）	円	(南北)5.3 (東西)7.0 [1]									墳丘・石室は確認されていない
E 12号墳（浜塚塚1号古墳）	円								管玉・切子玉		
E 13号墳（浜塚塚2号古墳）	円	10.0(推) [a]									
E 14号墳（鷹山1号古墳）	円	10.0 [a]	1.0 [a]								石が数個散在
E 15古墳（鷹山2号古墳）	円	10.0 [a]									詳細不明
E 16号墳（鶴塚）	円										
E 17号墳（ショウジンハウ渡古墳）	円	6.3 [a]	0.6 [a]						直刀・人骨		石室は全く残っていない
E 18号墳（鷹山3号古墳）											詳細不明
E 19号墳											
F 1号墳（一本杉古墳）	円	4.0 [1]	0.5 [1]	横穴式		4.4	(奥)1.0 (中)1.6 (開)1.1 [1]	1.25	須恵器・骨片		無袖式 原形不明
F 2号墳	円	(南北)5.0 (東西)7.2 [a]	0.8～0.9 [a]	横穴式	S 10°W [a]						江戸時代に破壊
F 3号墳	円	(南北)8.5 (東西)9.8 [a]	0.9 [a]	横穴式	S 13° [c]						江戸時代に破壊・石が多数散在
F 4号墳	円	(南北) 8.2 (東西)11.3 [a]	0.7 [a]	横穴式	S 20° [c]						内部主体不明
F 5号墳	円	(南北)10.7 (東西)13.5 [a]	1.0 [a]	横穴式	S 40° [c]	(東)5.5 [1]	1.4 [1]				東壁が僅かに残る
F 6号墳（中上古墳）	円	10.0 c	1.0 [a]	横穴式	S 8° [c]	4.0 [1]	1.4 [1]	1.15 [d]	臺玉		石室の左側に元宮塚祖大明神の石碑と石の鳥居がある
F 7号墳	円	(南北)11.0 (東西)11.1 [a]	1.25 [a]	横穴式	S 10° [c]	4.0 [a]	1.4 [a]				
F 8号墳	円								須恵器破片		古墳跡と伝えられている
F 9号墳（二つ塚）	円	17.0 [a]	1.32 [a]	横穴式	S 12° [c]	7.0 [a]	1.3～1.5 [a]	調査中	土師器・須恵器・鉄鏃・馬具・刀子・勾玉・管玉・切子玉・金属片・硬質・陶製受皿・骨		墳丘は削平され、半地下式の石室のみ残る
F 10号墳（二つ塚）	円	(長)12.9 (短)11.0 [1]	1.8 [a]	横穴式	S 10° [c]	3.2 [1]	1.1 [1]				墳丘の石積みが確認できる
G 1号墳（上原古墳）	円			横穴式		10.1 [1]	1.25～1.4	1.6	須恵器・直刀・馬具・刀子・勾玉・管玉・ガラス小玉・切子玉・金環		無袖式・持ち送り 墳丘は削平され、半地下式の石室のみ残る
H 1号墳（耳塚）	円	15.5 [1]	2.0 [1]								墳頂に祠が祀られている
祖父が塚古墳	円	16.0 [1]	2.53 [1]	横穴式	S 11°W	8.14 [1]	(中)2.4 (後)1.9	1.85 [1]	土師器・鐔・太刀・鐔・馬具・勾玉・小玉・切子玉・銅環		両袖式 内部主体ほぼ完存
牛窪古墳											墳丘半壊
板沢ナカメ塚古墳	円										

本表は主に桐原1991をもとに作成した。英小字を付した項目については、以下の文献から引用した。
a：岩崎・松尾・松村1983　b:西西・松尾1984　c：國學院大學文学部考古学研究室編2012　d：藤沢1968　e：穂高町教育委員会編1970　f：穂高町・穂高町教育委員会編1989



第６図　穂高古墳群の石室（1～3：岩崎・松尾・松村1983　4：中島1976）

十三屋敷西古墳ともいい、石室が露呈している。E群中で標高がもっとも高い地点にあり、現在穂高カントリークラブ内に所在している。E６号墳は狐塚３号墳ともいい、E群中最大規模である。副葬品としては、須恵器(杯蓋・高杯・長頸瓶・平瓶・横瓶)、武器(直刀・鍔・槍身・鉄鏃)、馬具(轡)、装身具(青銅製鋲・勾玉・管玉・切子玉・臼玉・金環)が出土し(第８図１)、東京国立博物館・穂高神社・満願寺などに保管されている(桐原1991)。三木氏はE６号墳の副葬品をまとめ、それらの位置づけを通じて穂高古墳群形成過程の一端を明らかにした(三木1991)。須恵器のなかでも、杯蓋・高杯は７世紀初頭、長頸瓶は７世紀前葉～７世紀中葉、平瓶・横瓶は６世紀末(一部の平瓶は８世紀前葉)のものとされている(三木1991)。E７号墳は狐塚２号墳ともいい、武器(直刀・鐔・鉄鏃・刀子)、装身具(金環)が出土した(第８図２)。E10号墳は寺島塚ともいい、墳丘はわずかに残っており、武器(直刀)、装身具(勾玉)などが出土している。古墳の前には寺島仲間の祝殿が祀られている。1951年に大場磐雄氏による発掘調査が行われた(藤沢1968)。E12号墳は浜場塚１号墳ともいい、水田中にあり、装身具(管玉・切小玉)が出土している。E17号墳はショウシハウ殿古墳ともいい、武器(直刀)が出土している。人骨が発見されたという話がある(桐原1991)。

F　群

塚原地区に位置し、柏原沢右岸の標高605ｍから650ｍの間に10基が列在している。F群はほとんどが破壊されており墳丘・内部主体・副葬品の詳細を知ることはできないが、10基の墳丘規模は1921年の調査により判明しており、それによると大小５基ずつ二つのグループに分けられる(桐原1991)。F１号墳は一本杉古墳ともいい、F群中最東端に位置する。無袖式の横穴式石室であり、天井石はない(第６図４)。須恵器(高台付杯)の破片１点が出土している。床面中央部からは小豆粒大の骨片が掌一杯ほど検出された(桐原1991)。1975年に穂高町教育委員会による発掘調査が行われた(中島1976)。F２号墳は江戸時代に破壊されている。この城には、石室の天井石を用いたと思われる石碑が数基立てられている。F６号墳は中上古墳ともいい、水田中にあり、棗玉が出土している。石室付近には元宮塚田大明神の石碑と石の鳥居がある。F８号墳は、地元の人々は古墳跡と伝えているが、現在古墳の存在は認められない。しかし須恵器の破片が採集されている(桐原1991)。F９号墳とF10号墳は、あわせて二つ塚ともいわれている。F９号墳は、墳丘上に巨石が散在し諏訪社の古い祠があったが、現在はなくなっている。F10号墳は墳丘の残りがよく、石室は天井石６石、側壁の４段積みがはっきりと確認できる。F群中もっとも保存状態がよい古墳である(穂高町教育委員会編1970、國學院大學文学部考古学研究室編2010)。

G　群

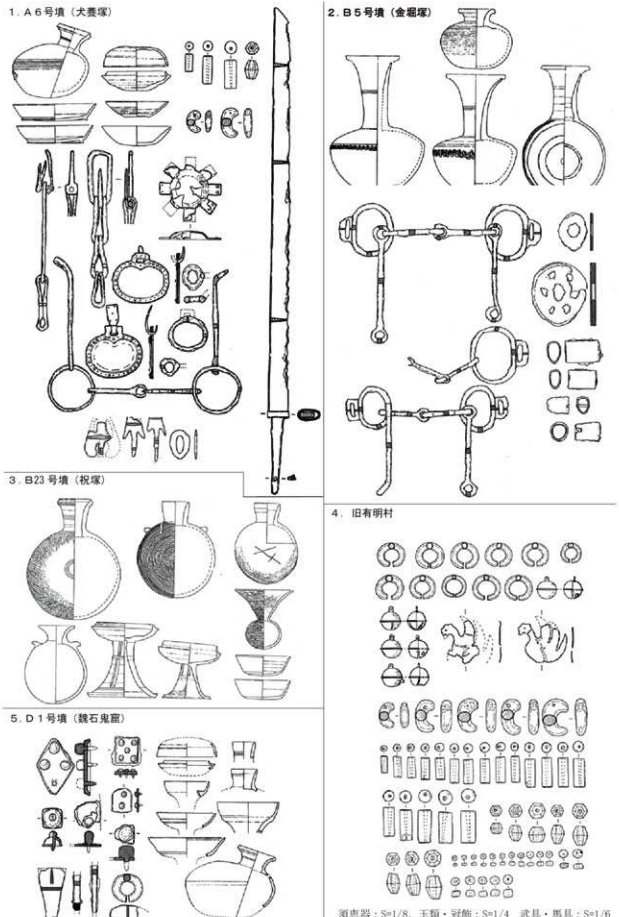
上原地区の水田中に位置する１基が確認されており、G群はこの１基をさす。G１号墳は上原古墳ともいい、石室は横穴式石室である。1930年に猿田文紀氏により発掘調査が行われた時点で墳丘の痕跡はすでになく、奥壁と天井石２石が残存するのみであった(穂高町教育委員会編2001a)。猿田文紀氏によると、もとは円墳で横穴式石槨であったとされる(猿田1931・1933)。その後、1932年には今井眞樹氏による踏査(今井1933)、1982年に筑波大学によって出土遺物実測調査が行われた(岩崎・松尾・松村1983)。須恵器(杯・杯蓋)、武器(直刀・刀子)、馬具(杏葉・轡)、装身具(勾玉・管玉・切子玉・ガラス小玉・金環)が出土している(第８図３)。付近に「塚田」の小字名があること、1890年に付近から大石を掘り出し石塔３個を作ったこと、1929年にも大石２個を掘り出したことなどから、今後新たに古墳が発見される可能性がある(桐原1991)。1999年に穂高町教育委員会によって試掘調査が行われた(穂高町教育委員会編2001a)。

H　群

耳塚地区に位置し、穂高川西側の最低位段丘の先端に築かれている１基のみをさす。H１号墳は耳塚ともいい、１基が確認されている。墳頂に祀られている祠は大塚様といい、昔から地域で耳の神様として知られていた(桐原1991)。南安曇郡の旧郡誌では魏石鬼八面大王にまつわる塚とされており(太田1923)、新郡誌は盛土ではあるが詳細不明としている(藤沢1968)。1986年に穂高町教育委員会によって墳丘測量調査が行われた。

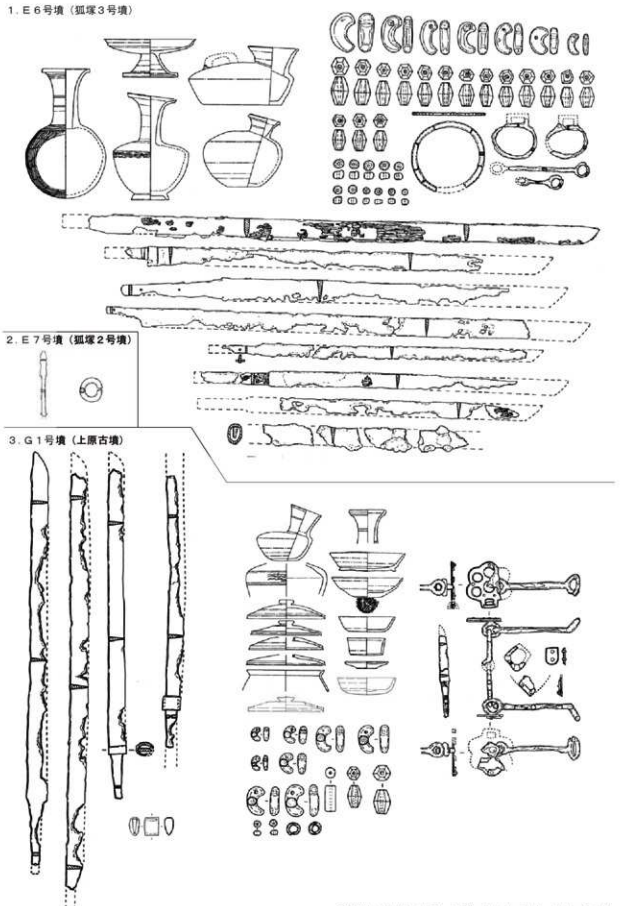
松川村所在古墳

安曇野市の北側、松川村には祖父が塚古墳・牛窪古墳・桜沢オカメ塚古墳という単独墳３基が確認されており、



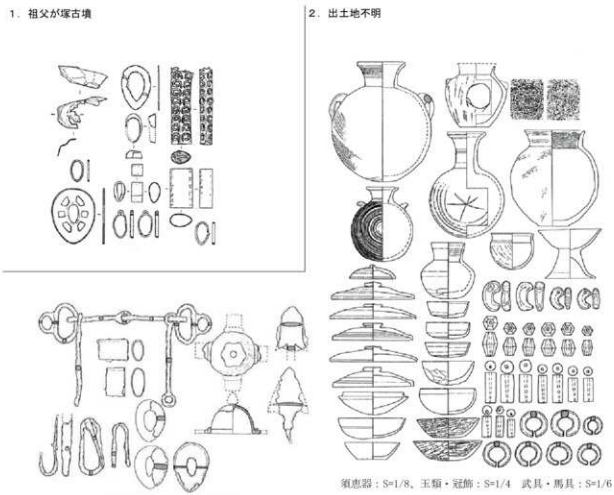
須恵器：S=1/8、玉類・冠飾：S=1/4　武具・馬具：S=1/6

第７図　穂高古墳群出土の主要遺物（1）（桐原 1991）



須恵器：S=1/8、玉類・冠飾：S=1/4　武具・馬具：S=1/6

第８図　穂高古墳群出土の主要遺物（２）（桐原 1991）



第９図　穂高古墳群出土の主要遺物（３）（桐原 1991）

これらのほか数基が存在していた可能性がある。祖父が塚古墳は、内部主体がほぼ完全に残っており、石室は両袖式の横穴式石室である（第６図３）。副葬品としては土師器、鎧、鉾、武器（太刀）、装身具（玉類）などが出土したと伝えられているが、現存しているものは宮内庁書陵部に保管されている頭椎太刀、玉、銀環の装身具一式のみである（河西・松尾1984、第９図１）。1982年に筑波大学によって石室実測調査が行われた。牛窪古墳と桜沢オカメ塚古墳については春日賢一氏による1921年の報告があり牛窪古墳は1921年時点ですでに墳丘が半壊状態にあった（春日1921）。桜沢オカメ塚古墳は円墳であるとされる（春日1921）。

参　考

穂高古墳群を構成する古墳として認定されてはいないが、旧堀金村内には、須砂渡口南古墳・岩原古墳・前の髪古墳・曲尾古墳群・古城下古墳が確認されており（安曇野市教育委員会編2010a）、そのうち須砂渡口南古墳・岩原古墳は、下群に近い位置関係にあることから穂高古墳群に属する古墳の可能性がある。

旧有明村内の穂高古墳群から出土したされる遺物が宮内庁や東京国立博物館に保管されており、土師器（高杯・甑・坩）、須恵器（杯・杯蓋・高杯・壺・提瓶・平瓶・横瓶）、武器（直刀・倒卵形鐔・刀子・鉄鏃）、馬具（轡・杏葉・絞具・菱形鉄金具・雲珠・鈴）、装身具（勾玉・管玉・切子玉・臼玉・金環）、金銅製鳳凰形銅葉などがある（岩崎・松尾・松村1983、河西・松尾1984、東京国立博物館編1956・1997、第７図４、第９図２）。須恵器の年代は６世紀後半～７世紀前半のものが多いとされている（桐原1991）。遺物のうち鳳凰形銅葉は、奈良県藤ノ木古墳出土の天冠に表現されている鳥形の装飾に酷似している（穂高町・穂高町教育委員会編1989）ので注意されるべきである。

（三輪）

第Ⅳ章　穂高古墳群Ｆ９号墳の調査

第１節　調査地の概要

調査対象地である穂高古墳群Ｆ９号墳は、安曇野市穂高柏原3653、北緯36°19′08″、東経137°51′29″、標高665ｍに位置している。烏川扇状地の扇央、Ｆ群の最西端に築かれた２基の古墳の１つで、東側に隣接するＦ10号墳とともに「二つ塚」と呼ばれていた。1970年代までは、墳頂部に諏訪神社の小祠が建てられていたが(穂高町教育委員会編1970)、現在では径約５㎝の穴の開いた烏居の礎石と思われる石が残るのみであり、祠は現存していない。現在、この一帯は国営アルプスあづみの公園堀金穂高地区の敷地内であるが、1995年の公園建設以前はＦ９号墳とＦ10号墳の間に、旧穂高町の配水池(塚原配水池)が存在した。この配水池が設置された際、Ｆ９号墳西側の墳端は削平されているために築造当時とは墳丘の規模が異なっていることが2010年度の発掘調査で判明した(國學院大學文学部考古学研究室編2011)。公園の建設に伴い、配水池は移設され、両古墳は園内の遺跡として整備されている(長野県埋蔵文化財センター編1997)。　(松井)

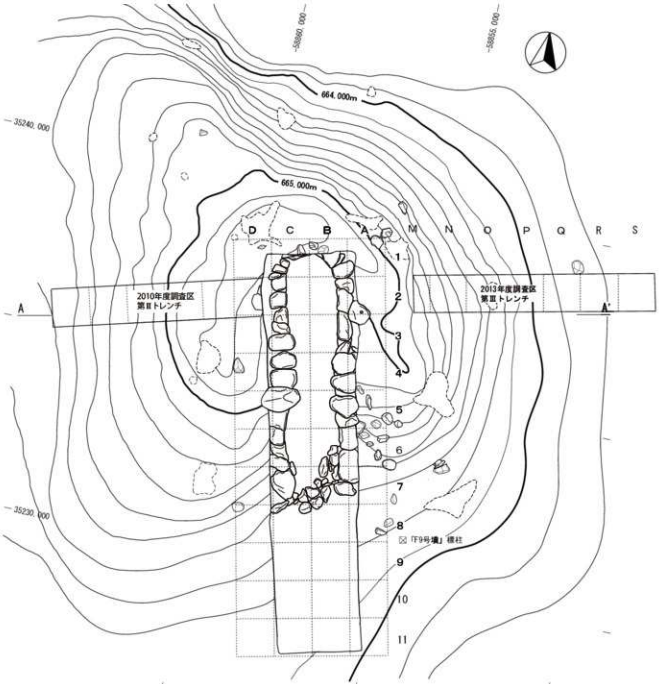
第２節　2012年度までの調査成果

2009年度でＦ９号墳・Ｆ10号墳の墳丘測量と墳丘及び現状確認を行った。その結果、Ｆ９号墳は現状で直径約17.0ｍ・現存高約1.3ｍ以上、Ｆ10号墳は長軸約12.9ｍ・残存高約1.8ｍの横穴式石室を持つ円墳と判明した(國學院大學文学部考古学研究室編2010)。

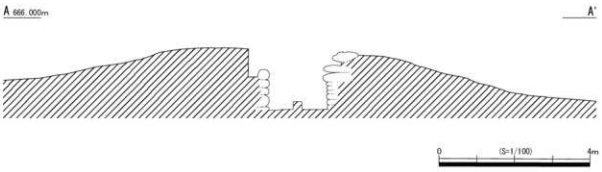
2010年度の調査では、比較的保存状態の良いＦ10号墳を現状のまま保存し、Ｆ９号墳の発掘調査を実施した。この調査では、Ｆ９号墳の墳丘上に１ｍ×１ｍの格子状のグリッドを設定した。調査区は、石室の範囲や羨道の位置の確認を目的とした南北に伸びる長さ約10ｍの第Ⅰトレンチと、墳丘の堆積状況や墳裾部の状況を把握することを目的とした東西に伸びる長さ約８ｍの第Ⅱトレンチの２箇所とした。調査の結果、第Ⅰトレンチでは石室東壁と想定される石列を確認した。しかし、原位置を留めた天井石は残存しておらず、石室内部は割石や石室石材といった大型礫で埋められていた。また、石室の入口付近の撹乱層を中心に須恵器や土師器、石室付近から和釘や硬貨等の金属類、近代陶器片などが出土した。このうち、須恵器の長頸瓶は７世紀中葉のものである。一方、第Ⅱトレンチは墳丘の堆積状況や墳裾部の状況を確認することを目的としたが、配水池の建設に伴い墳端が削平されている可能性がある(國學院大學文学部考古学研究室編2011)。このため、2009年度測量で得られた墳丘の規模は構築当初のものとは異なる可能性が高い(國學院大學文学部考古学研究室編2012)。

2011年度の調査では、石室の全体像を確認するため、第Ⅰトレンチを北に1.5ｍ、西に１ｍ拡張した。調査の結果、石室残存長約7.0ｍ、石室幅約1.3ｍ～1.5ｍの無袖式横穴式石室であることが判明した。この時点での石室残存高は最大約1.1ｍであった。石室の主軸は、2010年度の報告では N-14.5°-W と推定していたが、2011年度の調査で N-12°-W をとる南の方向に開口した石室であることが明らかになった。石室内の大型礫を除去した時点で調査を終了した。また、古墳時代から古代にかけての遺物としては須恵器・土師器・切子玉が出土し、中世以降とみられる遺物には灯明皿の受け皿・釘類・硬貨などがある。そのなかでも、須恵器の杯は８世紀前後、子持壺は７世紀中葉の遺物と考えている(國學院大學文学部考古学研究室編2012)。

2012年度の調査では、内部構造を明らかにするために第Ⅰトレンチの石室埋土をさらに掘り下げることとした。また、石室の範囲が判明したことにより、主軸にあわせてグリッドを再設定した。前年度の調査で明らかになった主軸の延長上に基準点を設け調査を行った。結果、おおよその構造を把握することができた。石室は持ち送り構造を呈しており、石室長は約７ｍの規模がある。閉塞石の残骸と推測される礫石が出土したことから、石室の入口と思われる部分を特定することができた。しかし、石室内部の層の大部分が撹乱を受けているため、原層を



平面直角座標系（第Ⅷ系）による座標系
【Ｆ９標柱】Ｘ座標：35231.402　Ｙ座標：-58854.742　Ｚ座標：664



第10図　2010年度～2013年度調査区全体図

保っているかは不明である。2012年度調査では須恵器・土師器・鉄製品・馬具・刀子・切子玉・動物骨が出土している。動物骨は遺存状態から近世以降のものと推定される。また、2012年度の石室内から出土した遺物は入口付近を中心に出土している。出土している須恵器からおおよその年代は６世紀後半～８世紀初頭とみられる(國學院大學文学部考古学研究室編2013)。（鳥我井）

第３節　第Ⅰトレンチ

（１）調査の経過

今年度の調査では、Ｆ９号墳の石室構造の全容把握を目的として掘り下げを進めた。墳丘上の除草の後、前年度において第Ⅰトレンチ石室・前庭部内を埋め戻した土嚢を撤去、石室の状況を確認し光波測距儀を設置してグリッドを復元した。主軸に沿って奥壁から閉塞石までの中央部分に15cm幅の土層観察用畦(ベルト)を設定した。その目的は土層の堆積状況を把握することだったが、本年度の調査において層に大きな変化は見られなかった。掘り下げにおいては木の根や小礫が多く混じっており、それらを除きながらの発掘作業であった。並行して、掘り上げた土のふるいがけによって動物の骨や須恵器の小片を回収した。出土した遺物の取り上げには、光波測距儀を使用して出土地点を記録するとともに、出土状況を写真撮影した。石室内の床面は想定したよりも低く、土層の堆積状況を第Ⅲトレンチと比較するため、前庭部である第Ⅰトレンチ８～11グリッドにおいて、幅50cmのサブトレンチを設定した。サブトレンチを掘り下げた結果、第Ⅲトレンチ西壁６層と同様の墳丘基盤層を検出した。このことから、サブトレンチ以外の箇所もその面まで掘り下げた。石室および前庭部の全景、壁面の写真撮影を行い、縮尺1/10の土層断面図を東・西・南壁で記録した。なお、本年度は石室を写真実測することとし、国際文化財株式会社に撮影を委託した。その後、土嚢を石室内に埋め戻し、2013年度の調査を終了した。

遺物は、石室内のＢ６グリッドより須恵器の杯・高台付杯・杯蓋・椀・高杯・長頸瓶・甕が１か所において集中する箇所を検出した。この他に、土師器片・馬具・鉄鏃・刀子・勾玉・管玉、ウマの歯や骨も出土した。

（松井）

（２）石　室

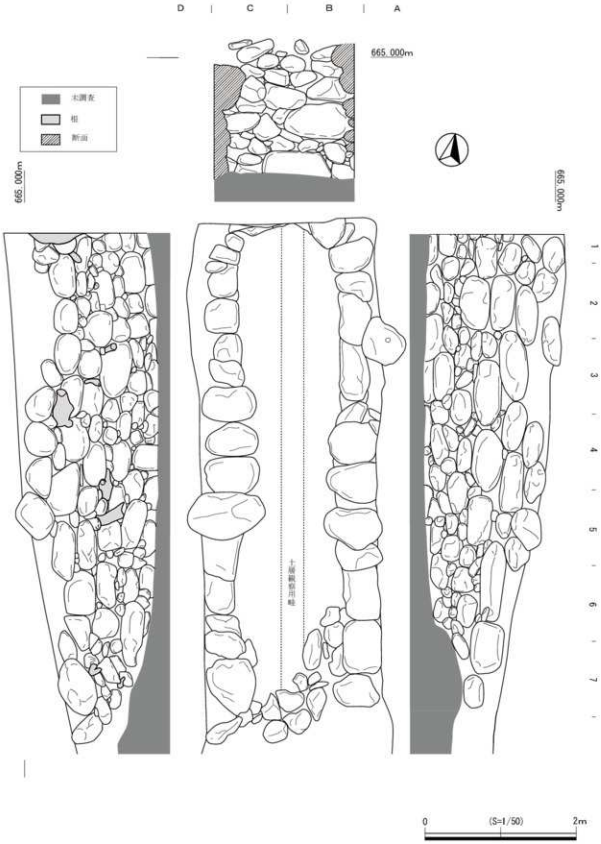
石室は、主軸をN-12°-Wにとり、南向きに開口する無袖式横穴式石室である。天井石は失われており、また床面まで掘りきっていないが、これまでの調査で、残存長約7.0m、現状下端の幅約1.3m～1.5m、高さ約1.8m～2.0mまでを検出している。今年度の調査までで石積みは東壁６段、西壁６段、奥壁６段までが確認されている。

両側壁の石積みは上段になるにつれて石室幅が狭くなっており、持ち送りと呼ばれる技法が用いられている。側壁の最上段は、丸みをもった石材の小口積み、最上段以下は四角や横長の石材による平積みである。石材の大きさは平均で幅60cm、厚さ40cm程度である。下段になるにつれて大きな石材の間に直径10cm～20cmほどの小ぶりな石を詰め込んでいる箇所が多くなることが確認でき、最下段と推測される段は再び大型の石材が使用されている。石材の種類は、数点の砂岩系堆積岩を除き、全て花崗岩である。砂岩系堆積岩と推測される石材は東壁の２段目と３段目の中央羨道寄りの四角の石材と西壁２段目中央の楔が介入している石材と考えられる。しかし、花崗岩と種類の違う砂岩系堆積岩を用いた理由は明確にはわかっていない。

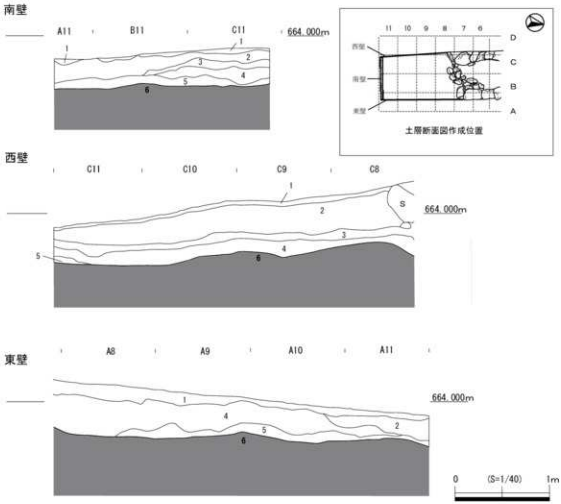
奥壁は、大きさが不揃いな石材が乱雑に積まれている。石材は、大きなもので幅80cm、厚さ50cm、小さなもので幅cm、厚さ15cmと様々である。なお最下段と推測される段の中央には、幅約90cmの大きな石材が用いられていることが今年度調査で判明した。

奥壁と側壁の境は、石材が斜めに配置され、隅丸状を呈していた。このうち奥壁と西壁の境では、平均的な大きさの石材が用いられている。一方、東壁との境では上から４段目以降から直径約15cm前後の小さな石材を使用している。

Ｂ７・Ｃ７グリッドを中心とした地点では、2012年度調査において不規則に散布する直径約30cm前後の石材を検出しており、おそらく閉塞石であると思われる。（浅川）



第11図　F９号墳石室実測図



土層説明

1層：黒色土(5Y2/1)（2011年度のⅠ層に対応）
　調査区全体に見られる表土で、腐葉土層である。場所により構成物や色調に若干の相違がある。
2層：褐色土(10YR3/2)(2011年度のⅡ層に対応)
　拳大以上の大きさの礫が多量に混ざる層である。礫は最大25cm程度の大きさである。砂粒の大きさには統一性はみられず、非常に微細なものから30cm前後の礫までが混在している。
3層：黒色土層(10YR2/1)
　径５～10cm程度の礫を含む層である。粘性・しまりがあり、しめり気も強い。東壁にはみられない層である。
4層：オリーブ褐色土(10YR4/4)
　５mm前後の石がまばらに混ざる層である。若干の粘性がある。石室前庭部西壁では３層の下、東壁では２層の下に堆積する。
5層：暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)
　５mm～５cm程度の亜円礫が混ざっている。若干の粘性、しまりあり。当時の地表面(自然堆積層)と考えられる。調査区全体において見られる可能性が高いと思われる。
6層：オリーブ黄色砂礫層(上面検出のみ)

第12図　Ｆ９号墳前庭部土層断面図

（３）調査区土層

石　室

2011年度までの調査において石室内の近代の埋土と考えられる大型礫層を除去した。2012年度調査では全面で粘性・しまりの弱い明褐色土層を掘り下げたが、Ａ２グリッドの低い位置より硬化した明褐色土層が部分的に検出され石室床面と推定された。しかし、今年度調査では、全面で軟らかい明褐色土層が検出され、硬化面の広がりは認められなかった。このことから、石室床面は2012年度の推定よりさらに低い位置になると考えられる。

前庭部

石室前庭部における南壁、東壁、西壁の土層観察を行った(第12図)。１層と２層はパウダー状のしまりのない土である。本土層からは、2010年度・2011年度調査で長頸瓶口頸部、壺肩部、壺口縁部と胴部、子持壺の口縁部

破片、杯蓋、杯、器種不明の脚部、甕胴部、土師器片、切子玉が出土しており、これらの出土遺物は原位置を保っていないことが予想され、本土層は古墳築造時の土層ではなく後世における埋土と考えられる。３層は若干の粘性、しまりをもつ層であり、東壁には見られない層である。４層はオリーブ褐色土層で若干のしまりをもつ。本年度の掘り下げによって検出された層であり遺物は検出されなかった。これらの４層の堆積時期は不明である。５層は暗オリーブ褐色土で若干の粘性としまりがある。自然堆積層と考えられ、当初の地表面であるとみられる。６層はオリーブ黄色砂礫層で本年度の掘り下げにおいて上面のみ検出された。６層については基盤層であると考えられる。（麻生）

（４）遺物出土状況

今年度調査における第Ｉトレンチからの遺物はすべて石室内から出土しており、昨年度調査まで見られた前庭部における遺物の出土は確認されなかった。出土遺物は石室内全体にわたって広範囲に分布しており、およそ標高663.250ｍから663.800ｍの間にかけて出土している（第13図）。

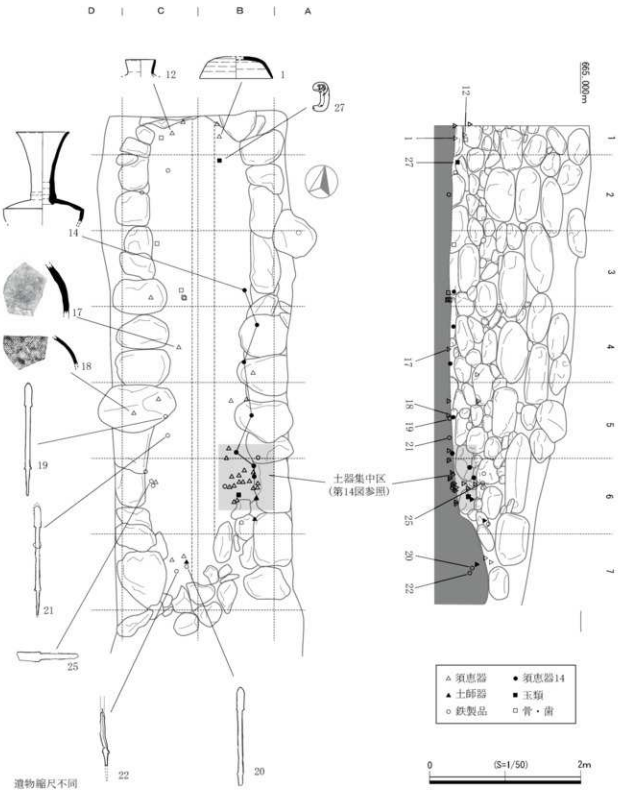
須恵器は、ふるいによって検出された破片も合わせてみると、今年度調査で須恵器の出土が全く見られなかったＣ２・Ｂ７グリッドを除いてほぼ石室全体から出土しているが、おおむね石室の東半分に分布が偏る。最も分布が集中するのは、閉塞石と推測される礫群の内側付近であるＢ６グリッドで、ここから出土した遺物については次項で説明する。奥壁付近のＣ１グリッドから出土した子持壺破片（第16図12）の出土標高は663.433ｍで、今年度調査での出土遺物の中では比較的高い位置から出土した。これまでの調査で同一個体と思われる破片２点が出土しているが、それぞれＢ５・Ｃ５グリッド出土と、いずれも石室の南側から出土しているのとは対照的である。また、Ｂ１グリッドから出土した破片は、2012年度報告の蓋片と接合している（第16図１）。Ｂ４グリッドからは長頸瓶（第16図14）の頸部が口縁部を下向きに、石室東壁に立てかかるようにして出土した（写真図版13-３）。同一個体の破片は、Ｂ３グリッドからＢ６グリッドにかけて散乱し、Ｂ６グリッドから出土したうちの２片はやや高い位置からの出土となる。この２片は、Ｂ４・Ｂ５グリッドなどから出土した他の同一個体破片と比較して外面の退色が強く見られた。その他には、別個体の甕の破片がそれぞれＣ４・Ｃ５グリッドから出土し、Ｃ４グリッド出土の破片（第16図17）は摩耗が激しく、Ｃ５グリッド出土の破片（第16図18）は残存状態が良好であった。Ｃ３グリッドからは、Ｃ４グリッド出土の甕と同一個体と思われる甕片も出土している。須恵器は、長頸瓶（第17図14）のＢ６グリッドから出土した２片やＣ７グリッドから出土した破片を除いて、おおむね標高663.250ｍから663.500ｍに出土位置が収まる。

土師器はほとんどがふるいからの微細破片として検出されており、出土高については不明であるが、Ｂ４グリッドで１点、Ｂ６グリッドで３点、Ｃ６グリッドで４点、Ｃ７グリッドで１点の検出となっており、石室開口部内側付近に分布している。

鉄製品では、鉸具が１点（第18図26）、鉄鏃が５点、刀子が４点、玉類では勾玉（第18図27）と管玉（第18図28）が１点ずつ出土した。このうち鉸具と管玉はＢ６グリッドからの出土であったため、次項で説明する。鉄鏃はＢ１グリッドからの排土から検出された１点（第18図23）のほかにＣ５・Ｃ７グリッドにおいて４点（第18図19～22）が出土した。このうち、出土状況の記録が可能であった第18図19・20については鏃身部が石室奥側を向いた状態で出土している（写真図版13-４・５）。Ｃ５グリッド出土（第18図19・21）では約663.300ｍと、Ｃ７グリッド（第18図20・22）では約663.560ｍからの出土となる。Ｆ９号墳から鉄鏃が出土したのは今年度調査が初めてである。刀子はふるいからの検出となった点数も多く、詳細な出土位置が不明であるが、今年度調査で検出された４点のうち２点がＢ６グリッド、もう２点がＣ６グリッドで出土しており、いずれも欠損品である。勾玉はＢ２グリッドの主軸付近から１点が出土している（写真図版13-２）。

また、Ｃ３グリッドからＣ４グリッドにかけては馬の骨・歯がやや散布して出土している。現在のところ頭部破片のみが出土している。

なおＣ１グリッドの奥壁付近からは器種不明の金属製品３点が見つかっており、遺存状態からおそらく中近世以降のものと考えられる。（麻生・尾上）



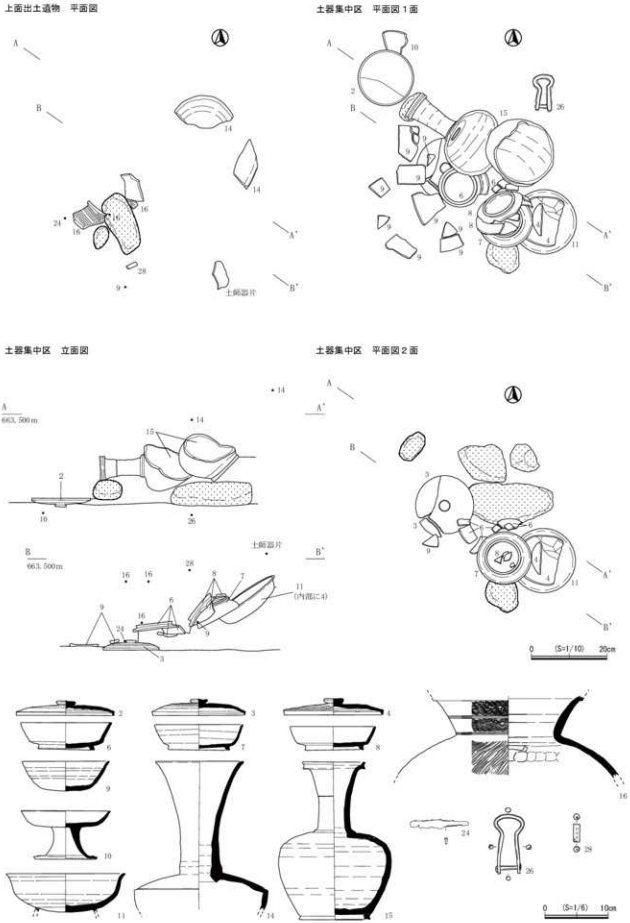
第 13 図　2013 年度出土遺物平面・垂直分布図

上面出土遺物　平面図

土器集中区　平面図１面

土器集中区　立面図

土器集中区　平面図２面



第 14 図　土器集中区微細図

（5）土器集中区

Ｂ６グリッドの石室東壁寄り、閉塞石と思われる礫群の内側付近から、須恵器の長頸瓶(第17図14)の肩部や甕頸部(第17図16)、器種不明の土師器片や刀子(第18図24)、管玉(第18図26)が出土した(第14図、写真図版13-１)。甕頸部は２片が出土し、2012年度にＢ７グリッドから出土した破片と接合した。長頸瓶の肩部は、Ｂ４グリッドから出土した頸部やＢ５グリッドから出土した破片と接合した。

このＢ６グリッド出土長頸瓶・甕・管玉などの下面からは複数の須恵器が集中的に出土した(第14図、写真図版12)。須恵器はほとんど全てが破片であったが一群内で完形に接合した点で、他グリッド出土破片と接合がみられた上面出土遺物との相違が認められるため、特に土器集中区として報告する。須恵器の内訳は、無台の杯１点(第16図９)、高台付杯３点(第16図６～８)、蓋３点(第16図２～４)、椀１点(第16図11)、高杯１点(第16図10)、長頸瓶１点(第17図15)となっており、また馬具(鈴具)１点(第18図26)も出土している。

以下、各個体の出土状態について開口部寄りに位置していた順に述べる。

椀(第16図11)が石室東壁に立てかかるようにして検出され、内部には蓋(第16図４)が裏向きで出土した。高台付杯(第16図７)は完形を保って出土した唯一の須恵器であり、椀に一部重なるようにして逆位で出土した。その上には高台付杯(第16図８)が重なって出土した。

蓋(第16図３)は正位で出土し、その上に高台付杯(第16図６)が逆位で重なっていた。長頸瓶(第16図15)は胴部で上下２つに割れており、頸部側の破片と底部側の破片ともに、割れ口を上に向けて出土した。横倒しの状態で出土し、口縁部の礫に接していた箇所は破損していた。

無台の杯(第16図９)は、蓋(第16図３)から高台付杯(第16図７)の周囲に12片の破片となって散らばっており、そのうち10片が内面を上に向けて出土した。底部の破片を含む４片は、蓋(第16図３)の上に乗っていた。また同一個体の破片が土器集中区上面や、Ｂ１グリッドからも出土している。

長頸瓶口縁部の北西側からは蓋(第16図２)が逆位で出土した。この蓋の下からは、高杯(第16図10)の破片が出土したが、土器集中区出土の他の破片が完形に接合した中で、この破片のみ前年度以前出土の破片との接合関係にあることは注意を要する。

なお鈴具(第18図26)は石室東壁寄りの位置から出土した。

Ｆ９号墳はおそらく中世以降に大規模な撹乱を受けているが、土器集中区出土破片のほぼ全てが接合関係にあることや破片の垂直分布から見て、土器集中区遺物包含層は大きな撹乱を受けていないことが予想される。

（尾上・松井）

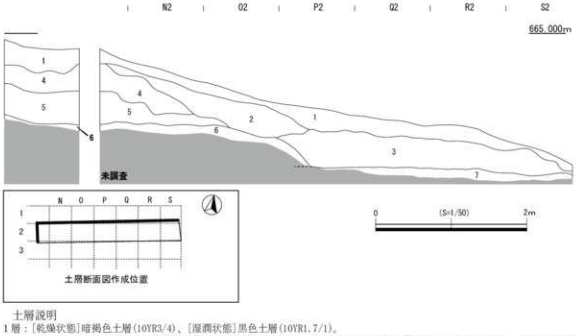
第４節　第Ⅲトレンチ

（1）調査の経過

第Ⅲトレンチは、周溝の有無と古墳の規模の確認、墳丘の築造方法を知ることを目的とし、墳丘の主軸と直角に設定した。墳頂部から東に約８m、幅１mである。墳頂部付近の石室を構成している石を避けるため、石室から約60cm離した位置から掘削作業を行った。トレンチの中腹付近にあった切株と切株から延びる根が作業の妨げとなったため、ある程度掘り進めた後除去した。１層を約15cm、続いて２層を約15～20cm掘り進めた４・５層では比較的大きな礫石が多く検出された。第Ⅲトレンチ石室側、西端より検出された６層(にぶい黄色砂礫層)が、墳丘築造時の基盤層と予想されたためいったん掘り下げるのを終え、写真撮影を行った。南東より北壁、東・西より全景、北壁を西側・東側に２つに分けて南より記録した。実測は、北壁を２mずつ４つに分け、北壁と西壁の土層断面図を作成した。縮尺は1/10で記録した。西壁は６層まで確認できたが、北壁は６層が削平されており、さらに掘り下げたところ７層を検出した。当初目的としていた周溝は確認されなかった。

（2）土層堆積状況

全体的に粘性が弱く、しまりが弱い傾向にある。また、腐植土由来である１層と最下層である７層を除き、各



土層説明

1層：[乾燥状態]暗褐色土層(10YR3/4)、[湿潤状態]黒色土層(10YR1.7/1)。
5㎝以下の円礫を含み大量の草根が蔓延った腐植土層である。またトレンチ西側で最大径15㎝程の亜円礫、トレンチ東側で最大径20㎝程の割れた礫がまばらに混入している。粗い粒子と細かい粒子が入り混ってボロボロとした質感であり、しまりは極めて弱い。乾燥状態では粘性がないが、湿潤状態では若干の粘性が生じる。

2層：[乾燥状態]黒褐色土層(10YR2/3)、[湿潤状態]黒色土層(2.5Y2/1)。
乾燥状態・湿潤状態ともに粘性はない。径約3㎝以下の円礫と約5㎝から約10㎝の亜角礫を多少含む層であり、直径10㎝前後の太い根が数本入り込んでいる。粒子は細かく質感もボソボソとしており、しまりは弱い。乾燥状態では粘性がないが、湿潤状態になると粘性が生じる。

3層：[乾燥状態]黄褐色土層(2.5Y5/4)、[湿潤状態]褐色土層(10YR4/4)。
径約3㎝から約25㎝の亜角礫・亜円礫を大量に含む。粒子は細かくパウダー状といえる質感であり、しまりは弱い。乾燥状態ではサラサラとして粘性がないが、湿潤状態になると粘性が生じる。

4層：[乾燥状態]暗オリーブ褐色土層(2.5Y3/3)、[湿潤状態]黒色土層(10YR1.7/1)。
径約15㎝～約25㎝の亜角礫を大量に含む。この亜角礫の半数以上は割れている。粒子は細かく、しまりは極めて弱い。乾燥状態では粘性がないが、湿潤状態になると粘性が生じる。

5層：[乾燥状態]暗褐色土層(10YR3/5～3/4)、[湿潤状態]黒褐色土層(10YR2/2)。
径約1㎝から約5㎝の亜円礫を大量に含むが、径約10㎝から約15㎝の割れた亜角礫もわずかに混入している。細かい粒子に若干の粗い粒子が混じっており、しまりは弱い。乾燥状態では粘性がないが、湿潤状態ではわずかな粘性を生じる。

6層：[乾燥状態]にぶい黄色砂礫層(2.5Y6/4よりも暗い)、[湿潤状態]オリーブ褐色土(2.5Y4/3)。
径約5㎝以下の亜円礫・円礫を多く含むが径約10㎝の亜角礫も多少混入している。粒子は細かくパウダー状といえる質感であり、しまりはやや弱い。乾燥状態・湿潤状態ともに粘性はない。

7層：[乾燥状態]オリーブ黄色砂礫層(5Y6/5)、[湿潤状態]暗灰黄色土(2.5Y4/2)。
径約5㎝以下の円礫を多く含むが、20㎝から30㎝の亜角礫・亜円礫も少しだけ含まれている。粒子は粗く、しまりは弱い。かなりざらついており乾燥状態・湿潤状態ともに粘性はない。

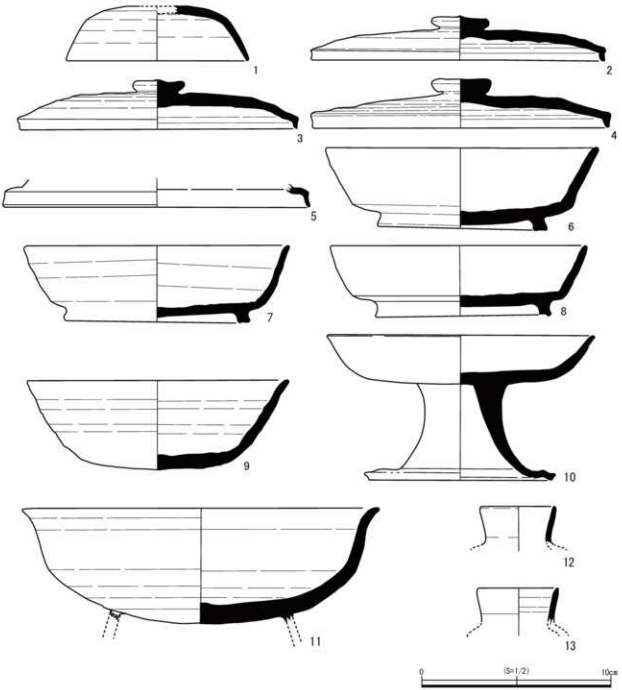
第15図　第Ⅲトレンチ土層断面図

層とも粒子の細かい砂を主体とする土質である。礫の内容は、4層は径15㎝～25㎝の割れた亜角礫を多く含み、全体的に径約5㎝以下の亜円礫を含んでいる。3層・6層より河川礫と思われる径3㎝～25㎝の亜円礫・円礫が検出されている。層の堆積順は、7層上にほぼ水平に6層が堆積してから墳裾側に落ちるように5層・4層が堆積している。その後6層が削平されてから3層が7層の上に乗り、さらに4層と3層の間に入り込むように2層が堆積したとみられる。今年度検出した石室前庭部5層と第Ⅲトレンチ6層はその性質が類似している。第Ⅲトレンチ6層・7層はその特徴から自然堆積層とみられ、墳丘築造時の基盤層は6層・7層である可能性が高い。

（新川）

第5節　出土遺物

今年度の調査では、杯・高台付杯・杯蓋・甕をはじめとする須恵器片が113点出土したほか、土師器片9点、鉄製1点、鉄鏃5点、刀子4点、釘2点、勾玉1点、管玉1点、炭化物3点が出土した。また、馬の歯や骨などの自然遺物も出土している。



第16図　Ｆ９号墳出土遺物実測図(1)

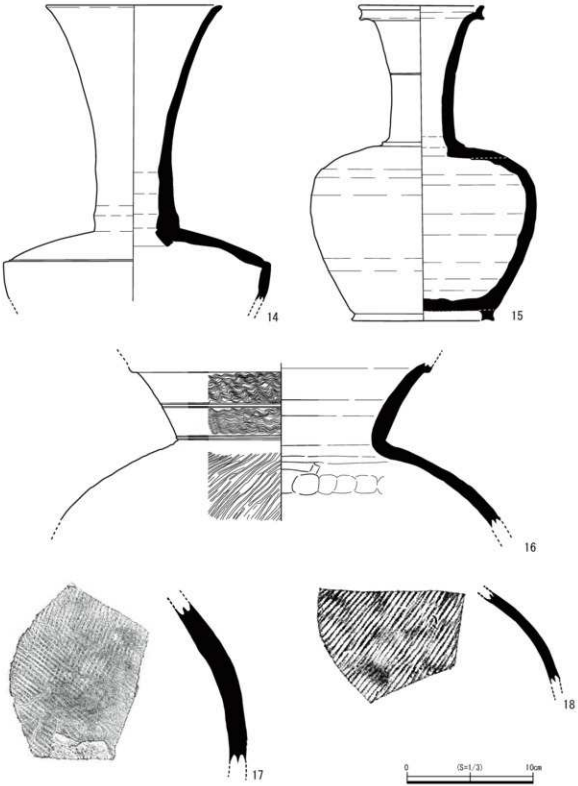
これらは、標高663.790mから663.213mの間の石室覆土である明褐色土層より出土したものである。

（1）須恵器

須恵器には、杯、高台付杯、杯蓋、椀、高杯、子持壺、長頸瓶、甕などがある。今回は出土した須恵器のうち、器形の推定と実測が可能であった17個体と、2012年度に出土した１個体を報告する。

杯　（第16図９、図版14－８）

ほぼ完形の杯が１点出土した。口縁端部は丸くおさめてあり、外反している。体部は丸みを持って立ち上がり、内面の底部にかけては底部に到達する部分で大きく窪んでおり、底部は丸底である。体部から底部と内面はヨコナデ、底部はヘラ切りで調整がなされている。焼成は良く、全体的に色はオリーブ黒色(5Y3/2)で内面底部は一部が赤褐色(5YR4/6)である。胎土はやや粗く、砂礫、砂粒、輝石、白色微粒子がみられる。口径14.0cm、器高4.7



第17図　Ｆ９号墳出土遺物実測図(2)

cm。Ｂ１・Ｂ６グリッド出土。

高台付杯　(第16図６～８、図版14－５～７)

ほぼ完形の高台付杯が３点出土した。いずれも、口縁部がやや開きぎみに立ち上がり、体部はやや丸みを帯び、中心で少し盛り上がった器形である。ロクロ成形後に胴部をナデ、底部はヘラ切りで、高台を貼り付け後、ナデ調整がなされている。器面は褐色で、焼成は悪く、胴部内面と高台内側の底部は生焼けである。胎土はやや粗く、砂粒・黒色微粒子・白色微粒子がみられる。

第２表　須恵器一覧表

実測図番号 写真番号	出土グリッド	器種	寸法(cm)			色調		成形・調整			胎土
			径 (推定値)	器高 (残存高)	厚さ	外面	内面	成形	外面	内面	
16－1 14－1	Ｂ１・Ｃ３・Ｃ４	杯蓋	(9.6)	(2.9)	0.3	黒褐色 (2.5Y3/2)	黒褐色 (2.5Y3/2)	ロクロ	ナデ、ケズリ	ナデ	輝石、砂粒 黒色・白色粒子
16－2 14－2	Ｂ６	杯蓋	15.6	2.3	0.6	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	にぶい赤褐色 (25YR5/4)	ロクロ	ナデ	回転ナデ	砂粒、黒色・白色微粒子
16－3 14－3	Ｂ６	杯蓋	14.7	2.6	0.6	灰黄褐色 (10YR5/2)	橙色 (25YR6/6)	ロクロ	ナデ	回転ナデ	砂礫、砂粒、 黒色・白色微粒子
16－4 14－4	Ｂ６	杯蓋	15.1	2.5	0.6	灰黄褐色 (10YR4/2)	橙色 (25YR6/6)	ロクロ	ナデ、ケズリ	回転ナデ	砂礫、砂粒、 黒色・白色微粒子
16－5 15－13	Ｂ３	杯蓋	(17.9)	(1.1)	0.45	灰黄色 (25Y6/1)	灰黄色 (25Y6/1)	ロクロ	ナデ	回転ナデ	砂礫、砂粒、輝石 白色微粒子
16－6 14－5	Ｂ６	高台付杯	14.4	4.3	0.6	灰黄褐色 (10YR4/2)	にぶい黄色 (10YR4/3)	ロクロ	ナデ、ケズリ	ナデ	砂礫、輝石 白色微粒子
16－7 14－7	Ｂ７	高台付杯	14.2	4.1	0.5	灰黄褐色 (10ＹＲ4/2)	橙色 (25YR6/6)	ロクロ	ナデ	ナデ	砂礫、砂粒、 黒色・白色微粒子
16－8 14－6	Ｂ８	高台付杯	13.7	3.8	0.5	暗灰黄色 (10ＹＲ4/2)	橙色 (25YR6/7)	ロクロ	ナデ	ナデ	砂粒、 黒色・白色微粒子
16－9 14－8	Ｂ１・Ｂ６	杯	14.0	4.7	0.6	オリーブ黒色 (5Y3/2)	暗灰色 (25Y3/2)	ロクロ	ナデ	ナデ	砂礫、砂粒、輝石 白色微粒子
16－10 14－10	Ｂ６	高杯	(14.2)	(6.8)	0.55	浅黄色 (25Y7/3)	浅黄色 (25Y7/3)	ロクロ	ナデ	ナデ	砂粒、雲母、赤褐色・ 黒色・白色微粒子
16－11 14－9	Ｂ６	椀	19.0	(6.0)	0.6	灰黄色 (25Y7/2)	灰黄色 (25Y7/2)	ロクロ	ナデ	ナデ	砂礫、砂粒、 雲母、白色微粒子
16－12 15－14	Ｃ１	子持壺	(4.0)	(1.8)	0.3	黒褐色 (25Y3/1)	黒褐色 (25Y3/1)	ロクロ	ナデ	回転ナデ	砂粒、黒色微粒子
16－13 —	Ｂ５	子持壺	(4.0)	(2.5)	0.3	黒褐色 (25Y3/1)	黒褐色 (25Y3/1)	ロクロ	ナデ	回転ナデ	砂粒、黒色微粒子
17－14 14－12	Ｂ３・Ｂ４・ Ｂ５・Ｂ６	長頸瓶	13.8	(23.4)	0.8	灰色 (7.5Y6/1)	黄灰色 (25Y6/1)	ロクロ	ナデ、ケズリ	回転ナデ	砂礫、砂粒 黒色・白色微粒子
17－15 14－11	Ｂ６	長頸瓶	9.8	25.4	0.8	灰黄色 (25Y7/2)	灰黄色 (25Y6/2)	ロクロ	ナデ、ケズリ	回転ナデ	砂粒、雲母 黒色・白色微粒子
17－16 15－15	Ｂ６・Ｂ７	甕	(20.8)	(8.6)	0.9	灰黄色 (25Y6/2)	灰黄色 (25Y6/2)	ロクロ・ タタキ	ナデ	ナデ	砂粒、 黒色・白色微粒子
17－17 15－16	Ｃ４	甕	—	(9.2)	1.7	黄灰色 (2.5Y6/2)	灰色 (7.5Y5/1)	タタキ	ナデ	ナデ	砂粒、 黒色・白色微粒子
17－18 15－17	Ｃ５	甕	—	(8.7)	1.2	暗灰黄 (25Y5/2)	白灰色 (7.5Y7/1)	タタキ	ナデ	ナデ	砂粒、輝石 黒色・白色微粒子

６は、底部は中心に向かうにしたがって厚くなり、底部中心は外側に窪んでいる。脚部は器の中心よりややずれており、形は正円に近い。底部を残して縁部が破片となっている。また、他の高台付杯よりも焼成の程度が良く灰黄褐色(10YR4/2)で、内側底部は赤褐色(5YR4/6)である。胎土はやや粗く砂礫、輝石、白色微粒子がみられる。口径14.4cm、器高4.3cm。Ｂ６グリッド出土。

７は、色調は灰黄褐色(10YR4/2)で、胎土はやや粗く砂礫、砂粒、白色微粒子、黒色微粒子がみられる。口径14.2cm、器高4.1cm。Ｂ６グリッド土器集中区出土。

８は、他の高台付杯に比べて調整がなめらかであり、高台が高い。色調は暗灰黄色(10YR4/2)で、径13.7cm、器高3.8cm。Ｂ６グリッド土器集中区出土。

杯蓋　(第16図１～５、図版14－１～４・図版15－13)

杯蓋が５点出土し、そのうちの３点はほぼ完形である。

１は、今年度出土した３片と、2012年度にＣ３グリッドから出土した１片(2012年度調査報告書第13図２)が接合したものである。他の杯蓋よりも天井部が深く、つまみの有無は定かでない。器面の調整は非常に丁寧であり、ロクロ成形の後、天井部中央は回転ヘラ削り、天井部外側は回転ナデが施される。焼成は良好。色調は天井部中央が灰黄色(2.5Y6/2)で、天井部外側が黒褐色(2.5Y3/2)。胎土は密で輝石、砂粒、黒色微粒子、白色微粒子がみられる。推定径は9.6cm、残存高は2.9cmであり、他の杯蓋よりも小さい。それぞれ、Ｂ１グリッド・Ｃ４グリッド・Ｃ３グリッド出土。

２・３・４は、ほぼ完形で天井部からやや丸みをもちながら口縁に至り、口縁の折り曲げられた端がやや外に反る器形である。また、１・２・４は天井部内面の中央がくぼんでいるが、３は中央が厚くなっている。器面調整はロクロ成形で、外面上部は回転ヘラ削り後、さらに回転ナデを施し、頂部がやや尖った扁平な宝珠形のつまみが取り付けられた。胎土は密で砂礫、砂粒、黒色微粒子、白色微粒子がみられる。焼成は良好。色調は灰黄褐

色(10YR5/2)、口径は約15cm前後で、器高は約2.5cmである。主にＢ６グリッド土器集中区出土。

５は、２・３・４と似て、天井部が平坦で浅いが、口縁の折り曲げられた端がやや大きく外に反っている。また、推定径は17.9cmであり、他の杯蓋よりもやや大きく、焼成がとても良い。Ｂ３グリッド出土。

椀　(第16図11、図版14－９)

台付の椀が１点出土した。口縁から下方にかけて内曲した器形である。口縁の端が外に反っている。ロクロ成形の後、内面にナデを施し、脚部はヘラ削りで調整されている。欠損しているものの、底部には台部痕が見られる。この部分のケズリの痕跡からまず上部をロクロで整形した後に脚台を付けたものと思われる。焼成は良く、外面・内面と共に灰黄色(2.5Y7/2)、胎土はやや粗く砂礫、砂粒、雲母、白色微粒子がみられる。口径19.0cm、残存高6.0cm。Ｂ６グリッド土器集中区出土。

高杯　(第16図10、図版14－10)

高杯が１点出土し、2011年度にＢ７グリッドで出土した杯部破片(2011年度調査報告書第13図４)と2012年度にＣ３グリッドから出土した杯部破片(2012年度調査報告書第13図３)と、同年にＢ７グリッドから出土した脚部破片(2012年度調査報告書第13図４)に接合した。外反したロ縁から下方にかけて内曲した器形である。器面調整はロクロ成形後にナデが施され、杯部底部中央には脚部を接合する際に刻まれたと思われる同心円状の線刻がある(図版15－28)。焼成は悪く、表面は全体的に磨滅が確認できる。色調は浅黄色(2.5Y7/3)で胎土はやや粗く砂粒、雲母、黒色微粒子、白色微粒子、赤褐色粒子がみられる。口径約14.2cm、残存高6.8cm。Ｂ６グリッド出土。

子持壺　(第16図12・13、図版15－14)

子持壺の壺形子器の口縁部の破片が出土した。12は2011年度・2012年度に出土した破片と同一個体であると思われるが、厚さなどが若干異なっており、2012年度に出土したものよりも、若干厚い。自然釉の付着が確認できる。焼成は良好であり、色調は黒褐色(2.5Y3/1)で、表面が剥げた部分は灰白色(5Y7/2)であり、胎土には砂粒が少しと黒色微粒子がみられる。口径約4.0cm、残存高約2.5cm、厚さ0.3cm。Ｃ１グリッド出土。

13は2012年度に出土したもので、今年度の発掘の成果より、過年度の遺物を検討した結果、今回掲載するに至った。口径約4.0cm、残存高約1.8cm、厚さは0.28cm～0.3cm。Ｂ５グリッド出土。

長頸瓶　(第16図14・15、図版14－11・12)

長頸瓶が２点出土し、そのうち１点はほぼ完形である。

14は、長頸瓶の頸部と肩部14点が接合したものである。頸部は中央がややくびれて口縁部近くで外反している。肩先に一つの段が形成されており、その部分に自然釉がかかっている。頸部接合には二段構成がみられる。ロクロによる成形後、上部にはナデ、下部にはケズリがされている。焼成は良好で、色調は灰色(7.5Y6/1)であり、胎土は密で砂礫、砂粒、黒色微粒子、白色微粒子がみられる。口径は13.8cm、くびれ部分の径は6.0cm、肩部の最大径は21.9cm、残存高は23.4cm、頸部の高さは17.9cm。Ｂ１グリッド・Ｂ４グリッド・Ｂ５グリッド・Ｂ６グリッド土器集中区出土。

15は、２片を接合すると、ほぼ完形になる。頸部の中央がややくびれて１条の沈線がめぐらされ口縁部近くで外反しており、口縁部は折れ曲がって段を形成する。頸部下端には環状凸帯がめぐらされている。頸部接合には三段構成がみられ、胴部と頸部は別々に作り、二次成形の段階で両者を風船技法によって接合したものと思われる(写真図版15－29)。ロクロによる成形後、上部にはナデ、下部にはケズリが施されている。焼成は良好で、色調は灰黄色(2.5Y7/2)であり、胎土は密で砂粒、雲母、黒色微粒子、白色微粒子がみられる。口径は9.8cm、くびれ部分の径は4.9cm、胴部の最大径は17.8cm、底径11.2cm、頸部の高さは11.1cm、胴部の高さは13.8cm、器高24.9cm。Ｂ６グリッド土器集中区出土。

甕　(第16図16～18、図版15－15～17)

大甕片が５片出土し、そのうち３片は2012年度に出土した破片と接合した。

16は今年度出土した３片と、2012年度にＢ６グリッドから出土した１片(2012年度調査報告書第13図６)が接合した。頸部には櫛描きによる波文が4列あり、溝を境に上段と下段に分かれており(写真図版15－30)、自然釉が付

着している。内側はナデ成形が施されている。肩部は右から左にタタキ目が刻まれている。焼成は良好であり、色調は頸部が灰白色(2.5Y7/1)、肩部が灰黄色(2.5Y6/2)であり、胎土は密で砂粒、黒色微粒子、白色微粒子がみられる。推定口径は20.8cm、残存高は8.6cm。B６土器集中区・B７グリッド出土。

17は肩部の破片とみられ、外面下部が一部欠けている。外面はタタキにより成形され、その後、内外面ともにナデによる調整が施されている。焼成は良好であり、色調は下部が灰黄色(2.5Y6/2)で上部が黄灰色(2.5Y4/1)であり、焼成は良好で、胎土は密で砂粒、黒色微粒子、白色微粒子がみられる。C４グリッド出土。

18は甕の胴部の破片とみられ、外部全面に自然釉がかかっている。外面はタタキにより成形され、その後、内外面ともにナデによる調整が施されている。焼成は良好であり、色調は暗灰黄(2.5Y5/2)であり、胎土は密で砂粒、輝石、黒色微粒子、白色微粒子がみられる。C５グリッド出土。 (福嶌)

(２)土師器

土師器は小破片が９点出土したが、器種が判断できるものは存在しなかった。多くが微細なため実測は行っていない。B４グリッドから１点、B６グリッドから３点、C６グリッドから４点、C７グリッドから１点が明褐色土層から出土している。すべての破片はにぶい橙(7.5YR6/4)から橙(5YR6/6)で、胎土に輝石、砂粒、黒色微粒子、白色微粒子、黒雲母、赤褐色粒子が含まれているやや分厚い破片と、胎土に砂粒、白色微粒子、黒色微粒子が含まれている薄い破片の２つに分けられる。このうち、B６グリッド出土の２点は内面の様子から、輪積み成形であることがうかがわれる。 (福嶌)

(３)鉄製品

鉄製品には鉸具・鉄鏃・刀子があり、また釘と推測される鉄製品も出土したが、近代以降のものとみられるためこれは報告しない。今年度の鉄製品は総数25点が出土した。

鉸具 (第18図26、図版15－25、図版16－43)

輪金の頭部は環状にふくらみ、両脚を横棒で連結している。T字状の刺金はみえない。全長9.6cmの大型品で、頭部の幅は4.9cm、両脚端部の幅2.1cm。頭部の断面は方形で直径0.6cm。脚端部の断面は扁平で0.6cm×0.23cmである。B６グリッド土器集中区出土。

鉄鏃 (第18図19～23、図版15－18～22、図版16－36～40)

鉄鏃は５点出土した。５点とも頸部に棘状関を持つ長頸鏃である。ほぼ完形の３点は鏃身部の平面形が長三角形、断面が片丸造、頸部は棒状で断面は長方形、茎部は長茎である(部位名称は水野2009による)。

19は鏃身部、頸部、茎部ともに錆ぶくれが見られる。全長が15.1cm、鏃部長3.2cm、鏃部幅0.9cm、頸部長8.2cm、頸部幅0.5cm、茎部長3.4cm、茎部幅0.3cmである。C５グリッド出土。

20は鏃身部、頸部、茎部ともに錆ぶくれが見られる。全長が12.8cm、鏃部長3.0cm、鏃部幅1.1cm、頸部長8.5cm、頸部幅0.5cm、茎部長1.2cm、茎部幅0.4cmである。C７グリッド出土。

21は同グリッドから出土した２点が接合してほぼ完形の状態になった。鏃身部・頸部・茎部は破損と錆ぶくれが見られる。全長14.5cm、鏃部長2.7cm、鏃部幅0.9cm、頸部長5.5cm、頸部幅0.6cm、茎部長3.2cm、茎部幅0.4cmである。C５グリッド出土。

22は残存長7.5cm、頸部残存長5.1cm、頸部幅0.6cm、茎部残存長2.4cm、茎部幅0.5cmである。全体的に欠損部分が多く、全長は不明。刃部は現存せず、頸部が大きく曲がっている。C７グリッド出土。

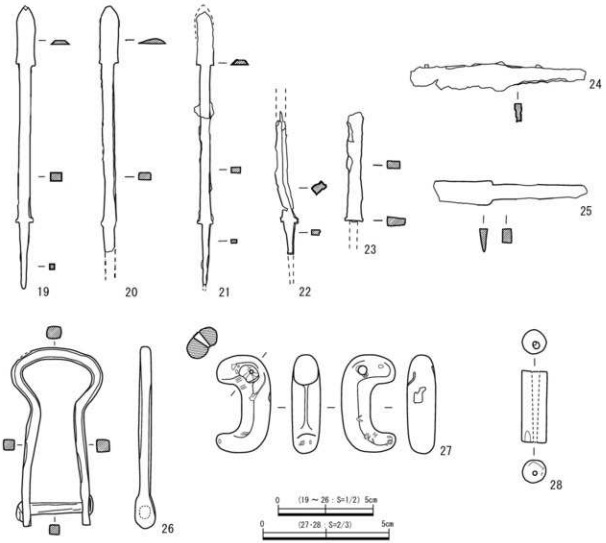
23は頸部のみ残存していて全長は不明。錆によって膨張しており他の鉄鏃頸部と比べて太い。頸部残存長5.6cm。頸部幅0.6cm。B１グリッド出土。

刀子 (第18図24・25、図版15－23・24、図版16－41・42)

刀子は４点出土し、そのうち２点を実測した。

24は全体的に欠損部分と錆ぶくれが多く、茎部の一部だけ残存していて、まっすぐな背をもつ。残存長9.2cm、刃部長5.2cm、刃部幅1.3cm、茎部長4.0cm、茎部幅1.0cm、背の厚さ0.2cm。B６グリッド土器集中区上面出土。

25は刀身が中程で欠損しているが、茎部はほぼ原形に近い形で残存している。刃部、茎部ともに欠けと錆ぶく



第18図　Ｆ９号墳出土遺物実測図（３）

第３表　鉄鏃一覧表

実測図番号 写真番号 X線写真番号	出土グリッド	寸法(cm)									
		全長 (残存値)	鏃身部			頸部			茎部		
			長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚
18－19 15－18 16－36	C5	15.1	3.2	0.9	0.2	8.2	0.5	0.4	3.4	0.3	0.2
18－20 15－20 16－38	C7	(12.8)	3.0	1.1	0.3	8.5	0.5	0.4	(1.2)	0.4	—
18－21 15－19 16－37	C5	14.5	2.7	0.9	0.3	5.5	0.6	0.4	3.2	0.4	0.2
18－22 15－21 16－39	C7	(7.5)	—	—	—	(5.1)	0.6	0.4	(2.4)	0.5	0.4
18－23 15－22 16－40	B1	—	—	—	—	(5.6)	0.6	0.4	—	—	—

第４表　刀子一覧表

実測図番号 写真番号 X線写真番号	出土グリッド	寸法(cm)					
		全長 (残存値)	刃部		茎部		背 厚
			長	幅	長	幅	
18－24 16－24 16－41	B6	(9.2)	(5.2)	1.3	(4.0)	1.0	0.2
18－23 16－25 16－42	C6	(8.0)	(3.0)	1.2	5.0	0.8	0.5

れが見られる。片刃でまっすぐな背を持つ両関式刀子である。残存長8.0㎝、残存刃部長3.0㎝、刃部幅1.2㎝、茎部長5.0㎝、茎部幅0.8㎝、背の厚さ0.5㎝。Ｃ６グリッド出土。（内田・藤好）

（４）玉　類

玉類には、勾玉、管玉、切子玉などがある。今回は勾玉と管玉の２点の玉類が出土した。

勾玉　（第16図27、図版15－26、図版16－44）

瑪瑙製の勾玉が１点出土した。形態は「コ」の字形で、表面は極めて円滑に整形され断面形は円形を呈している。全長3.9㎝、全体の幅は2.2㎝、各部の幅は頭部2.0㎝、腹部1.3㎝、尾部1.9㎝で、各部の厚さは頭部0.95㎝、胴部1.15㎝、尾部0.85㎝、孔径は上端0.2㎝、下端0.4㎝、重量は11.0gである。穿孔は片面穿孔で孔壁には穿孔時の回転痕は残っていない。穿孔上面側は極めて平坦だが、下面側は穿孔時破裂し最大径0.8㎝剥離しており、破損後剥離部をさらに整形しようとしたものと思われる。研磨は極めて精巧で、整形面を上下面に僅かに残し腹背面では丁寧に面取されている。Ｂ２グリッド出土。

管玉　（第16図28、図版15－27、図版16－45）

碧玉製の管玉が１点出土した。側面形は正円筒形で、断面形は円形を呈しており、片面穿孔によるが、末端まで穿孔する直前に破裂しており、最大0.09㎝剥離している。側面は縦方向へ研磨されており、精巧な作りである。高さ2.8㎝、最大幅1.0㎝、最小幅0.9㎝、孔の大きさは最大口径3.9㎝、最小口径0.15㎝、重量5.2g。Ｂ６グリッド出土。（福嶌）

（５）動物遺体

石室内の奥部からウマの歯及び上顎骨の一部が出土している。左上顎骨は第１切歯から第３切歯、犬歯、第２前臼歯から第４前臼歯が出土しており、切歯及び犬歯は切歯骨に植立しているが、前臼歯は上顎骨が一部残存するのみである。右の上顎歯は第２切歯、第３切歯、第２前臼歯、第３前臼歯がみられる。左の上顎骨と同様に切歯は切歯骨から植立するが、第１切歯及び犬歯を欠く。また前臼歯は上顎骨が一部残存するのみである。下顎歯は右第２前臼歯及び左第２後臼歯のみの出土である。その他、頭蓋骨及び下顎骨の破片と思われるものが20点以上出土している（図版16－31～35）。

本資料は同一歯種がないことや、全歯高の計測値よりほぼ同じ年齢であったことから、すべて同一個体のものと思われる。歯は磨滅がある程度すすんでいるが、歯冠部及び歯根の長さの計測値より７～８歳ぐらいで、犬歯があることから雄である。出土資料は歯及び上顎骨の一部のみであるため、詳細な大きさは不明であるが、現生の在来馬（西本標本）と比較して、体高120㎝前後のウマであると思われる。

古墳から出土するウマの多くが周溝から出土することが多いが、本資料は石室内からの出土である。長野県内において石室内からのウマの出土が見られないことはないが、非常に少ない。また、資料は頭部の特に前部の骨を中心に出土しており、四肢骨及び体幹部の骨はみられなかった。資料は今年度の発掘段階での最下部からの出土であるが、次年度以降の発掘において、土層観察用畦内を含めて、今回未検出の部位が出土する可能性もあることから、改めてウマの出土状態を検討する必要がある。（浪形）

第５表　穂高古墳出土ウマ一覧

トレンチ	グリッド	層位	№	種名	部位名	LR	残存部	状態	備考	個数
1T	B1		216	ウマ	下顎P2	R	歯冠部・歯根部	セメント質が別離		1
1T	C1	明褐色土	227	ウマ	下顎M2	L	歯冠部・歯根部	セメント質が別離		1
1T	C3		244	ウマ	上顎P2	L	歯冠部・歯根部			1
1T	C3	明褐色土	245	ウマ	上顎P2	R	歯冠部・歯根部			1
1T	C3		246	陸獣	破片					1
1T	C4		286	陸獣	破片					2
1T	C3	明褐色土	278	ウマ	上顎骨	L	(P34) 上顎骨一部有			1
1T	C3	明褐色土	278	ウマ	上顎骨	R	(P3) 上顎骨一部有			1
1T	C4		259	陸獣	破片					2
1T	C4		260	陸獣	破片				同一個体 ウマ頭蓋骨・下顎骨 （♂、7～8歳の成獣）	1
1T	C4		261	陸獣	破片					3
1T	C4		262	陸獣	破片					2
1T	C4		263	陸獣	破片					4
1T	C4		264	陸獣	破片					4
1T	C4		265	陸獣	破片					3
1T	C4		266	陸獣	破片					1
1T	C4		267	ウマ	上顎骨	R	(×I23) 切歯骨			1
1T	C3		268	ウマ	上顎骨	L	(I123C) 切歯骨			1
1T	C3		268	ウマ	上顎骨	L	顎骨片			3
1T	C4		288	陸獣	破片					3

第６表　ウマの上顎臼歯計測値

部位名	LR	第二前臼歯			第三前臼歯			第四前臼歯		
		長さ(mm)	中央幅(mm)	高さ(mm)	長さ(mm)	中央幅(mm)	高さ(mm)	長さ(mm)	中央幅(mm)	高さ(mm)
上顎骨	L	35.2	22.97	37.68	26.83	25.62	48.33	26.43	25.81	54.34
上顎骨	R	34.47	22.7	37.25	26.46	24.67	49.46			

第７表　ウマの下顎臼歯計測値

部位名	LR	計測値(mm)				
		長さ	前幅	中央幅	後幅	高さ
下顎M2	L	(25.32)	15.31	—	14.39	61.91
下顎P2	R	30.3	—	13.6	13.46	32.48

第Ⅴ章　2013年度調査の成果と考察

第１節　石室の構造

（１）石室基盤構築方法

Ｆ９号墳の位置する島川扇状地では、紀元前１世紀に島川の大洪水が発生した。10世紀にも再び大洪水が発生しており、Ｆ９号墳周辺の流路も氾濫を起こしたと考えられている。その後の地表微地形は12世紀以降に形成されたものと見られる（重野2007）。さらに国営アルプスあづみの公園開園までは、西側は旧穂高町の水源池、東側は耕作地として利用されており、現状は古墳築造時の地形と大きく異なることが予想される。

1996年に同公園の開発に先立ちＦ９号墳の約50ｍ南で行われた土層調査のうち、最も近い①地点では標高約663.31ｍ以下のⅣ層が砂礫層である（長野県埋蔵文化財センター編1997）。また、2010年のＦ９号墳の発掘調査において設定した第Ⅱトレンチ Ｇ１グリッドでは標高約663.78ｍ以下の５層・６層が砂礫層であることを確認している（國學院大學文学部考古学研究室編2011）。これらが調査地付近の基盤層に相当すると考えられるが、今年度の第Ⅲトレンチ Ｎ２～Ｑ２グリッド北壁、石室Ａ５・Ａ６グリッド東壁、石室前庭部Ａ９グリッド東壁の各層の標高を比較すると（第19図）、第Ⅲトレンチ６層と７層の境（７層上面）が標高約663.25ｍであり概ね一致する。また、第Ⅲトレンチ６層上面の標高と第Ⅰトレンチ前庭部６層上面の標高がほぼ同じ約663.77ｍであり、６層は1996年度①地点のⅢｂ～Ⅲｃ層と、2010年度Ｇ１グリッドの４層に相当する古墳時代の表土層の可能性がある。第Ⅲトレンチ６層・７層は自然堆積層と考えられ、第Ⅲトレンチ６層の東側は７層を覆うように堆積したものであろう。

一方、第Ⅰトレンチ石室内の今年度調査における最深部の標高は約663.31ｍである。このことから、石室は第Ⅲトレンチ６層を含む表土層より45cm以上掘り下げて構築されたもの、第Ⅲトレンチ４層・５層は石室東壁の裏込め石を支えるための盛土と考えられる。

松本平では６世紀後半から「省力化古墳」と呼ばれる、山腹斜面を掘り込んだり、当時の地表面を掘り込んで石室を構築した古墳が出現する（桐原1992）。穂高Ｇ１号墳（上原古墳）は古墳築造時の地表面を約１ｍ掘り込んで構築されていると考えられる。殿村古墳は地山のローム層を約0.8ｍ掘りくぼめて構築されている。　（新川）

（２）石室構造の考察

Ｆ９号墳の石室は、主軸をN-12°-Wにとり南向きに開口する無袖の横穴式石室で、長7.0ｍ、幅1.3～1.5ｍ、高さは現時点で1.8～2.0ｍである。これまでに判明している石室構造は、東・西両側壁、奥壁ともに６段で持ち送りがみられ、両側壁最上段は丸みのある石材の小口積みであるが、以下の段は四角や横長の石材の平積みである。奥壁は様々な大きさの石材を乱雑に積んでいるが、現状で検出している最下段中央には奥壁に使用されているなかで最大と推測される大きさの石材が１点用いられており、腰石の存在も予想しつつ調査を進める必要がある。

これまでの研究で、穂高古墳群は６世紀後半から７世紀にかけて築造され、８世紀に入っても追葬がみられる古墳もあったことが明らかにされている（桐原1991、三木1991・2011）。松本平において、穂高古墳群の使用期間と併行する築造時期の横穴式石室は、６世紀中頃の塩尻市姉ノ神１号墳を初源として（塩尻市教育委員会編1986c、飯島2010）、６世紀中頃から後半にかけては松本市丸山古墳（松本市教育委員会編1993d）、６世紀後半に大町市新郷１号墳（原田1985）などが築造された。７世紀初頭には池田町鬼ノ釜古墳（池田町教育委員会編1977）、７世紀中ごろから後半にかけては松本市南方古墳（松本市教育委員会編1990a）が築造される。７世紀の後半から８世紀前半にかけては松本市秋葉原古墳群・安塚古墳群が築造されている。また、松本市中山古墳群も、６世紀前半に遡る52号墳をはじめとして８世紀前半の65号墳まで２世紀にわたって築造が続いた（松本市教育委員会編2003b・2004c・2008）。

これらの古墳について、石室の土台である基底部や石室石材の規模に着目すると、まず石室基底部を、旧地表

1996年度①地点　第Ⅱトレンチ　第Ⅲトレンチ

①地点

Ⅰ層：水田耕作土

Ⅱ層：砂礫層

Ⅲa層：旧表土の土壌A層

Ⅲb層：旧表土の土壌B層

Ⅲc層：旧表土の土壌C層

Ⅳ層：砂礫層

第Ⅱトレンチ

3層：黒色土層（10YR2/1）

4層：灰黄褐色土層（10YR4/2）

5層：黄褐色砂礫層（2.5YR5/3）

6層：にぶい黄色砂礫層（2.5YR6/3）

第Ⅲトレンチ

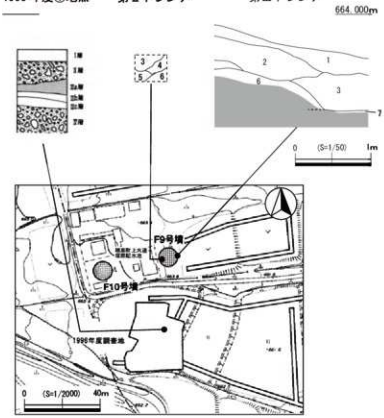
1層：暗褐色土層（10YR3/4）

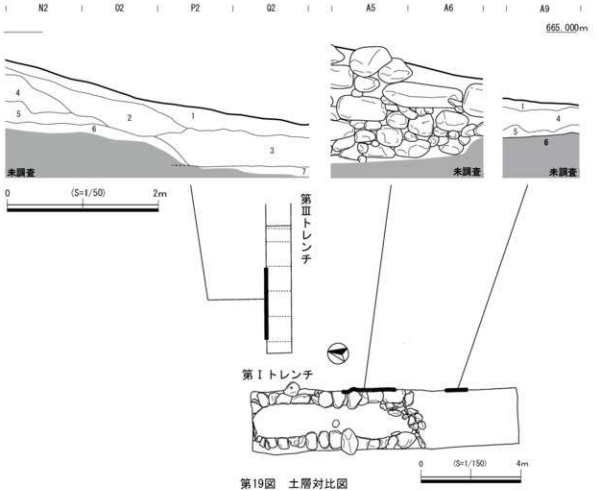
2層：黒褐色土層（10YR2/3）

3層：黄褐色土層（2.5Y5/4）

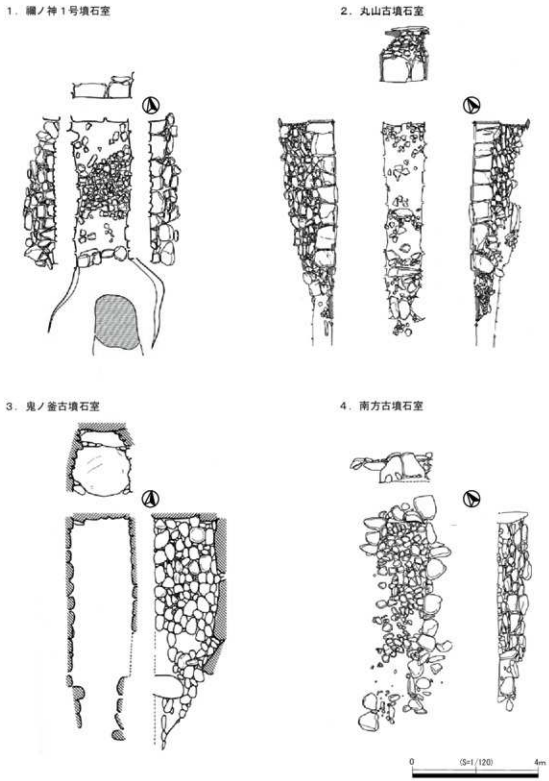
6層：にぶい黄色砂礫層（2.5YR6/4より暗い）

7層：オリーブ黄色砂礫層（5Y6/5）





第19図　土層対比図



第20図　石室類例

（1：塩尻市教育委員会編1986c　2：松本市教育委員会編1993d　3：長野県編1988　4：松本市教育委員会編1990a）

面をそのままないしは整地して設けるものと、旧地表面上に盛土をするもの、旧地表面を掘りくぼめて石室の基盤とするものの３者に分かれる。旧地表面を掘りくぼめて石室基底部とする工法は、全国の横穴式石室においてもっともよくみられ(青木2004)、長野県においては６世紀後半から出現する(桐原1992)。前項でも述べたようにＦ９号墳の石室基底部も、旧地表面を掘りくぼめて設置されたと考えられる。

石室石材の規模については、①最下段に大型の石材を用いて(腰石)、その上に中型の石材を積んでいくもの(第20図１・２)と、②最下段を含めたいずれの段も同規模の石材で構成されるものとの２者があり、奥壁と側壁とで同様の用石のものが多くを占めるが、鬼ノ釜古墳(同３)や南方古墳(同４)・秋葉原１号墳・安塚６号墳のように異なる組み合わせとなる石室も認められ、これらはいずれも奥壁は腰石を用いる一方で、側壁は同規模の石材で構成されている。現状で想定されるＦ９号墳の石室もこの用石をとると推測される。

ここで比較対象に挙げた古墳のなかでは、当時の地表面を掘りくぼめて基底部とする石室のほとんどが奥壁に腰石を用いていたが、奥壁の構造が確認できる事例が少ないことや、奥壁に腰石を用いる石室が必ずしも地表面下に設けた石室基底部の上に構築されているわけではないこと、一方で側壁に関しては同規模の石材で構成される事例が多いことから、本項で石室基底部の構築方法と用石の関係を明確に関連づけることはできない。

穂高古墳群の中で掘り込みの石室基底部を持つものには、Ｆ１号墳・Ｆ６号墳・Ｇ１号墳(中島1976、桐原1992)があり、Ａ１号墳・Ｂ１号墳もその構造を持つ可能性が指摘されている(岩崎ほか1983)。

また、腰石の使用が指摘されている古墳は、Ｂ１号墳・Ｃ２号墳・Ｄ１号墳・Ｅ２号墳・Ｅ７号墳・Ｆ１号墳・Ｇ１号墳がある(三木2011)が、石室基底部についても明らかにされているのはＤ１号墳とＧ１号墳のみである。Ｄ１号墳は巨岩の下を洞窟状に掘り込む特殊な古墳であり(三木2011)、Ｇ１号墳は当時の地表面を約１m掘りくぼめて石室基底部を設けている(穂高町教育委員会編2001)。　(尾上・神谷・福嶌・三輪)

(３)周　溝

松本平では石室と周溝を一体的に調査した例は少ないが、６世紀の繭ノ神２号墳には東壁から約3.1m、西壁から約1.5m外側に、幅約1.3m深さ0.2mの周溝がある(塩尻市教育委員会編1986c)。７～８世紀の古墳では秋葉原古墳群１号墳には開口部を中心とした弧状の溝があり、奥壁から北西・北東約3.8m、西壁から南西に約4.4mで、最大幅は推定２m、開口部から西に行くにつれて細くなり、なくなってしまう(松本市教育委員会編1983)。殿村古墳は、奥壁から約2.8m、東西壁から約2.5m、西壁から約2.4m外側に、幅約１m～3.5m、深さ約0.02m～0.3mの不整円形の周溝がある(山形村教育委員会編1987)。中山55号墳では、奥壁から約3.4m、東壁から約３m、西壁から約４m外側に幅１m～３m、深さ約0.3mの周溝がある(松本市教育委員会編2003b)。しかし、Ｆ９号墳は2010年度の調査で墳丘西側に全長８mのトレンチを設定し、2013年度の調査では墳丘東側に全長6.3mのトレンチを設定したがどちらも周溝は確認されず、また遺物も出土しておらず、今後の課題である。　(新川)

第２節　副葬品

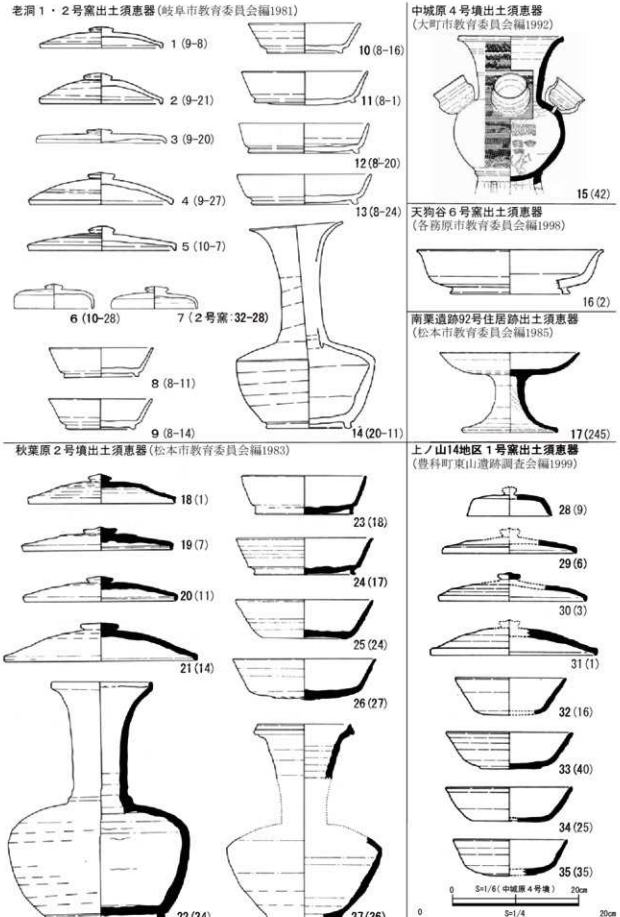
(１)須恵器の編年的位置

長野県では、７世紀から在地での須恵器生産が始まっており、古墳に副葬された須恵器の多くは在地産と考えられている。８世紀に入ると、須恵器は在地産の比重が高くなるが、一方で中南信では美濃須衛窯産の須恵器の比率が高いのも特徴で、その編年との対比によって年代が決められている(直井・原1987、笹沢1988、小平1990)。

Ｆ９号墳出土須恵器の胎土は褐色で黒色・白色微粒子を含む杯・高台付杯・杯蓋と、胎土が灰色で白色微粒子を含む椀・長頸瓶・甕に区分され、前者は在地産、後者は東海地方からの搬入品とみられる。

杯(第16図９)は、2011年度出土の杯(第22図５)に類似する。同資料は安曇野市上ノ山14地区１号窯(第21図35)と上ノ山15地区４号窯出土例(豊科町東山遺跡調査会編1999)に対比されており、共に８世紀前半頃と推定される。

高台付杯(第16図６～８)は３点出土し、口径13.7cm～14.4cm、器高3.8cm～4.3cmである。杯蓋は口径15cm前後、



第21図　須恵器類例 ()内は原報告書図版番号

器高約2.5cmで、つまみが扁平な宝珠形であるもの(第16図２～４)が３点出土した。出土数と口径から杯蓋と高台付杯はセットで用いられていたものと考えられる。

長頸瓶は２点出土した。このうち、頸部下端に環状凸帯がめぐらされ自然釉がかかるもの(第17図15)には、頸部接合の際に粘土の輪をまず口頸部に貼付し、そののち体部と接合させる「三段構成」がみられ、灰色で白色粒子が含まれている。環状凸帯付長頸瓶は東北地方の特徴になっているが、東北以南だと平城京や関西の諸国でいくつか確認されるほか美濃での出土がやや目をひく。頸部下端環状凸帯は美濃須衛窯の特徴とされている(各務原市埋蔵文化財調査センター編2005)。もう１点の石室東側中央部から出土したもの(第17図14)は、頸部中央がややくびれて１条の沈線がめぐらされ口縁部近くで外反しており、口縁部は折れ曲がって段差がある器形である。頸部接合には体部の肩に粘土の輪を貼付して調整したのちに口頸部を接合させる「二段構成」がみられ、灰色で白色粒子が含まれている。

これらの高台付杯、杯蓋、長頸瓶は岐阜市老洞１号窯・２号窯(第21図１～14、岐阜市教育委員会編1981)や松本市秋葉原１・２号墳(第21図18～27、松本市教育委員会編1983)に類例がある。老洞１号窯は美濃須衛窯編年(渡辺1984・2008)のⅣ期第１小期(８世紀第１四半期)に位置付けられている。

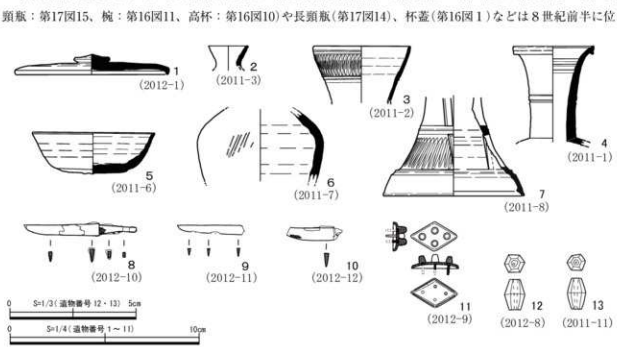
石室奥壁部付近から出土した推定径9.6cm、残存高2.9cmで頂部が残存していない杯蓋(第16図１)は老洞１号窯・２号窯(美濃須衛窯編年Ⅳ期第１小期)や上ノ山14地区１号窯(８世紀第２四半期～第３四半期初頭)に類例がある。

椀(第16図11)は口径約19.0cm、残存高6.0cmで口縁から下方にかけて内曲した器形で、口縁端が外に反っており、底部は丸底である。各務原市天狗谷６号窯(第21図16、各務原市埋蔵文化財調査センター編1998)に類例がある。美濃須衛窯編年のⅣ期第１小期～Ⅳ期第２小期(８世紀前半)に位置付けられている。

高杯(第16図10)は、口径約17.0cm、残存高6.8cmで、外反した口縁から下方にかけて内曲した器形である。８世紀前半とされている松本市南栗遺跡第92住居(第21図17、松本市教育委員会編1985)に類例がみえる。

子持壺(第16図12)は子器の一部のみが出土している。大町市中城原４号古墳西側周溝内(大町市教育委員会編1992)から全体像が復元できる例が出土しており(第21図15)、伴出する土器の年代は６世紀前葉～中葉頃とされている。

今年度出土したＢ６グリッド土器集中区での一括出土品(高台付杯：第16図６～８、杯蓋：第16図２～４、長頸瓶：第17図15、椀：第16図11、高杯：第16図10)や長頸瓶(第17図14)、杯蓋(第16図１)などは８世紀前半に位



第22図　2010年度～2012年度出土遺物実測図

第８表　比較古墳一覧表

市町村名	古墳名	石室長(m)	造物の時期	出土遺物
大町市	中城原４号	—	６世紀前半～中半	土師器、須恵器
	新堀１号	8.0	６世紀後半～８世紀	石室内：土師器(杯)、須恵器(杯・提瓶・直口壺)、武器(大刀・鉄鏃・刀子)、馬(轡)、装身具(金環・管玉・丸玉)、人骨墳丘：土師器(高杯)、須恵器(蓋杯・大甕・長頸壺・短頸壺)
池田町	鬼の釜	7.0	７世紀初頭～７世紀中葉	須恵器(横瓶・甕)、武器(刀子?)、古銭
松川村	祖父が塚古墳	8.1	７世紀前半代	土師器、武器(太刀)、馬具、鐙、鉄、装身具(勾玉・小玉・切子玉・銀環)
安曇野市	穂高Ａ６号(犬塚墳)	7.2	６世紀後半～８世紀前半	須恵器(杯・杯蓋・平瓶・横瓶)、武器(直刀・蹄・鉄鏃)、馬具(雲珠・杏葉・轡・鐙・尾鈴)、装身具(勾玉・管玉・ガラス小玉・切子玉・金環)
	穂高Ｂ23号(祝塚)	4.0	６世紀後半～８世紀前半	須恵器(杯・瓶)、須恵器(高杯・壺・提瓶)、武器(直刀)、馬具、金鍍金菱形留金具、装身具(勾玉・管玉・切子玉・金環)
	穂高Ｄ１号(魏石鬼窟)	4.3	６世紀後半～７世紀前半	須恵器(杯・杯蓋・瓶・提瓶・平瓶)、武器(鉄鏃)、馬具(鉄地金銅張り飾金具・留金具破片・半球形飾金具・金具破片)、装身具(金環)
	穂高Ｇ１号(上原古墳)	10.1	６世紀後半～８世紀初頭	須恵器(杯・杯蓋)、武器(直刀・刀子)、馬具(轡・杏葉)、装身具(勾玉・管玉・ガラス小玉・切子玉・金環)
	穂高Ｅ６号(狐塚３号墳)	—	６世紀後半～８世紀前葉	須恵器(杯蓋・高杯・長頸瓶・平瓶・横瓶)、武器(直刀・鐔・槍身・鉄鏃)、馬具(轡)、装身具(青銅製鈴・勾玉・管玉・切子玉・臼玉・金環)
	穂高Ｂ５号(金堀塚)	8.6	７世紀初頭～後半	須恵器(長頸瓶・提瓶)、武器(直刀・鉄鏃)、馬具(轡：７世紀初頭・尾鐙)、装身具(勾玉・管玉・小玉・金環)、人骨、茶碗
	穂高Ｆ１号(一本杉古墳)	4.4	—	須恵器(高台付杯)・骨片
	穂高Ａ１号(陵塚)	8.1	—	土師器、須恵器(杯・瑁・甕・提瓶)、武器(直刀)、馬具
	穂高Ｂ１号(ちいが塚)	8.8	—	
	穂高Ｅ７号(狐塚２号)	—	—	武器(直刀・刀子・蹄・鉄鏃)、装身具(金環)
	潮８号	約5.0	７世紀末	石室：須恵器(小盤)、刀中茎、玉類(勾玉・切子玉・丸玉・臼玉・小玉)、耳周溝：須恵器(杯蓋・杯・高杯・長頸壺・平瓶・瓶・蓋杯・提瓶)、馬の歯
	潮１号(金山塚)	—	—	須恵器、武器(直刀・刀子)、馬具(轡)
松本市	丸山古墳	6.15	６世紀中頃～７世紀代	土師器(杯・高杯)、須恵器(杯・高杯・瓶・提瓶・横瓶・平瓶・瓶類・短頸壺・甕)、武器(鉄刀・鉄鏃)、装身具(耳環・勾玉・管玉・切子玉・小玉・銅鋲)、人骨、歯
	秋葉原１号	7.4	７世紀末～８世紀前半	土師器(高杯)、須恵器(有台杯・無台杯・蓋・長頸壺・耳付短頸壺・長胴短頸壺・平瓶・甕)、鉄器、炭化物、骨片
	秋葉原２号	—	７世紀末～８世紀前半	土師器(杯・高杯)、須恵器(有台杯・無台杯・蓋・高杯・長頸壺・耳付短頸壺・甕)、鉄鏃
	安塚５号	8.4	７世紀後半	土師器(高杯)、須恵器(杯・蓋・高杯・長頸壺・短頸壺・瓶)、武器(直刀・刀装具・鉄鏃)、装身具(金環)
	安塚６号	8.1	７世紀末～８世紀前半	土師器(高杯)、須恵器(蓋・長頸壺・甕)
	安塚７号	3.5	７世紀末～８世紀前半	須恵器(杯・蓋・長頸壺)
	安塚８号	9.7	７世紀末～８世紀前半	土師器(杯・高杯)、須恵器(杯・蓋・高杯・壺)、武器(鉄鏃・直刀)、鈴帯金具、金環、勾玉
	安塚１号	1.2	８世紀中頃	須恵器(杯・長頸壺)
	安塚２号	3.0	８世紀後半	須恵器(杯)、人骨
	安塚３号	3.0	８世紀代	人骨
	安塚４号	5.0	８世紀代	土師器(甕)、須恵器(杯・蓋・甕)、人骨
	安塚９号	—	—	須恵器(甕)
	南方古墳	6.0	７世紀中頃～８世紀初頭、10世紀	土師器(杯・椀・高杯)、須恵器(杯・蓋・高杯・高盤・脚付長頸壺・平瓶・長頸壺・短頸壺・フラスコ型瓶・瓶・壺・甕)、武器(直刀・刀装具・刀子・鏃)、馬具(轡・鞍・鎧具・比金具)、装身具(耳環・玉類)、銅鏡、承盤、釘、銭貨、結縛車、灰釉陶器椀(10世紀代)
	中山52号	残4.6	６世紀前半～６世紀中葉	土師器(杯・高杯)、金属製品(直刀・鏃・刀子・耳環・不明鉄製品)
	中山38号	7.1	７世紀前半～７世紀後半	土師器(杯・高杯)、須恵器(蓋杯・杯蓋・鉢・高杯・提瓶・瓶・長頸壺)、武具、刀子、馬具、耳環、勾玉
	中山53号	残3.7	７世紀前半～７世紀後半	土師器(杯・小形鉢・台付甕)、須恵器(蓋杯・杯蓋)、金属製品(鏃・刀子・耳環)
	中山54号	3.0	７世紀前半～７世紀後半	土師器(高杯?)、須恵器(蓋杯・杯?・蓋)、金属製品(鏃・刀子?)
	中山55号	残4.0	７世紀末	土師器(杯)、須恵器(蓋杯・杯蓋・蓋・平瓶・提瓶・フラスコ瓶・長頸壺・甕)、金属製品(鏃・刀子・釘・耳環)、玉類(勾玉・管玉・臼玉・双孔円板)
	中山61号	2.1	７世紀末	土師器(杯・高杯)、須恵器(杯)、臼玉、骨片
	中山62号	2.6	７世紀末	須恵器(杯・蓋・長頸壺)、骨片
	中山66号	左3.1 右4.0	７世紀末	須恵器(杯・蓋・長頸壺・短頸壺)、骨片
	中山16号	未計測	７世紀末～８世紀前半	土師器(小形甕・甕)、須恵器(杯・長頸壺)、武具、馬具
	中山63号	—	７世紀末～８世紀前半	土師器(甕片)、須恵器(壺片)、骨片
	中山73号	4.7	８世紀初頭～前半	須恵器(杯・蓋・長頸壺)、金属製品(刀子)、玉類(切子玉)、骨片
	中山65号	左2.5 右2.3	８世紀前半	須恵器(杯・蓋・平瓶・長頸壺)
	中山64号	2.6		刀子、鏃、釘、骨片・骨粉
	中山69号	—		骨片
山形村	殿村古墳	9.5	８世紀前半	土師器(杯)、須恵器(杯・蓋・長頸壺・瓶・高杯)、武器(鏃)
塩尻市	櫃ノ神１号	4.0	６世紀中葉	土師器(杯・高杯)、須恵器(蓋・高杯・短頸壺・平瓶・提瓶・壺)、武器(直刀・刀子・鉄鏃)、馬具(轡・鞍・鎧具・留金具)、鋸、装身具(金環・管玉・丸玉・小玉)、人骨
	櫃ノ神２号	6.1	６世紀末～７世紀前半	土師器(杯・壺)、須恵器(蓋杯・短頸瓶)、武器(直刀・刀子・鉄鏃)、装身具(金環・管玉・小玉)
	櫃ノ神３号	—	７世紀中葉	須恵器(蓋杯・瓶)、刀子、勾玉、鍬先

置付けられ、同時期の秋葉原２号墳出土品に類似するものが多い。しかし子持壺や、2010～2012年度出土の波状文を持つ口縁部(第22図３)や脚部(第22図７)、フラスコ形長頸瓶(第22図４)などはより古い年代のものと考えられるため、完掘後に改めて検討を要する。 (神谷・田邉)

（２）須恵器の年代幅

松本平内で須恵器が出土した古墳は、①６～７世紀代の遺物のみが出土した古墳、②８世紀代の遺物のみが出土した古墳、③両時代の遺物が出土した古墳の３種に分類できる。

①には中城原４号墳、鬼の釜古墳、穂高Ａ６号墳・Ｂ23号墳・Ｄ１号墳、潮８号墳、中山38号墳・53号墳・54号墳・55号墳・61号墳・62号墳・66号墳、安塚５号墳、丸山古墳、繩ノ神１号墳・２号墳・３号墳が該当する。これらの古墳では短頸瓶、平瓶、横瓶、提瓶、甕といった器種が多く出土する傾向がある。

②には中山16号墳・63号墳・65号墳・68号墳・71号墳・73号墳、秋葉原１号墳・２号墳、安塚１～４号墳・６～８号墳、殿村古墳が該当する。これらの古墳では先述したような６～７世紀代の古墳で多く出土した器種は減少し、杯や高台付杯といった器種が増加する傾向にある。

③には新郷１号墳、穂高Ｅ６号墳(狐塚３号墳)・Ｇ１号墳(上原古墳)、南方古墳が該当する。このうち、南方古墳では７世紀中葉～後期の平瓶・フラスコ形瓶・甕からなる石室奥壁直下から出土した土器群と、短頸壺・平瓶・脚付長頸壺からなる周溝から出土した土器群、８世紀初頭の有台杯・蓋からなる羨道部から出土した土器群と、有台杯・蓋・高杯・長頸壺からなる羨道部のやや奥の石室内から出土した土器群の４群が区別可能である(松本市教育委員会編1990a)。穂高Ｆ９号墳での本年度の調査では８世紀代のものとみられる須恵器が多く出土したが、過去の調査では６～７世紀代のものとみられる長頸瓶や蓋杯なども出土しており、このことからＦ９号墳は③に該当する古墳と位置づけられる。 (渡辺)

（３）鈴　具

長野県における鈴具の形態を概観すると、５世紀中葉頃の千曲市森２号墳(第21図１)、同３号墳(同２)、６世紀前半の下伊那郡高森町若宮２号墳古墳(同３)からは輪金の頭部がややふくらんだ鉄製の鈴具が出土している。また、６世紀前半の飯田市久保田１号墳からは頭部が環状で脚の短い鞍用の鈴具(同４)が出土している。

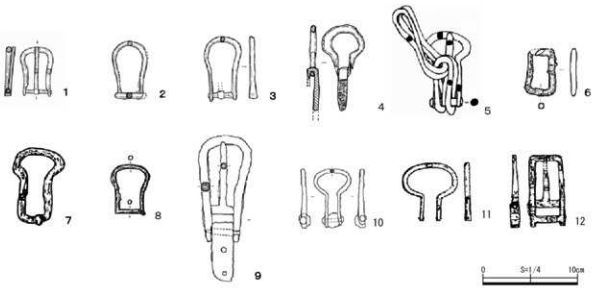
これに対して、今回出土したものに近い、頭部が環状で脚が長い鈴具は６世紀後半の長野市湯谷１号墳(同５)や、６世紀末から７世紀初頭の箕輪町源波古墳(同６・８)、７世紀初頭の松本市鍬形原１号墳(中山15号墳)(同７)、７世紀中頃～７世紀後半の同市南方古墳(円環部は金銅製、同10)などから出土している。源波古墳では、長方形(同６)、頭部がややふくらんでいるもの(同８)、南方古墳ではくびれのないもの(同９)も出土している。

今年度出土した鈴具は全長9.6cmと大型である。一方、上記の諸例では、６世紀まで比較的小型のものが主体であり、７世紀中頃以降になると、大型品が見られるようになる。７世紀後半の課訪市コウモリ塚古墳からも大型鈴具(同11・12)が出土している。 (内田)

（４）鉄　鏃

今年度の調査では、石室内より５点の鉄鏃が出土した。いずれも頸部に棘状関を持ち、鏃身部は片丸造、頸部・茎部断面は方形の長頸鏃である。鏃身部から茎部まで遺存している３点は角関の鏃身部をもち、全て同一規格であることが推測される。頸部棘状関の長頸鏃は６世紀後半にほぼ全国的に出現し、長頸鏃は７世紀を過ぎると鏃身部が無関またはナデ関化するとされていることから(水野2013)、今年度出土の鉄鏃は６世紀後半前後に製作された可能性が高い。

なお、穂高Ｅ７号墳からも、片丸造で棘状関を持ち、頸部断面が方形を呈する鉄鏃が出土しているが(桐原1991)、鏃身部がナデ関であることや頸部長が短いため、Ｆ９号墳出土例より後出するものと思われる。また詳細な出土地は不明だがＥ群より雁股式鉄鏃、Ｂ群よりナデ関三角形式と無形五角形式の鉄鏃が出土している(穂高町・穂高町教育委員会編1989)。Ｆ９号墳出土の鉄鏃に類似する型式の鉄鏃は、例えば長野市大室224号墳(第24図１、大塚・小林編2006)、千曲市森６号墳(同２、森将軍塚古墳発掘調査団編1992)から出土しているが、穂高古墳群の他の支群や、松本平の後期古墳では認められなかった(第９表)。このように、同じ盆地内でも型式差



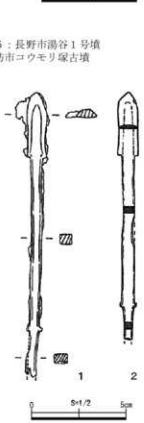
第23図　長野県出土鉸具実測図

1：千曲市森２号墳　2：森３号墳　3：高森町若宮２号墳　4：飯田市久保田１号墳　5：長野市湯谷１号墳
6・8：筑輪町源波古墳　7：松本市中山15号墳　9・10：松本市南方古墳　11・12：諏訪市コウモリ塚古墳

第９表　松本平における鉄鏃身部平面の変異

古墳名	柳葉形				三角形	長三角形	五角形	圭頭	腰殺	片刃
	角関	ナデ関	鎬抉関	山形関						
穂高E７号墳		棘状								
穂高Ｆ９号墳	**棘状**									
穂高B群					○					
穂高E群									○	
丸山古墳		欠損	欠損			○				
秋葉原２号墳					○			○		
中山52号墳		台形					○			
中山38号墳					○					
中山53号墳										
中山54号墳	台形	無関								
中山55号墳					○			○		
中山56号墳							○			
坪ノ内１号墳					○					
柏木古墳					○					○
稲荷山２号墳				無関	○					
南方古墳		欠損			○		○	○		○
纏ノ神１号墳		台形					○			
纏ノ神２号墳		台形								
宗賀２号墳	無関	台形				○	○			○

※柳葉形は頭部関の形状を細分した



第24図　鉄鏃類例実測図

1：長野市大室224号墳
2：千曲市森将軍塚６号墳

が如実に表れており、離れた地域に同型式の鉄鏃が存在する例がある。

（5）刀　子

今年度調査において報告した刀子３点はいずれも棟部と刃部に関をもつ両関式刀子と思われる。2012年度調査でも３点の刀子を報告しており、うち１点はほぼ完形の両関式刀子であり茎部に木質が残っていた（第22図８～10）。他１点にも刀身部に木質が残っており、鞘と柄は木製であったと考えられる。今年度出土の刀子から木質を確認することはできなかったが、両関式刀子であることや2012年度出土の完形品と今年度の茎部残存品は法量が近いことから寸法より本年度刀子も木製の鞘と柄を備えていた可能性が考えられる。両関式刀子は古墳時代中

期後半の「前方後円墳集成編年」(広瀬1992)の７・８期(５世紀後半～６世紀初頭)から出現する型式である(野島2013)。後期後半以降になると鋸をもつものや刃関よりも棟関が大きくなるものが増えるが(野島2013)、今年度出土の刀子にはその特徴は見られない。 (藤好)

(６)玉　類

本年度調査で勾玉と管玉が各１点、2011年度と2012年度に切子玉が計２点出土している。

勾玉は長野県内において古墳時代後期以降片面穿孔が主流となり、瑪瑙が主材で、その形も「コ」の字形となり、断面も扁平化して隅丸長方形となっている(岩崎1988)。これらは今回出土した勾玉の特徴と重なる。類似例として、穂高Ｅ６号墳より出土した長さ3.2㎝、幅1.1㎝、厚さ0.9㎝で片面穿孔の瑪瑙製勾玉、穂高Ｇ１号墳より出土した長さ3.3㎝、幅1.83㎝、厚さ0.95㎝の瑪瑙製勾玉があげられる(第８図３、三木1991、穂高町教育委員会編2001a)。この形式は山陰地方において古墳時代後期に主流となっていた形式に属すると考えられる。

管玉は、碧玉など緑色の石を使った円筒形の玉で、当初は両側から穿孔していたが、５世紀後葉頃には片面穿孔が主流となる(岩崎1988)。今年度の調査で出土した管玉は碧玉製で、側面形は正円筒形あり、片面穿孔である。類似例として、穂高Ａ６号墳(大養塚古墳)より出土した長さ2.99㎝、径1.33㎝で片面穿孔の碧玉製管玉があげられる(第７図１、岩崎・松尾・松村1983)。

切子玉は主に水晶製で後期古墳から集中的に出土する。通常は六角形だが、四～八角形のものもある(岩崎1988)。2011・2012年度に出土した切子玉は、ともに水晶製で六角形であり、片面穿孔である。類似例として、穂高Ｅ６号墳より出土した長さ約2.5㎝、幅約1.5㎝で片面穿孔の水晶製切子玉、穂高Ｇ１号墳より出土した長さ約2.4㎝、幅約1.4㎝で片面穿孔の水晶製切子玉、南方古墳より出土した長さ2.4㎝、幅1.5㎝で片面穿孔の水晶製切子玉があげられる(岩崎・松尾・松村1983、松本市教育委員会編1990a、三木1991)。これらはいずれも六角形である。

松本平の主要古墳(第８表)においては、それぞれの玉類が個々に出土している古墳の年代は６世紀中葉～８世紀代であるが、穂高Ａ６号墳・Ｂ23号墳・Ｅ６号墳・Ｇ１号墳、丸山古墳では、勾玉・管玉・切子玉の３種が揃って出土する。このうち時期の限定されているＡ６号墳・Ｂ23号墳は６世紀後半であり、Ｅ６号墳・Ｇ１号墳・丸山古墳は６世紀中頃～８世紀前葉と時期幅がみられる。 (新川・福嶌)

第３節　小　結

三木弘氏は、穂高古墳群の形成に関して、まず、ＴＫ43型式の須恵器を出土しているＡ６号墳・Ｂ23号墳・Ｄ１号墳・Ｅ６号墳・Ｇ１号墳が６世紀後葉に築造され始め、７世紀に入っても築造が継続していたとみている(三木2011)。古墳築造の最終時期は不明であるが、Ｆ群は相対的に新しいとの認識があり、小型石室をもつＦ１号墳の年代を７世紀中葉とみている。また追葬が８世紀代に入っても行われていたことが明らかになっている(三木1991)。

穂高古墳群Ｆ９号墳の今年度調査で出土した鉄鏃は６世紀後半に位置付けられるが、同時期の製作が推定される須恵器は、子持壺(第16図12・13、第22図２)の小器破片が出土しているのみであり、なお資料不足の感が否めない。他には、ＴＫ209型式のフラスコ形長頸瓶(第22図４)があり、７世紀前半の中頃には古墳の使用が認められる確実な最古の須恵器である。さらに、今年度調査で検出した土器集中区の須恵器はいずれも８世紀前半と考えられる。

本章では、Ｆ９号墳の使用された時期範囲を６世紀後半から８世紀代の間にひとまず求め、同時代の副葬品を出土する古墳における遺構・遺物について検討を加えて、今後の調査にむけての整理を行った。抽出範囲は穂高古墳群の所在する長野県松本平に限ったが、長野県全体や隣接する地域にまで範囲を広げてその類例を求める必要がある。 (尾上)

第Ⅵ章　おわりにあたって

2009年から始まった國學院大學考古学研究室による長野県安曇野市穂高古墳群Ｆ９号墳の発掘調査は、2013年度で第５次調査を迎えた。今年度の調査では、Ｆ９号墳の石室構造を解明するため前年度に引き続き第Ⅰトレンチの掘り下げを行った。また、周溝の有無を確認し古墳の規模や墳丘の築造方法を確認するため、新たに第Ⅲトレンチを設定した。

今回発掘調査に参加した実習生の多くは考古学調査の経験がなかった。実習までの期間は、毎週木曜日の考古学調査法の授業と毎週土曜日の勉強会を利用し、現場で滞りなく調査を行えるように準備を進めていった。考古学調査法の授業では、調査に使用される機材の使用方法、図面の書き方などを学んだ。また、勉強会では古墳時代についての基礎知識や穂高古墳群をはじめとした調査地付近の遺跡の概要などを発表し合い、実習生同士の知識の向上をはかった。さらに、現場を想定しての機材練習を繰り返し行い、機材に慣れる時間をつくっていった。こうして迎えた実習であったが、初めての現場での作業ということもあり、練習との勝手の違いに戸惑った。だが、先生方や先輩方からアドバイスを頂きながら実習生同士声を掛け合うことで、自分のするべきことを確認しながら作業を進めていくことができた。調査時は天候にめぐまれた日が多く、作業が順調に進んだ。また、公園内も賑わっており、現場を見学していく方には実習生なりに現場の説明や出土遺物の紹介などを行った。地元の方々や公園を訪れる人々をはじめとする多くの人に、穂高古墳群のもつ歴史的意義を正しく伝え、より良く文化財を保存していくことへの理解を求めていく大切さを感じることができた。

調査後は毎週木曜日や土曜日を作業日とするほか、各自授業などの合間を縫って整理作業や報告書の作成にあたり、図面の整理・製作、出土遺物の接合・実測・拓本・撮影、原稿執筆などを行った。月に一度は各自が執筆した原稿を実習生同士で読み合わせ、先生方や先輩方からもアドバイスを頂きながら意見交換を行い、原稿に修正を加えていった。就職活動や授業など、日々大学生活を送る中で時間を捻出することが困難なときもあったため、作業が思うように進まないこともあった。不安や焦りが募るときもあったが、実習生同士で励まし合い、考古学実習室に足を運ぶことで、ここに報告書の完成をみることができた。

今年度調査の結果、課題であった周溝の有無は確認できなかったが、石室前庭部と第Ⅲトレンチで基盤層と考えられる層を検出することができた。また、須恵器・土師器・馬具・鉄鏃・鉄製刀子・勾玉・管玉が出土し、その中には前年度までに出土した遺物と接合するものもあった。須恵器など、古墳の使用年代に関わる副葬品が多数出土したことは穂高古墳群の研究をする上でも大きな成果であったといえる。今年度の調査は長野県の埋蔵文化財情報誌『信州の遺跡』第４号にも最新調査成果として報告されている。

来年度以降の調査では、石室内部の全貌を明らかにするとともに、今回の調査で確認ができなかった古墳の築造方法を把握することが課題になる。

最後になりましたが、調査準備から報告書の刊行に至るまで、終始多大なお力添えとご指導を頂いた先生方、先輩方、そして今回の調査でご支援をくださいました全ての方々に厚くお礼を申し上げます。　（神谷）

引用・参考文献

青木　敬　2004 「横穴式石室と土木技術」『古墳文化』創刊号　國學院大學古墳時代研究会、61-82頁

明科町教育委員会編　1991 「ほうろく屋敷遺跡－川西地区県営場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－」明科町の埋蔵文化財第３集

1994 「長野県東筑摩郡明科町遺跡詳細分布調査報告書　明科町の遺跡」明科町の埋蔵文化財第４集

1995 「上生野遺跡」明科町の埋蔵文化財第５集

1997 「塩田若宮遺跡」明科町の埋蔵文化財第10集

2000 「明科廃寺址」明科町の埋蔵文化財第７集

2001 「ほうろく屋敷遺跡Ⅳ－個人住宅建築工事に伴う第4次緊急発掘調査報告書－」明科町の埋蔵文化財第11集

2002 「栄町遺跡－「子どもと大人の交流学習施設」建設に伴う緊急発掘調査報告書－」明科町の埋蔵文化財第６集

2005 「潮神明宮前遺跡Ⅱ－町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書－」明科町の埋蔵文化財第13集

朝日村教育委員会編　2003 「熊久保遺跡第10次発掘調査報告書」朝日村文化財調査報告書第１集

安曇野市教育委員会編　2006 「東小倉遺跡Ⅴ」安曇野市の埋蔵文化財第１集

2009 「三枚橋・藤塚遺跡　安曇野市穂高交流学習センター建設工事に伴う埋蔵文化財報告書」安曇野市の埋蔵文化財第２集

2010a 「安曇野市埋蔵文化財包蔵地図」

2010b 「ハツ口遺跡・藤塚遺跡」安曇野市の埋蔵文化財第３集

2011 「塩田若宮遺跡（第２次）」安曇野市の埋蔵文化財第４集

2012a 「平成22年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書」安曇野市の埋蔵文化財第５集

2013 「平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書　明科遺跡群古殿屋敷（第１次）　明科遺跡群栄町遺跡（第３次）」安曇野市の埋蔵文化財第６集

飯島哲也　2010 「信濃」『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣、83-98頁

飯田市教育委員会編　1994 「代田山狐塚古墳の測量調査」

飯田市上郷考古博物館編　1995 「秋季展示　探訪　伊那谷の古墳」

1997 「特別展　伊那谷の馬科野の馬　古墳時代における受容と広がり」

池田町教育委員会編　1977 「鬼ノ釜古墳発掘調査報告書」

石部正志　1980 「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』第４巻　学生社、370-402頁

一瀬和夫　2012 「古墳群と群集墳」『古墳時代の考古学２　古墳出現と展開の地域相』同成社、32-46頁

伊那市教育委員会編　1999 「信濃の牧・春近領・宿場」新樂社

今井眞樹　1933 「穂高町上原の竪穴式石室郷古墳」『史跡名勝天然記念物調査報告書』第44輯　長野県・長野県教育委員会、64-66頁

岩崎卓也　1988 「装身具」『長野県史』考古資料編（４）　長野県史刊行会、219-230頁

岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁　1983 「有明古墳群の再調査」『信濃』第35巻11号　信濃史学会、32-60頁

上田市立信濃国分寺資料館編　2005 「信濃の古代・中世の仏教文化と関連遺跡」

2007 「古代信濃の文字」

大池千尋　1991 「位置・地形・地質」『堀金村誌』　堀金村誌刊行会、20-26頁

大沢和夫　1983 「兼清塚古墳・塚原二子塚古墳」『長野県史』考古資料編（３）　長野県史刊行会、1131-1138頁

太田伯一郎　1923 「第三章第三節　遺跡（古墳）」『南安曇郡誌』（旧版）　南安曇郡教育會、211-231頁

大場磐雄　1949 「信濃国安曇族の考古学的一考察」『信濃』第１巻第１号　信濃史学会、1-7頁

大場磐雄・原嘉藤　1961 「長野県塩尻市柴宮発見の銅鐸」『信濃』第13巻第4号　信濃史学会、2-20頁

大町市教育委員会編　1979 「借馬遺跡Ⅰ」

1980 「借馬遺跡Ⅱ」

1981 「借馬遺跡Ⅲ　追分遺跡　前田遺跡　南原遺跡」

1985 「借馬遺跡・花見遺跡Ⅳ」大町市埋蔵文化財発掘調査報告書第９集

1988 「大町の遺跡」大町市埋蔵文化財調査報告書第13集

1990 「長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書　一津遺跡」大町市埋蔵文化財発掘調査報告書16集

1992 『長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書　中城原遺跡』大町市埋蔵文化財調査報告書第20集
大町市史編纂委員会編　1985 『大町市史』第二巻　原始・古代・中世編
尾川秀吉　1991 「気候」『穂高町誌』自然編　穂高町誌刊行会、91頁
各務原市教育委員会編　1984 『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市資料調査報告書第４号
各務原市埋蔵文化財調査センター編　1998 『須衛天狗谷古墳群・天狗谷窯址群発掘調査報告書』各務原市文化財資料調査報告書第23号
2005 『野口廃寺Ｃ・Ｄ地区発掘調査報告書』各務原市文化財資料調査報告書第42号
河西清光・松尾昌彦　1984 「穂高古墳群」『長野県史』考古資料編（３）　長野県史刊行会、219-230頁
風間栄一　2011 「研究ノート　長野県における古墳時代の画期について」『帝京大学山梨文化財研究所報』第51号　帝京大学山梨文化財研究所、10-12頁
春日賢一　1921 「北安曇郡に於ける古墳」『信濃教育』第417号　信濃教育會事務所、18-22頁
岐阜市教育委員会編　1981 「老洞古窯跡群発掘調査報告書」
桐原　健　1970 「信濃における古墳出土の鉄剣」『信濃』第22巻第４号　信濃史学会　315-326頁
1983a「中山古墳群」『長野県史』考古資料編（３）　長野県史刊行会、262-271頁
1983b「松本市中山の古墳、古墳群－既掘古墳記録と中山考古館収蔵資料の提示－」『長野県考古学会誌』第45号　22-45頁
1991 「第二章第三節　古墳時代」『穂高町誌』第２巻歴史編上・民俗編　穂高町誌刊行会、57-99頁
1992 「信濃に観る横穴式石室墳最終末の姿相」『長野県考古学会誌』67号　長野県考古学会、39-51頁
1996 「第二編第二章第一節　弘法山古墳の時代」『松本市史』第２巻歴史編Ⅰ　松本市、300-313頁
2002 「明科廃寺が提起する問題」『信濃』第54巻第12号　信濃史学会、55-61頁
2011 「長地・コウモリ塚古墳出土の馬具一式」『長野県考古学会誌』第137号　長野県考古学会、10-15頁
桐原健・樋口昇一　1996 『日本の古代遺跡　長野』保育社
弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編　1978 「弘法山古墳長野県松本市弘法山古墳調査報告」松本市教育委員会
國學院大學文学部考古学研究室編　2010 「長野県安曇野市穂高古墳群2009年度墳丘測量調査・現状確認調査報告書」國學院大學文学部考古学実習報告第44集
2011 「長野県安曇野市穂高古墳群2010年度発掘調査報告書」國學院大学文学部考古学実習報告第45集
2012 「長野県安曇野市穂高古墳群2011年度発掘調査報告書」國學院大学文学部考古学実習報告第46集
2013 「長野県安曇野市穂高古墳群2012年度発掘調査報告書」國學院大学文学部考古学実習報告第48集
小平和夫　1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４　総論編』長野県埋蔵文化財センター、97-158頁
小松虔・神沢昌二郎　1983 「安塚古墳群」『長野県史』考古資料編（３）　長野県史刊行会、272-278頁
近藤義郎　1952 「佐良山古墳群の研究」津山市
佐藤甚信　1983 「妙前大塚古墳」『長野県史』考古資料編（３）　長野県史刊行会、1119-1126頁
笹沢　浩　1988 「古代の土器」『長野県史』考古資料編（４）　長野県史刊行会、257-351頁
猿田文紀　1931 「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『信濃考古学会誌』第２年第５・６輯　信濃考古学会、168-171頁
1933 「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯　長野県・長野県教育委員会、61-81頁
塩入秀敏　1994 「長野県の馬具副葬古墳について」『長野県考古学会誌』第74号　長野県考古学会、1-22頁
塩尻市教育委員会編　1980 「史跡平出遺跡遺構確認調査報告者－昭和54年度－」
1981 「史跡平出遺跡遺構確認調査報告書－昭和55年度－」
1982a「史跡平出遺跡遺構確認調査報告書－昭和56年度－」
1982b「舅屋敷－長野県塩尻市舅屋敷遺跡発掘調査報告書－」
1983a「丘中学校遺跡－塩尻市丘中学校改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－」
1983b「史跡平出遺跡－昭和57年度発掘調査報告書－」
1985 「堂の前・福沢・青木沢　塩尻東地区県営圃場整備事業発掘調査報告書－昭和59年度－」
1986a「史跡平出遺跡－環境整備報告書－」
1986b「長野県塩尻市俎原遺跡発掘調査概報」
1986c「繩ノ神・梨木沢・砂田　塩尻東地区県営圃場整備発掘調査報告書」

1986d『吉田川西遺跡　吉田長畝土地区画整理事業発掘調査報告書』
1987a『史跡平出遺跡－昭和61年度県営かんがい排水事業中信平地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－』
1987b『田川端・宗張－塩尻東地区県営圃場整備発掘調査報告書－』
1988 『和手遺跡－塩尻市市道和手北線道路新設改良工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－』
1991 『菖蒲沢窯跡発掘調査報告』
1992 『丘中学校遺跡－塩尻市丘中学校改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－』
1994 『矢口・唐沢南遺跡発掘調査報告書』
1995 『東山・下り坂遺跡－市民いこいの森整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』
1996 『和手遺跡－高出和手共同事業用地造成工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－』
1998 『下境沢遺跡－片丘住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
2002 『女夫山ノ神・生売沢・鷲ヶ沢遺跡－今泉南テクノヒルズ基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
2004 『史跡平出遺跡－平成14年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る発掘調査報告書－』
2006 『史跡平出遺跡－平成16年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る発掘調査概報－』
2009 『史跡平出遺跡－平成19年度史跡等総合整備活用推進事業に係る発掘調査報概報－』
2010 『史跡平出遺跡－平成20年度史跡等総合整備活用推進事業に係る発掘調査報概報－』
塩尻市誌編纂委員会編　1995 『塩尻市誌』第２巻歴史編
重野昭茂　2007 「自然環境による安曇野古代烏川扇状地の開発」『信濃』第59巻第３号　信濃史学会、39-59頁
信濃史料刊行会編　1956 『信濃史料』第１巻上　信濃史料刊行会
白石太一郎　1966 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考－河安高安千塚および平尾山千塚を中心として－」『古代学研究』第42・43合併号　古代學研究會、33-64頁
鷹野秀広　1890 「信濃原有明村／古墳」「東京人類學會類誌」第５巻52號　東京人類学會、317-318頁
辰巳和弘　1983 「密集型群集墳の特質とその背景－後期古墳論Ⅰ－」『古代学研究』第100号　古代学研究会、10-18頁
千曲川水系古代文化研究所編　1980 「編年－中部高地における型式－旧石器・縄文・弥生編」信毎書籍出版センター
東京国立博物館編　1956 「東京国立博物館収蔵品目録(考古　土偏　法隆寺献納宝物)」
1997 「東京国立博物館　須恵器集成Ⅱ(東日本編)」
鳥羽英継　2013 「信濃における須恵器生産の動向」『長野県考古学会誌』第145・146号　長野県考古学会、45-100頁
豊科町教育委員会編　1992 「吉野町館跡遺跡　県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」
豊科町教育委員会・豊科町東山遺跡調査会編　1999 「筑摩東山上ノ山・菖浦平窯跡群発掘調査報告書」
豊科町郷土博物館編　1999 「土器づくりのムラを掘る－上ノ山窯跡群・菖蒲沢窯跡群の発掘調査－」
鳥居龍蔵　1925 「豊科町より」『有史以来の跡を尋ねて』雄山閣、126-129頁
直井雅尚　1994 「松本市安塚・秋葉原古墳群の再検討」『中部高地の考古学Ⅳ　長野県考古学会30周年記念論文集』長野県考古学会、277-305頁
直井雅尚・原明芳　1987 「松本平における様相」『長野県考古学会誌』第55・56号　長野県考古学会、51-73頁
中島豊晴　1976 「穂高町塚原Ｆ１号墳調査概報」『長野県考古学会誌』第25号　長野県考古学会、55-57頁
長野県教育委員会編　1969 「昭和42年度国鉄複線化等関発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書」
長野県文化財保護協会編　1976 「上原」
長野県編　1981 「１　遺跡地名表　Ⅴ　長野県市町村別・時代別遺跡数一覧表」『長野県史』考古資料編(１)　長野県史刊行会、626-631頁
1988 「長野県史」考古資料編(４)　長野県史刊行会、524-553頁
長野県埋蔵文化財センター編　1989 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３－塩尻市内その２－吉田川西遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書２
1990a「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書６－松本市内その３－下神遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書６
1990b「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書７－松本市内その４－南栗遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書７
1990c「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書８－松本市内その５－北栗遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書８
1993 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11　明科町内２　北村遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14

1997 『国営アルプスあずみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書１－穂高古墳群－近世集石遺構の調査』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23
2003 『国営アルプスあずみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書２－大町市内その１－山の神遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書60
2005 『安曇野農業水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書－三郷村内－三角原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76
長野市教育委員会編　1981 『湯谷古墳群　緊急発掘調査報告書』
西嶋定生　1961 『古墳と大和政権』『岡山史学』第10号　岡山史学会、154-207頁
仁科良夫　1991 『地形と地質』『穂高町誌』自然編　穂高町誌刊行会、11-18頁、37-38頁、46-48頁
野毛大塚古墳調査会編　1999 『野毛大塚古墳　第１分冊　本文編』世田谷区教育委員会
野島　永　2013 『鉄製農工漁具』『古墳時代の考古学４　副葬品の型式と編年』同成社、136-145頁
原田　曦　1985 『第１編第４章第２節　大町市の古墳』『大町市史』第２巻原始・古代・中世　大町市、136-144頁
広瀬和雄　1992 『第１部第３章　前方後円墳の徴内編年』『前方後円墳集成　近畿編』山川出版社、24-26頁
東筑摩郡松本市・塩尻市郷土資料編纂会編　1984 『東筑摩郡松本市・塩尻市誌』第２巻上　信毎書籍出版センター
平出遺跡調査会編　1955 『平出　長野県宗賀村古代集落遺跡の総合研究』朝日新聞社
藤沢宗平　1968 『第四章　古墳文化とそれ以降の文化』『南安曇郡誌』第２巻上　南安曇郡誌改訂編纂会、90-140頁
文化庁文化財保護部編　1983 『全国遺跡地図　長野県』
穂高町教育委員会編　1970 『穂高町の古墳』柳沢書苑
1972 『長野県南安曇野郡穂高町離山遺跡発掘調査報告書』
1987 『穂高町矢原遺跡群(馬場街道遺跡)』
2001a 『一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡　穂高沢水系による開発沢、上原古墳』
2001b 『穂高町他谷遺跡』
穂高町誌編纂委員会編　1991 『穂高町誌』第２巻歴史編上・民俗編　穂高町誌刊行会
穂高町・穂高町教育委員会編　1989 『穂高町の古墳とその人々』
本郷村教育委員会編　1966 『信濃浅間古墳』
松尾昌彦　1983 『鉄地金銅張・銀張の鏡板・杏葉を中心として－』『長野県考古学会誌』第45号　長野県考古学会、26-49頁
松川村教育委員会編　1968 『有明山社』
松川村村誌編纂委員会編　1988 『松川村誌』歴史編
松本市教育委員会編　1972 『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書　昭和45年』
1979 『松本市新村安塚古墳群発掘調査報告書』松本市文化財調査報告書No.16
1983 『松本市新村秋葉原遺跡』松本市文化財調査報告書No.26
1984 『松本市下神・町神遺跡－緊急発掘調査報告書－』松本市文化財調査報告No.29
1985 『松本市島立南梨・北梨遺跡　高綱中学校遺跡、条里的遺構－緊急発掘調査報告書－』松本市文化財調査報告　No.35
1986a 『松本市島立南梨遺跡－緊急発掘調査報告書－』松本市文化財調査報告No.38
1986b 『松本市宮淵本村遺跡』松本市文化財調査報告書No.45
1987a 『松本市島立北梨遺跡・条里的遺構』松本市文化財調査報告No.48
1987b 『松本市宮淵本村遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告書No.52
1988a 『松本市向畑遺跡Ⅰ－県道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書－』松本市文化財調査報告No.60
1988b 『松本市林山腰遺跡』松本市文化財調査報告No.61
1989a 『松本市千鹿頭北遺跡』松本市文化財調査報告書No.69
1989b 『松本市下神遺跡』松本市文化財調査報告No.72
1989c 『松本市神田遺跡－体育は場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』松本市文化財調査報告書No.73
1989d 『松本市宮淵本村遺跡Ⅲ』松本市文化財調査報告書No.77
1989e 『松本市向畑遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.81
1990a 『松本市大塚古墳・南方古墳・南方遺跡』松本市文化財調査報告No.74
1990b 『松本市坪ノ内遺跡』松本市文化財調査報告No.80
1990c 『向畑遺跡Ⅲ』松本市文化財調査報告No.83
1990d 『松本市北梨遺跡Ⅳ・Ⅴ』松本市文化財調査報告No.85

1991a『針塚古墳の発掘』
1991b『松本市里山辺薄町・石上・鎌田遺跡　県営は場整備事業に伴う緊急発掘調査概報』松本市文化財調査報告No.91
1992 『松本市堀の内遺跡』松本市文化財調査報告No.93
1993a『松本市山影遺跡』松本市文化財調査報告書No.100
1993b『松本市針塚遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告書No.102
1993c『松本市大村古屋敷遺跡・前田遺跡』松本市文化財調査報告No.103
1993d『松本市里山辺丸山古墳』松本市文化財調査報告書No.104
1993e『松本市小原遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.107
1993f『松本市百瀬遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告書No.108
1993g『松本市北栗遺跡』松本市文化財調査報告No.109
1993h『弘法山古墳出土遺物の再整理－新発見資料を中心とした土器とガラス製小玉の整理』松本市文化財調査報告No.111
1994a『平田本郷遺跡緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.113
1994b『出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告書No.115
1995 『松本市平田本郷遺跡Ⅱ緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.119
1996 『小原遺跡３　緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.123
1997a『小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡』松本市文化財調査報告No.126
1997b『エリ穴遺跡』松本市文化財調査報告No.127
1997c『県町遺跡Ⅺ　緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.128
1998 『長野県松本市境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』松本市文化財調査報告No.130
1999 『長野県松本市出川西遺跡Ⅵ緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告書No.135
2000a『芝沢遺跡Ⅰ・Ⅱ、南栗遺跡Ⅳ・Ⅴ緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告書No.145
2000b『長野県松本市大輔原遺跡』松本市文化財調査報告書No.146
2000c『松本市出川南遺跡Ⅷ』松本市文化財調査報告書No.157
2001 『松本市百瀬遺跡Ⅳ』松本市文化財調査報告No.151
2002a『松本市出川南遺跡Ⅹ Ⅱ』松本市文化財調査報告書No.158
2002b『長野県松本市堀の内遺跡Ⅲ緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.164
2003a『長野県松本市平田本郷遺跡Ⅳ・Ⅴ緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.166
2003b『中山古墳群・鍬形原遺跡・鍬形原砦址－中山霊園拡張に伴う第Ⅰ～Ⅳ次発掘調査報告書－』松本市文化財発掘調査報告書No.168
2003c『長野県松本市桜ケ丘古墳　再整理報告書』松本市文化財調査報告No.170
2004a『長野県松本市高宮遺跡Ⅲ』松本市文化財調査報告書No.172
2004b『長野県松本市高宮遺跡Ⅳ緊急発掘報告書』松本市文化財調査報告書No.173
2004c『中山古墳群・鍬形原遺跡・鍬形原砦址』松本市文化財調査報告No.175
2008 『中山古墳群14・15　カニホリ東西遺跡』松本市文化財調査報告書No.196
2011 『松本市出川南遺跡』松本市文化財調査報告書No.207
松本盆地団体研究グループ編　1977 「松本盆地の第四期地質－松本盆地の形成過程にかかわる研究（３）－」『地質学論集』第14号　日本地質学会、93-102頁
右島和夫　2012 『群集墳』『社会・政治構造及び生産流通研究』同成社、315-353頁
三木　弘　1990 『魏石鬼窟古墳を利用した修験道』『穂高町郷土資料館』第12号　穂高町郷土資料館、1-8頁
1991 『有明古墳群の再検討（１）』『信濃』第43巻第12号　信濃史学会、14-30頁
2006 『有明古墳群の再検討（２）－魏磯域古墳の再考を通じて－』『長野県考古学会誌』118号　長野県考古学会、179-193頁
2011 『古墳社会と地域経営』学生社
三木弘・寺島俊郎・西山克己　1987 「長野県安曇野郡穂高町所在魏石鬼窟古墳について」『信濃』第39巻第５号　信濃史学会、385-407頁
三郷村教育委員会編　2003 『東小倉遺跡Ⅲ』三郷村の埋蔵文化財第5集
2005 『東小倉遺跡Ⅳ』三郷村の埋蔵文化財第6集
水野敏典　2009 『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』奈良県立橿原考古学研究所

2013 「金属製品の型式学的研究⑤鉄鏃」『古墳時代の考古学４　副葬品の型式と編年』同成社、63-71頁
水野正好　1970 「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本５　近畿』角川書店、195-212頁
1975 「群集墳の構造と性格」『古代史発掘６　古墳と国家の成り立ち』講談社、143-158頁
箕輪町教育委員会編　1987 「源波古墳遺跡」
宮坂光次　1922 「信州南安曇群有明村ドルメン類似の古墳に就いて」『人類学雑誌』第37巻第９号　東京人類學會、299-304頁
宮代栄一　1997 「島根県上島古墳出土馬具の再検討」『島根県考古学会誌』第14集　島根考古学会、61-89頁
向坂鋼二　1964 「古墳群の群別に関する概念規定」『考古学手帖』21　塚田光、7-8頁
百瀬新治　2012 「明科廃寺のなぞに迫る　安曇野市豊科郷土博物館」『長野県の埋蔵文化財情報誌　信州の遺跡』第４号　長野県埋蔵文化財センター、５頁
2014 「明科廃寺研究の今日的意義と今後の課題－博物館講座「安曇野歴史散歩」の実践を通して－」『安曇野市豊科郷土博物館紀要』第１号　安曇野市豊科郷土博物館、29-46頁
森岡秀人　1989 「群集墳の形成」『古代を考える　古墳』吉川弘文館、207-245頁
森浩一・石部正志　1962 「後期古墳の討論を回顧して」『古代学研究』第30号　古代学研究会、1-6頁
森将軍塚古墳発掘調査団編　1992 『史跡森将軍塚古墳－保存整備事業発掘調査報告書－』更埴市教育委員会
安村俊史　2005 「群集墳の終焉」『終末期古墳と古代国家』吉川弘文館、89-111頁
2008 「群集墳と終末期古墳の研究」清文堂
山形村教育委員会編　1971 『三夜塚遺跡　県営圃場整備事業東筑摩郡山形村竹田地区緊急発掘調査報告書』山形村遺跡発掘調査報告書第３集
1972 『神明遺跡・三夜塚遺跡　県営圃場整備事業東筑摩郡山形村竹田地区緊急発掘調査報告書』山形村遺跡発掘調査報告書第４集
1987 『殿村遺跡』山形村遺跡発掘調査報告書第６集
1997 『淀の内遺跡』山形村遺跡発掘調査報告書第７集
2001 『淀の内遺跡Ⅳ』山形村遺跡発掘調査報告書第11集
2002 『三夜塚遺跡Ⅲ』山形村遺跡発掘調査報告書第12集
2009 『下原遺跡・三夜塚遺跡Ⅳ』山形村遺跡発掘調査報告書第15集
2010 『三夜塚遺跡Ⅴ』山形村遺跡発掘調査報告書第18集
和田晴吾　1992 「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本５　近畿１』角川書店、324-350頁
渡辺博人　1984 「美濃須衛古窯跡群における須恵器編年」『美濃須衛古窯跡群発掘調査報告書』各務原市教育委員会、39-62頁
2008 「美濃須衛窯について」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会、495-514頁

発掘調査参加者・関係者一覧

2013年度考古学実習生

浅川尊裕・麻生浩史・内田はるか・尾上周平・神谷まゆ・小林拓真・新川実里・鈴木広人・鳥我井亮太・田中哲也・田邉慧美里・富山悠加・長嶋幹也・福嶌彩子・藤好史都・松井勇樹・三輪鈴音・村山　武・森野　稔・渡辺悠樹

発掘特別参加者

太田哲平・岡山亮子・小松﨑百恵・酒匂喜洋・鈴木志穂・曽我真実子・鳥海朱里・中川幹啓・馬場羽瑠桂・吉澤花織(以上國學院大學学生)・淺海莉絵・朝倉一貴・有福小百合・岩井優莉佳・大日方一郎・加藤大二郎・北澤宏明・日野正祥・松政里奈・劉　菲(以上國學院大學大学院生)・久我谷渓太(東京大学大学院)・蔵野泰洋(流山市教育委員会)・小林青樹(國學院大學栃木短期大学)・山口　晃(船橋市教育委員会)・位田英騎・上田　翼(以上國學院大學卒業生)

調査協力機関・協力者

国土交通省関東地方整備局国営アルプスあづみの公園事務所・アルプスあづみの公園管理マネジメント共同体・長野県教育委員会・安曇野市教育委員会・安曇野市穂高郷土資料館・安曇野市豊科郷土博物館・エソール安曇野(ＡＩＤ保養所)・長野市教育委員会・長野県埋蔵文化財センター・長野県立歴史館・松本市教育委員会・松本市考古博物館・あづみの公園歴史愛好会・公益財団法人山梨文化財研究所・株式会社奥原造園・株式会社市民タイムス・国際文化財株式会社・渋谷氷川神社

青木　敬・荒井裕介・池田榮史・石井　匠・石橋　宏・石守　晃・伊藤慎二・稲田美里・内川隆志・内堀　団・太田圭郁・大堀皓平・岡崎裕子・小沢美和子・片山拓介・加藤里美・風間栄一・上條信彦・桐原　健・櫛原功一・後藤雅彦・小林信一・小林理恵・坂本　彰・櫻井秀雄・笹生　衛・芝竜太郎・島田哲男・十田一秀・椙山林繼・鈴木　稔・関　広克・高梨友子・高野晶文・武田芳雅・竹明　昇・田中由紀夫・土屋和章・戸田千晩・直井雅尚・那須野雅好・波形早季子・成田　裕・西　香子・西木豊弘・原　智之・菱田京子・平林　彰・広瀬昭弘・藤野豊國・船越洋二・古谷　毅・三木　弘・百瀬新治・守谷健吾・山下泰永・山田真一

付表　安曇野市域の古墳の一覧

古墳群	古墳名	墳丘		石室			武器			馬具					装身具	
		墳径	墳高	長	幅	高	直刀	鏃	その他	轡	鐙	杏葉	留金具	飾金具	金環	その他
穂高古墳群	1(幾塚)	16×14	2.1	8.14	1.8	1.22	(○)								(○)	
A1	2			4.0												
穂高古墳群	3	7.0		4.0	1.0											
A2	4	10.8×7.4	1.2													
	5	6.6	0.6													
	6(犬養塚)	16×11	2.7	7.2	1.4	1.1	○鐔	○		○	○	○		雲珠・杏葉	○(4)	
	7(鼎塚)	15.0	1.2	8.3	1.5	1.1									(○)	
	8														(○)	
穂高古墳群	1(弓いが塚)	15.0	2.5	9.2	2.5	1.95										
B1(1)	30			4.5	1.25											
	34	10.0		5.0	1.2											
	29	14.3	1.3	4.0	1.7											
穂高古墳群	3(蓮塚)	15.0	2.5	6.4	1.7	0.9										
B1(2)	2	10.0	2.1													
	4	15.3	2.7	10.2	1.7	2.3										
	5(金堀塚)	12×15		8.6	1.6	1.5	○方頭大刀	○	石突	○(3)		○			○(3)	
	6	12.5		7.55	1.2~1.4	0.8										
	7	8.4		5.36	1.4	0.8										
	8	8.3		5.1	1.4	0.8										
	9	9.62		5.94	1.3~1.8	0.9										
穂高古墳群	33	9.5		5.5	1.65											
B1(3)	12	8.0	1.5													
	11	9.0		9.0	1.5	0.4										
	10	14.8×14	1.8	9.0	2.4	1.4										
穂高古墳群	21	14.0	1.0	5.5												
B2(1)	22															
	21															
	23(祝塚)	13.8	1.8	4.0	1.8		○						○		○(5)	
穂高古墳群	25	6.5	1.5	6.5	1.5											
B2(2)	28			4.8												
	27			7.0	2.0											
	18															
	20			4.0												
	19			5.0	1.5											
	17	8.0		5.5	1.5											
穂高古墳群	16	11.0	1.53	7.5	1.3	1.0										
B2(3)	15			7.0	1.5											
	13	12.0	1.7	8.5	1.1~1.7	1.2										
穂高古墳群	32			6.0	1.5											
B3	31			6.0	1.1	0.1										
穂高古墳群C	1	11.7×18.5	2.0	7.2	1.4	1.1										
	2	11.0	1.3	6.0	1.2	1.3	○	○	刀子							
	3	10.5	1.5	7.0	1.3~1.7											
	4	9.1×14.2	1.43	5.3	1.5											
	5			5.3		1.6										
穂高古墳群E	10(寺島塚)	8.5	1.5				○									
	17(ショウシハウ殿)	6.3	0.6				○									
	2(三郎塚)	14.0	1.4	2.0	1.3											
	12(浜場塚1)									○						
	13(浜場塚2)	10.0					○(3)			○						
	6(狐塚3)	19.8	3.6				○(3)									鋲留2
	7(狐塚2)	15.0	2.0	5.0	2.1		○(2)鐔	○	刀子						○(1)	
穂高古墳群F	9	17.0	1.32	7.0	1.2~1.5	1.1			刀子				○			
	10	12.9	1.8	5.2	1.1											
	8															
	7															
	6(中上)	10.0	1.0	5.95	1.15	1.15										
	5	10.0	1.6	5.5	1.4											
	4	5.5×6.0	2.0													
	3	9.75	1.5													
	2	3.0	1.0													
	1(一本杉)	4.0	0.5	4.4	1.0	1.25										
穂高古墳群D	1(鋼鐵城跡)			6.4	2.7			○					○		○(1)	
穂高古墳群G	1(上原)			6.0	1.1		○		刀子	六花形鏡板			○	杏葉	○(2)	
	相笑ヶ塚	16.0	2.5	8.1	2.4		○頭椎大刀								○銀環	
潮古墳群	1(金山塚)						○			○						
	2															
	3															
	4															
	5															
	6															
	7															
	8	15.0		5.0	1.3				刀子						○(1)	
	お経塚															
B群出土															11	
有明山社所蔵															7	※
宮内庁所蔵															25	

写真図版

土器集中区復元

１　Ｆ９号墳発掘前全景（南東から）

２　Ｆ９号墳埋め戻し後全景（南東から）

図版２

第Ⅰトレンチ全景（南から）

第Ⅰトレンチ全景（北から）

図版４

１　第Ⅰトレンチ石室西壁（南東から）

２　第Ⅰトレンチ石室西壁（北東から）

1　第Ⅰトレンチ石室東壁(南西から)

2　第Ⅰトレンチ石室東壁(北西から)

図版６

１　第ⅠトレンチＤ１・Ｄ２・Ｄ３グリッド石室西壁（東から）

２　第ⅠトレンチＤ４・Ｄ５グリッド石室西壁（東から）

１　第ⅠトレンチＤ６・Ｄ７グリッド石室西壁（東から）

２　第ⅠトレンチＤ８・Ｄ９・Ｄ10・Ｄ11グリッド前庭部西壁（東から）

図版８

１　第ⅠトレンチＡ１・Ａ２・Ａ３グリッド石室東壁（西から）

２　第ⅠトレンチＡ４・Ａ５グリッド石室東壁（西から）

１　第ⅠトレンチＡ６・Ａ７グリッド石室東壁（西から）

２　第ⅠトレンチＡ８・Ａ９・A10・A11グリッド前庭部東壁（西から）

図版10

1　第Ⅲトレンチ全景（南東から）

2　第Ⅲトレンチ全景（東から）

3　第Ⅲトレンチ全景（西から）

1　第Ⅲトレンチ北壁西側(南から)

2　第Ⅲトレンチ北壁東側(南から)

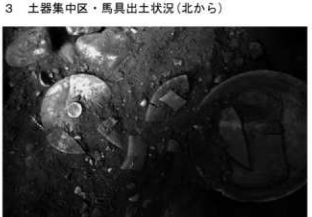
図版12

1　土器集中区・馬具出土状況（南西から）

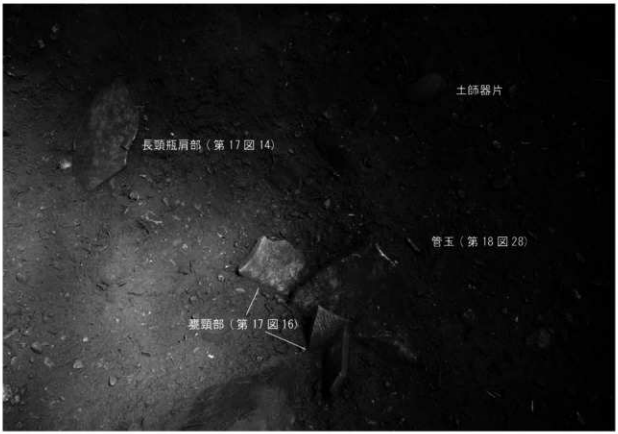
2　土器集中区・馬具出土状況（西から）

3　土器集中区・馬具出土状況（北から）

4　土器集中区・馬具出土状況（南から）

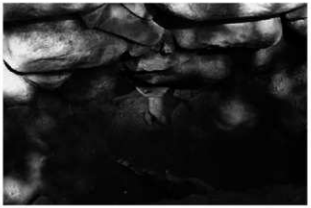


5　土器集中区平面図２検出状況（７・８を除く）



1　Ｂ６グリッド土器・管玉出土状況（西から）

2　Ｂ２グリッド勾玉出土状況（西から）



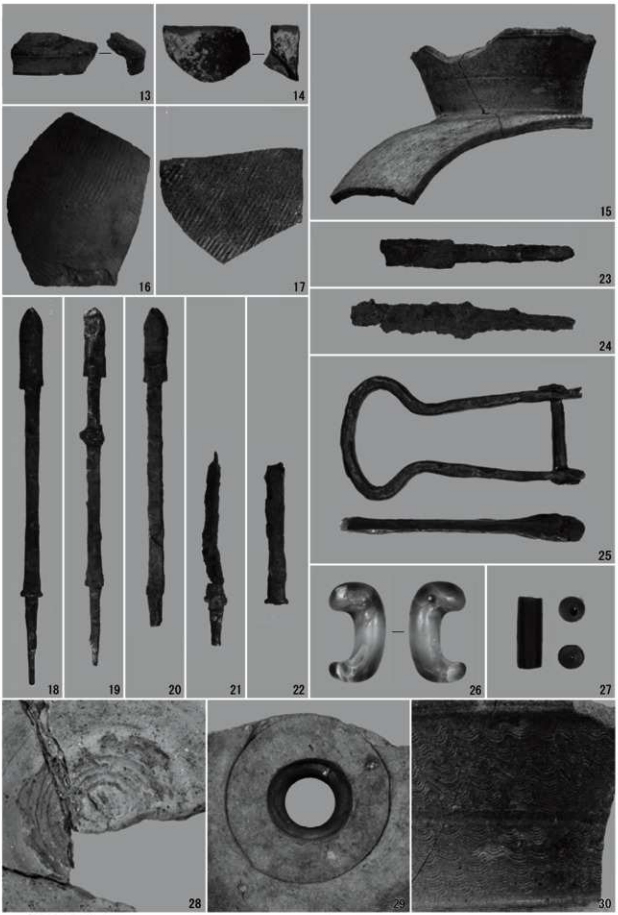
3　Ｂ４グリッド長頸瓶出土状況（西から）

4　Ｃ５グリッド鉄鏃出土状況（南から）

5　Ｃ７グリッド鉄鏃出土状況（南から）

図版14

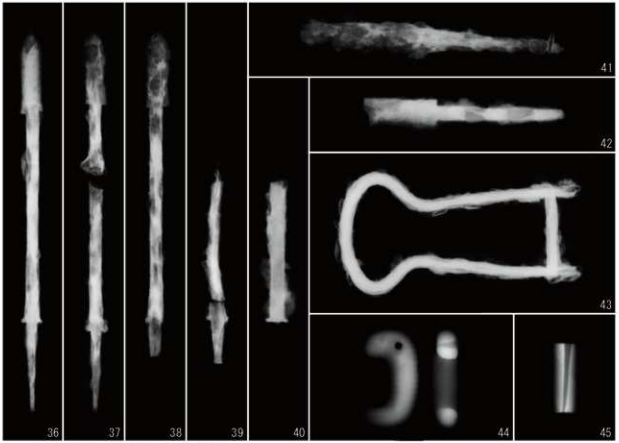
Ｆ９号墳出土遺物（9・11・12：S=1/3　他：S=1/2）



F９号墳出土遺物（15～17：S=1/3 13～14・18～27：S=2/3）

図版16

1　Ｆ９号墳出土遺物（31～35：S=1/2）



2　Ｆ９号墳出土遺物Ｘ線写真（S=2/3）

玉類				土師器	須恵器											備考
勾玉	管玉	切子玉	小玉		蓋	坏	高坏	短頸壺	甕	提瓶	横瓶	平瓶	フラスコ瓶	長頸壺	その他	
						(○)				(○)						伝　直刀、馬具、提瓶、坏出土
																以前は15基存在
○(5)	○(9)	○(4)	○(6)		○	○					○	○				
		(○)														
		(○)							○2	(○)						伝　馬具、金環、切子玉、提瓶
○(2)	○(2)	(○)						○		○			○	○(3)		人骨3体
																大型墳
																大型墳
																消滅
○	○	○		甕・坏		○	○			○						
																石室箱状
																石室箱状
																消滅
																石室箱状
																石室箱状
																石室箱状
																H7調査
○																
				○												
	○	○														
																H2調査
○(7)		○(16)	○(11)									○(2)	○(1)	○(1)	高盤	M44発掘
		○(1)		○	○	○	○							○	甕・子持壺	
		棗玉1														
					○	○	○	○	○	○		○				
○(7)	○(1)	○(2)	○(2)		○	○	○	○	○瓶形提					○		
○		○	○													松川村
																須恵器
					○				○	○			○	○		方墳周溝
○(2)		○(1)	○		○(5)	○(5)			○(2)		○(1)	○(4)	○(4)	○(2)		
		6														
		○														巫風形鋼鏃2、金銅鈴6
		8														

一郡に依然として古墳を築造し、維持している在地集団によって為されていることで、となると建立動機は自発的とするよりも外から、上からの力に依るものとせざるを得ない。あたかも、歴史の表面、安曇連と天皇家の関係を考える必要がある。

蘇我氏に依倚し、次いで大王家と結び付いて中央政界に復帰した安曇連は天智の親百済外交に便乗、斉明七(六六一)年に阿曇比羅夫連は百済救援に出兵、そして天智二(六六三)年に白村江で大敗、動員された四万二千の兵のうちには安曇郡出自者が相当に居た筈である。敗戦で大量の百済遺民が天智四年に四〇〇、五年に二〇〇〇、八年に七〇〇人が近江国に入植しているが亡命の民はこれだけではない。天智一〇(六七一)年に郭務悰は一〇〇〇人を送還してきている。[注]

その翌年が壬申(六七二)年である。激しい動きの中の安曇連は正史上には記されていないが変り身のうまさで天武持統朝を泳ぎきったというべきだろう。

天武の仏教政策は中央集権国家建設に向っての一環で原明一一年勅願の大官大寺の建立、皇后の病気平癒を祈っての薬師寺の建立、天武一四(六八五)年三月には諸国の家毎に仏舎をつくり仏像と経を置き礼拝供養せよとの詔を出している。経は鎮護国家の金光明経・仁王経だろう。

専制君主の政策に安曇連の部民集団によってつくられた安曇郡は直ちに反応する。体制側から見た場合、白村江の敗戦を体験している集団による郡と云うことで特別視されたかとも思われる。

壬申の乱に勝利した天武は人心の掌握に努めている。神祇尊重政策はその表われの一つだが外に出て高度な文明の洗礼を受けた集団に対しては仏教保護政策が有効である。

安曇郡内には百済難民や後に送還された捕虜が居た。彼等の存在を示す資料はないが、七世紀後半、東国には未だしであった寺院が早や早やと安曇郡に建立されたのが唯一の証左となる。

註

(1)岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁「有明古墳群の再調査」信濃三五―一一、一九八三年

(2)桐原健「古墳時代―穂高町の古墳時代様相」『穂高町誌歴史編』所収、一九九一年

(3)三木弘・寺島俊郎・西山克己「長野県南安曇郡穂高町所在魏磯城窟古墳について」信濃三九―五、一九八七年

(4)明科町教育委員会「潮神明宮前遺跡Ⅱ」二〇〇〇年

(5)岡林孝作「須恵器フラスコ形長頸瓶の編年と問題点」『日本と世界の考古学』所収、一九九四年

(6)三木弘「有明古墳群の再検討(1)」信濃四三―一二、一九九一年

(7)原嘉藤「長野県東筑摩郡明科町明科廃寺跡について」信濃七―七、一九九五年

(8)明科町教育委員会「明科廃寺址」、二〇〇〇年

(9)塩川原・桜坂にある明科廃寺の創建時瓦を焼成している瓦窯址で端部に連刺のある須恵器坏蓋が伴出している。

(10)土屋和章「周辺遺跡及び市内の調査について」『シンポジウム明科廃寺』所収、二〇〇三年

(11)三好博喜「考古」『明科町史』所収、一九八四年

(12)藤沢一夫「屋瓦の変遷」『世界考古学大系』4所収、一九六一年

(13)林博通「南滋賀廃寺」『近江の古代寺院』所収、一九八九年

(14)後藤四朗「大化前後における阿曇氏の活動」日本歴史二二六、一九六七年

(15)高家郷内の上川遺跡から話は主屋に庇の付いた大型建物が溝と柵で画された域内に、隣接する環濠内にも大型建物が構営されている。環濠外には一九棟の掘立柱建物が蝟集し円面硯も出土している。七世紀後半から八世紀初頃に置かれる。

(16)直木孝次郎「百済滅亡後の国際関係」朝鮮学報一四七、一九九三年

く先端は剣形を呈する。

三類は連華文の外側に弧線が配される。周縁は高く素文。

宇瓦の文様は三重の弧文と唐草文、前者の形状は無顎の直線顎と段顎の浅顎、後者は無顎の蹄顎、ただ第二次調査では出土しておらず混入の疑いが強い。

三好は鐙瓦一類を七世紀後半に置いており、逆刺のある須恵器坏蓋を併出している桜坂窯の調査所見がこれを補完してる。

文様が付された鐙瓦と宇瓦は寺院の創建年次・築営氏族を推察させる鍵であり、瓦当笵は同系寺院間に流通・伝世されるからその線からの追求も可能である。

鐙瓦の推移は外縁の形状に表現されるとする藤沢一夫の論[10]によれば外縁に二重圏線を続らし高さ二センチを計る単弁八葉蓮華文は第二期類の外区重圏文広高縁、内区單子葉弁文系類に属し、これに伴う重弧文の宇瓦や一本造りの製作技法を勘案すれば滋賀・南滋賀廃寺の瓦に結びつく。南滋賀廃寺は大津宮時代(六六七～六七二年)に大津京内に用厚寺式伽藍配置をとって創建されている。[11]

建立に要した時間だがこの地にあって最初の寺院建立という意味では大和の飛鳥寺建立と変りはない。飛鳥寺は崇峻元(五八八)年に計画が立てられ推古四(五九六)年に塔が落成し寺僧が住み始めた。銅製の丈六仏が完成したのは一四(六〇六)年で八年から一九年の歳月が流れている。

明科廃寺も完成までに十数年はかかった筈で、この間に白村江の敗戦・庚午の編籍・壬申の乱・浄御原令の発布・筑摩行宮の建設などの国家的事件が連発している。

8

七世紀後半、安曇野市域の古墳と寺院は並存している。改めてこの地域の特性を確認しておきたい。

八世紀第Ⅲ四半期の安曇郡には部姓郡司が任ぜられている(天平宝字八年安曇郡主帳安曇部百鳥)。この地域の村落は内陸漁撈民で構成されており、首長を含めた村落全体が海民の管掌に当っている安曇連氏の部民となった。

そのことで村落内の支配関係に急激な変化は生ぜず農村とは異なる漁撈民社会が存続維持できた。安曇郡四郷中の高家・八原・前科郷は郡内河川による五〇平方キロの滞水域周縁に形成されている。その時期は横穴式石室が構築され始めた六世紀後半だろう。

寺院を建立し維持するには古墳築造に数倍する権力・財力を要する。当時の安曇郡内で最大の権力を保持しているのは郡司クラス、国造科野は七世紀後半時の律令制施行で一〇郡に分割された。七郡の郡司は科野国造氏の一族が占めが安曇・高井・佐久郡の郡司職は他氏に譲っている。安曇郡司は自身の権勢に加えて背后に中央の安曇連を負っている。

応神朝に全国の海人管掌を命ぜられた安曇連は履中期の失脚後水らくの雌伏を経て推古三一年に復活、蘇我氏や皇室に接近することで勢力を増し持統五年には墓誌上進を許された一八氏族中に入っている。安曇連には海人掌握の他に航海、外交の任があり外交は百済との折衝を専らとし、蘇我・皇室との関係もあって早くから仏教への理解を持っていた。推古三二年四月に安曇連某は法頭となり孝徳朝には難波の安曇郡司は部姓郡司であるので郡内には安曇連に隷属している在地集団が存在している。

在地集団は郡内構築の古墳群により最低六つの支族に分れ夫れ夫れの消長を遂げながら七世紀を迎えている。

この時、穂高古墳群に係る支族は新規の古墳を築かず、既築古墳への追葬を行っているところから斜陽の途を辿っており、それに対し潮神明宮前古墳群に係る支族は新興勢力と受けとれる。

9

七世紀に入り新興の支族を核として高家郷内に新規の古墳、明科廃寺・郡衙的村落[12]が構営されたことを推測したが、要は古墳と寺院という性格が全く異なるモニュメント建設を安曇部なる固有名を冠した在地集団が担当したことにある。寺院建立に目を当てるならば、無仏の国と呼ばれ白鳳寺院は存在しないとされてきた信濃の

横穴式石室墳だから追葬は可能だが追葬者は限られている。五支群と二基の単独墳にはそれを祀り管理する末裔がいる。穂高古墳群は七世紀中葉まで機能していた。

安曇平西縁・東縁の古墳群築造氏族は同一だろう。潮神明宮前古墳群は穂高古墳群の一支群と見做してよい。片や一世紀余の歴史があり群形成時の古墳は松本平の中にあって異彩を放っており、潮神明宮前古墳群は穂高古墳群終焉時に出現した。

副葬品は金握塚・狐塚三号墳・上原古墳に追葬されたと同じフラスコ形提瓶・長頸瓶・平瓶だが八号墳は周湟を巡らした径一五・二〇メートルの墳丘、石室幅は一・三メートルを計る。七号墳は方形墳かもしれない。

5

明科廃寺址は昭和二八年に明科字石堂で発見された。住宅改築で布目瓦片六〇三点が出土し、うちに五点の鐙瓦、二点の宇瓦・一点の鴟尾、九点の瓦塔片が含まれていたところから史料には記載のない古代寺院址と認識され遺跡名は小字名ではなく表記の名称となった。[5]

四六年が経過した平成一一年、宅地の再度改築で南北一二〇、東西九〇メートルの範囲が除土され南北方向に四棟の建物址と道路址が露呈、多量の丸瓦・平瓦片が出土した。鐙瓦片は一二、宇瓦片は三点で、一類とした素弁八葉蓮華文の鐙瓦は第一建物址のP4・P12、二類とした素弁一二葉蓮華文は第二建物址のP15（又はP11）から発見されている。[6]

前後するが平成九年には犀川の対岸で明科廃寺当初の瓦を焼成したとされる桜坂瓦窯址が調査されている。[7]

廃寺に近い栄町遺跡では七号住居上層出土の坏蓋中より宝珠形の摘みを付けた逆刺ある数点を検出。塔の原の上手屋敷二次調査では方形の掘り方をもち柱間三メートルを計る五間×四間の大型建物址を露呈している。[8]

6

平成一一年の調査域は中枢を外れた東辺で、検出された第一建物址は西に雨落ちの溝を具えた桁行五間、梁間二間（三間になる可能性もあり）の規模（五×二・二メートル）で、径・深さ一メートル前後の円形プラン柱穴一三箇が梁間二・五、桁行四・五メートルの柱間で穿たれている。

第二建物址は第一建物址の一層下に一辺三メートル弱の掘り方を設け中に径四〇センチ前後の丸柱を建てている。規模は二間二間（一・一・五メートル）の総柱だが桁を北に延ばして五間とする復元もされている。柱間は一号址より広く五・五メートルを計る。

一・二号建物址の北二メートルに幅一メートル、深さ六〇センチの布掘りがコの字形に巡って黒土が充満、上面から柱穴七ヶが検出されて梁間一間（五メートル）、桁行それ以上の三号建物址となった。柱穴は径七〇センチの円形で総てに径四〇センチの木柱が残存、柱間は二・五メートル。布掘りで画された内区は整地のみで地業の痕跡はない。方形の掘り方はP61を布掘りが切っているので前後は判る。

7

寺院の創立時を示す痕跡は遺構からは窺われなかった。出土土器は体部が直線的に開く土師器坏・内黒坏、扁平な摘みを付け口縁端部を折り曲げた須恵器の坏蓋で八世紀末から九世紀初頃と時期は下る。

結局は瓦、それも一七点の鐙瓦と五点の宇瓦だけとなる。

古代にあって、瓦で葺かれた寺院は最低でも塔と金堂を保有していた。明科廃寺は丸瓦・平瓦の多量出土から全瓦葺きと目してよい。金堂の大棟を飾っていただろう鴟尾の破片も出土している。

三好博喜は鐙瓦を三類に分けている。[10] 一類、瓦当の径は一三・三、外縁には二重の圏線が巡り高さは一センチ。内区主文は素弁八葉蓮華文で中房は小さく蓮子は一プラス八、中房から発する後縁で区切られている蓮弁は中央に鎬が走り先端はやや尖る。瓦当接着手法は一本造り。

二類の主文は細素弁一二葉蓮華文で瓦当の径は一類より一廻り大きい。中房も大きく一プラス八プラス一二の蓮子が付されている。間弁の稜線は無くなり蓮弁は長

に比すると中辺のそれはやや小さい。石室形状を箱状と記しているものが五基もある。

B支群よりの分派とも見られるC群五基は富士尾沢の奥処に分布している。石室の規模により二群に分けられる。やや小型のC2号墳からは直刀・鉄鏃・刀子と美濃須衛窯の須恵器が出土していて追葬はされていた。

E群は川窪沢川と烏川で画された「牧」の台地上に現在七基が知られている。

F支群と上原古墳（G1号）は烏川を堺とする旧西穂高村に所在する。

上原古墳は烏川により分岐している穂高沢の左岸、F支群は柏原沢右岸に縦列している一〇基で、これら縦墳の末端は烏蹴状に分れ、矢原・白金・等々力に三〇から七〇センチの耕土域を形成した後に万水川に入っている。一〇基の古墳だが上流に位置する古墳は大きく下流の古墳は概して小さい。矢原・白金・等々力は古墳後期からの集落址でもある。

2

穂高古墳群に対する東縁の旧東川手瀬の神明宮前には丸基からなる古墳群が築造されている。1号墳（金山塚）は早く発掘され直刀・轡・須恵器の出土が報ぜられている。八号墳は平成一七年の調査で周濠の巡る推定径一五メートルの円墳。内部主体は横穴式石室で羨道部はやや幅を狭めている。幅は一・三、現存長は五メートル。石室内と周濠からは刀子片・鉄鏃・耳環各一、勾玉二、切子玉一、丸玉二一、臼玉六・小玉一〇四顆、須恵器は坏蓋各五、平瓶・フラスコ形提瓶各四、甕・長頸瓶各二、横瓶一点が出土[2]。七号墳は径二〇メートルを計り隅丸方形プランで幅五メートルの周濠を繞らす。陸橋は北東隅に設けられていて濠中より長頸瓶が出土している。

3

立地が異なる二つの古墳群に共通している点は終焉の時期が同一であることで、フラスコ形提瓶と長頸瓶が指標となる。

フラスコ形提瓶は轆轤で挽き上げた球体に口縁に特徴ある頸部を嵌入した器形で把手は付されていない。かかる須恵器は七世紀代に湖西窯で生産され東は東海・関東・東北地方まで分布している。頸部の狭長と口縁に凹みある縁帯と直下に断面三角形の突帯を続けすをもって特徴とするが、やがて頸部は太く短かく口縁の縁帯は幅を広げ突帯は消滅する[3]。

長頸瓶には素縁と端面をもつものの二種があり、前者には透し孔のある台付から亀甲状に盛り上った肩部が低平化し稜線を強く示すまでの経過がある。端面をもつ後者に台付はなく肩部は甲張り状から低平に変りつつある。肩部を同じくする平瓶や幅広い縁帯を続けすフラスコ形提瓶と並存する。

その須恵器は穂高古墳群にあっては各支群の草分け的古墳に追葬副葬品として存在する。

長頸瓶はB支群の金掘塚、E群の狐塚三号墳、F群の九号墳と上原古墳、フラスコ形提瓶は魏磯城窟、B群の金掘塚と祝塚付近古墳出土である有明神社収蔵品、E群の狐塚三号墳[4]。なお、これとセットを為す坏蓋・坏身・把手を有する平瓶・小型甕がA群の八号墳、B群の有明神社蔵品、E群の狐塚三号墳、F群に含まれる上原古墳から出土している。

4

相違点は古墳群の成立時期にある。穂高古墳群の特質は先行する古墳のない地域に六世紀後半突如として規模形状の整った横穴式石室内蔵円墳が出現したことと、副葬品では金銅製品中に優品の見られたことである。

単独墳や各支群の上流地域築造古墳の石室はいづれも規模大きく、側壁は大型石塊の乱れ積、奥壁に鏡石は用いられていない。副葬品のセットで、直刀の中には金銅装の儀刀が混り、馬具中には金銅張りの鏡板・杏葉・雲珠・留金具などの飾り馬具、装身具では金環、玉類は勾玉・管玉・切子玉主体の構成。

各支群は以後、世紀余に亙り下流域にまで範囲を広げていくが、新規古墳は墳丘・石室共に縮小しており副葬品を欠く古墳も多い。七世紀に入ると古墳の築造は止り、上流域の既築古墳への追葬へと変る。そのことは既述した。

附編　安曇郡に観る古墳と寺院

桐原　健

古墳築造が止んで寺院建立に移るとは夙に定説化している現象で、転換期は六世紀の第Ⅳ四半期、畿内にあっては前方後円墳の終焉をもって目安としている。

天皇陵では敏達陵が最後の前方後円墳で、彼の没年は敏達一四乙巳(五八五)年、敏達は仏法を受け付けなかったが、一二年に蘇我馬子は石川の宅に仏殿を設けており、次代の用明二年には仏教受容の可否をめぐっての闘争が起っている。

前方後円墳消滅後の一世紀は古墳と寺院が並存している終末期で政治面では仏教受容派が勝利を納め、親百済派が中央集権体制の確立を図ってのクーデターが成功した時期と重なる。

一見して古墳から寺院への転換動機には政治性が強く、事実、仏教公伝後八六年の推古三二年(六二四)には四六寺、更に六六年後の持統四年(六九〇)には五四五寺と云う飛躍的な数字には政治色濃厚な上からの工作が思われる。

しかし、ことは精神生活に係り、転換動機を政治性だけに限るのは難しい。白鳳期、伊勢・尾張・美濃までは一郡に数寺の建立があるも以東には見られず、美濃東隣の信濃では延喜の頃でも信貴山の命蓮をして「無仏世界のような所にいかじ」と云わしめている。

拙稿にはその意もあって信濃を場とし、古墳と寺院の関係を窺ってみようとする。安曇郡に恰好な資料がある。

旧南安曇郡の大分と旧東筑摩郡の一部を合わせて平成一七(二〇〇五)年に安曇野市が発足した。市域の西縁には穂高古墳群、東縁には潮神明宮前古墳群と明科廃寺が存在している。

1

市域西縁に立地する穂高古墳群は五支群と単独墳二基の六四基から成っている。

且つては一〇〇基を超えていたらしい。[1]

支群名は北より付されている。旧有明村の宮城地区にあるA支群(8基は中房川から分岐している油川左岸に添っていて最高処にある陵塚の他に一基、犬養塚や県塚がある後者は一五基から成っている。

油川は自然流で東流して乳川に合する。取入口である大土井地籍にはプロト有明山社が奉祀され、末端部の矢村・新屋・古厩・耳塚の耕土は三〇から七〇センチと厚い。耳塚地籍からは古墳後期の土師器出土がある。[2]

A支群よりやや離れて単独墳の巍磯尻窟(D1号)がある。巨石下の間隙を片袖の横穴式石室に利用していて鳥居龍蔵はドルメン式古墳の名称を与えている。窟内の三面は板石で囲まれ、飯田の石室D類の範疇にも含まれる。[3]

早くから開口していて残存遺物は少ないが金環・銅金具破片、須恵器では蹠の口縁部・フラスコ形提瓶、高坏の破片がある。

油川の南一・五キロメートルに天満沢、更に一キロメートル離れて富士尾沢が東流して乳川に合流している。

B支群は天満沢筋の三二基で、左岸奥処に四、連塚から林道に添って縦列八、沢よりに四基が存する。最奥のうちの一基がちいが塚で右壁には天然の磐石が用いられている。そこに所在する磐石によって古墳の位置、石室の構造が決められたと云う次第だが省力型古墳とも思われる。連塚との間隔は四〇〇メートルでA支群の陵塚と犬養塚のそれと類似している。林道添いの縦列八基については下流に位置する程に墳丘・石室規模の縮小していく様が見える。

石岸の別荘地域には一六基が広がりをもって分布している。位置により、上(四基)・中(七基・下(五基)辺に分けると上・下辺の墳丘・石室はやや大きく、それ

報告書抄録

ふ り が な	ながのけんあづみのし　ほたかこふんぐん　2013ねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	長野県安曇野市　穂高古墳群　2013年度発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	國學院大學文学部考古学実習報告
シリーズ番号	第50集
編 著 者 名	(編集)吉田恵二　中村耕作　深澤太郎 (著者)浅川尊裕　麻生浩史　内田はるか　尾上周平　神谷まゆ　小林拓真　新川実里 鈴木広人　篤我井亮太　田中哲也　田邉慧美里　富山悠加　長嶋幹也　福嶌彩子 藤好史都　松井勇樹　三輪鈴音　村山　武　森野　稔　渡辺悠樹　浪形早季子 桐原　健
編 集 機 関	國學院大學文学部考古学研究室
所　在　地	〒150-8440　東京都渋谷区東4-10-28　TEL03(5466)0248
発 行 年 月 日	2014(平成26)年7月31日

遺跡名	所在地	市町村番号	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
穂高古墳群 Ｆ９号墳	長野県安曇野市 穂高柏原3653	20220	2-F9 (穂高古墳78)	36° 19′ 08″	137° 51′ 29″	20130803 ～ 20130812	32.65㎡	学術調査

所収遺跡名	種　別	時　代	主な遺構・遺物	特記事項
穂高古墳群 Ｆ９号墳	古　墳	古墳後期	直径17.0m、高さ1.32mの円墳。須恵器片(蓋、杯、長頸瓶、子持壺など)、土師器片、馬具、鉄鏃、刀子、勾玉、管玉、ウマ骨	烏川扇状地の南側に位置するＦ群の中でも最も上位に位置し、二つ塚と通称される２基の古墳のうちの１基。

要　約

2009年度から始まった國學院大學考古学調査法(考古学実習)の一環とした学術調査の５年目を迎えた。今年度は、昨年度に引き続きＦ９号墳の発掘調査を行った。第Ⅰトレンチと第Ⅲトレンチとの土層比較から、石室基底部は旧地表下に構築されているものと推測される。石室は床面の検出には至らなかったが、奥壁の現状最下段では大形の石材が確認できた。また周溝も検出されなかったが、墳丘東側裾付近は削平を受けていることが確認された。第Ⅲトレンチからは墳丘の盛土と思われる層も一部確認した。出土遺物には須恵器・土師器・馬具・鉄鏃・刀子・勾玉・管玉などがあり、閉塞石と思われる礫の付近からは、８世紀前半の蓋杯や高杯・長頸瓶などの須恵器が集中的に出土した。出土遺物の年代は６世紀後半から８世紀前半である。

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権(発行)者の承諾なく、この報告書を複製して利用できます。利用にあたっては出典を明記してください。なお、ＰＤＦ版を長野県遺跡資料リポジトリで公開しています。

國學院大學文学部考古学実習報告書　第50集

長野県安曇野市
穂高古墳群
2013年度 発掘調査報告書

2014年７月31日　発行

編集　吉田 恵二
中村 耕作
深澤 太郎

発行　國學院大學文学部考古学研究室
〒150-8440　東京都渋谷区東４－10－28
電話　03(5466)0248
印刷　株式会社　秀　飯　舎